

ファイアーエムブレム
風花雪月 異界の戦
士達

カオスキマイラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

邪竜ギムレーが討伐されてから5年後……

『ファイアーエムブレムIF』での戦いから帰還したウード、アズール、セレナの三人は久しぶりに家族に再開した。

それから少しして、今度は神竜ナーガの頼みで『ファイアーエムブレム 風花雪月』の世界にブレディ、シンシア、ノワールを連れて向かうことに……。

『ファイアーエムブレムIF』に再登場した三人組がブレディ、シンシア、ノワールと一緒に『ファイアーエムブレム 風花雪月』に転移いたします！

全4つのルート展開を描いていく予定です！※因みに原作主人公はベレットです

六人組が士官学院に入学する都合上六人組が入らなかった2クラスにオリキャラをそれぞれ六人ずつ出すことをご了承ください。

目次

序章	フオドラ大陸へ	1	
序章	夜明け前の出会い	15	
序章	ガルグⅡマク大修道院	28	
ワード達の名簿		43	
白雲の章	青獅子の学級	53	
白雲の章	青獅子の学級	53	
70	白雲の章	数日後の青獅子の学級	
白雲の章	模擬戦	85	
白雲の章	二つの過去	94	
白雲の章	盗賊退治	108	
白雲の章	白雲の章	194	
白雲の章	白雲の章	178	
白雲の章	白雲の章	158	
白雲の章	白雲の章	140	
白雲の章	白雲の章	123	
	白雲の章	ロナート卿の叛乱	
	白雲の章	武術大会	
	白雲の章	女神再誕の儀	
	白雲の章	天帝の剣	
	白雲の章	ノワールの呪術	

序章 フォドラ大陸へ

邪竜ギムレーを討伐してから5年……。

イーリス大陸にあるイーリス聖王国にとある三人が戻ってきた。

イーリス聖王国の国王クロムは謁見室で公務を行っていた。そんなクロムに衛兵が駆け寄ってきて報告した。

「クロム様。ウッド、アズール、セレナと名乗る三人組が謁見を求めています。」

「あの三人が戻ってきたのか!? 直ぐに通せっ! それとリス達にも伝えるように!」

「はっ!」

衛兵が下がってしばらくすると、謁見室にウッド、アズール、セレナの3人が入ってきた。

「お久しぶりです! クロム伯父さん!」

「お変わりがないようで安心しました。」

「長い間連絡を取らなくて申し訳ありませんでした。」

「いやいいさ。久しぶりだな三人とも……。いい目つきになったな。」

「はい。色々ありましたから。」

「そうか……。リズ達にも顔を見せていくんだろう?」

「「はいっ!」」

「ならば、旅の話は夕食の時にでも聞かせてくれ!」

「「はいっ!」」

他の予定も入っていたためクロムは一端会話を切り上げたので、三人はそれぞれの親しい人のところへと向かって再会を果たした。その中で、ウッドとアズールと一緒に連れてきたオロチとフェリシアを見てリズとオリヴィエはびっくりしたり、カミラの母性に甘えて少し訓練をサボっていたことがティアモにバレたセレナが訓練場に引きずられていく一面もあった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そんなこんなでウッド達がイーリス聖王国に戻ってから十四日後……

「あれっ? ウード? こんな時間にどうしたのこんな場所で……」

「ふっ……。それはこっちのセリフだ。蒼穹のラズ……。アズールよ……。」

「……。ラズワルド……。か。なんだか今でも信じられないよね、僕たちが暗夜王国でマークス様たちにお仕えしていたことがさ……。」

「……。そうだな。レオン様やゼロと一緒にカムイ様を手伝って、戦ったよな……。」

「そうだね……。」

ウードとアズール、そしてこの場にいないセレナの三人は透魔竜ハイドラの依頼を受けて、暗夜王国で戦っていたのだ。ウードはレオンに無茶難題を命じられて嬉々として任務に取り当たったことを思い出して、アズールはナンパをしていたことがバレてマークスに説教されたことを思い出していた。

「ハイドラさんの依頼を達成した後、俺達3人はかなり悩んだよな……。母さんたちがいるこの世界に戻るか……。それともレオン様やオフェリア達のいるあの世界に残るか……。そして、絶望の未来のあの場所に戻るか……。」

「……うん。マークス様やソレイユ達と過ごす日々も掛け替えのないものだったしね……。」

あの世界では彼ら3人はオーデイン、ラズワルド、ルーナと名乗っていた。正気を失う前のハイドラの力により、暗夜王国でマークス、レオン、カミラと出会い、ギムレーとの戦いの中では得られなかった掛け替えのない時間を過ごしていた。そしてカムイとアクアに協力して暴走してしまっていたハイドラを正気に戻した彼らは、悩んだ末にマークス達と別れることにした。しかしそれでも彼らには心残りがあり、あの世界に残してきた自分の子供のことは心配になっていた。

「……そういえば、オロチはどうなの？」

「……聞いてくれるな……。サーリヤさんと意気投合しちまってちよつとヤバいんだ……。」

「あー……。確かに呪術を使っているから意気統合してしまうよね……」

「そういうお前はどうかだよっ！」

「……こつちはこつちでフェリシアには苦勞しているよ……」

二人の妻のオロチとフェリシアはイーリス聖王国に戻ってきたときは驚かれたが、今では姑達と仲良くなっている。……彼女たちの夫としては別の意味で心配事が存在する。オロチは元ペレジアの呪術師のサーリヤと意気投合してしまって、ヤバそうな実験を行っている。……そしてその実験台にされるのはウッドとサーリヤの娘であるノワールの二人であった。一方でフェリシアはフェリシアで相変わらずのドジで周囲を振り回していた。

二人して溜息をついているとそこにセレナがやってきた。

「こんな時間に二人して何やってんのよ……。ウッド、アズール……」

「やあセレナ！ いつ見ても君は可愛い……」

「結婚しているんだからそれ止めなさいよ……。」

「セレナも来たのか……。アズールと一緒に暗夜王国での日々を思い出していたんだ……。」

珍しくまともに返答してきたウードの言葉にセレナは納得の表情をした。

「そっか……。カミラ様やベルカとお別れしてからもう二週間も経つのね……。」

「……。ああ。なんだか夢でも見ている気分でき。あの国でもこんな夜景だったよな。」

「うん……。マトイとツバキは元気にやっているかしら……。」

「……。オロチとフェリシアと一緒に戻ってきた僕とウードと違って君は二人を置いてきたんだもんね……。」

「ええ。……出来ることなら母さんと父さんに二人を会わせただかつたな……。」

先程まで母親のティアモに扱かれていた彼女であったが、マトイをティアモとルフレに合わせられなくて残念に思っていた。それはウードとアズールの二人も同じであった。

あの世界での出来事を思い出して三人は夜景を眺めていた。するといきなり目の前が光に包まれた。

「何っ!?!」

「何なのよっ!?!」

「……。なんかデジャヴだな……。」

眩しい光が消え去ると謎の空間にいた。一面白の空間は不気味で会って三人を不安にさせた。しかし今回は三人以外にも人がいた。

「いたた……。」

「……んっ!?……ここは……。」

「あれあれ!? なんなのここはーっ!?」

いきなり変な場所にいるためノワール、ブレデイ、シンシアの三人も困惑していた。

「ノワール、ブレデイ、シンシア!?!」

「あれっ!? ウード、アズール、セレナっ!?」

「なんでお前らがこんなところにいるんだ?」

「ふっ……それに関してはそっくり返そうか……。」

いきなり謎の空間に飛ばされて困惑していたが、一先ず顔見知りがいたため六人は落ち着いた。

「それにしてもなんでいきなりナーガ様の間に飛ばされたんだ……。」

「ふっ……それはだな。」

「変なことを言うのは止めろよな。どうせ適当なんだろう?」

「……………」

「ず、凶星だったのね……。」

「揃いましたね。」

戦友同士で話が盛り上がっていると、ナーガの声が聞こえてきた。六人はナーガに向

き合った。

「まずはウード、アズール、セレナ。ハイドラ神の依頼をよくぞ達成いたしました。彼の思念は救われております。」

「じゃあ、ハイドラさんからの依頼に関しては知っていたのですか!？」

「ええ。」

「前にウード達が言っていた暗夜王国ではなしか……。」

「父さん達には説明を少しばかり省いたんだっけ?」

先日未来ルキナを含めた絶望の未来から来たメンバーにだけ、ウード達は暗夜王国での話を詳しく説明していたため彼らは事情を知っていた。

「……そんなハイドラ神からの依頼を達成した三人とノワール、ブレデイ、シンシアの三人を加えた六人に依頼があります。」

「俺達六人に依頼か……。」

「詳しく聞かせてください。」

そこからナーガは今回の依頼に関して六人に説明しだした。六人はナーガの話を真剣に聞き、全員依頼を受けることを了承した。セレナ、ノワール、シンシアの三人に関しては18歳までナーガの力で若返るということに興味津々だったが……。

「さて、そろそろ時間ですね。」

「フォドラ大陸か……。」

「どんな場所なんだろうな……。」

「でもあたし達なら大丈夫だよっ！」

「ふっ、この漆黒のウードの力を見せる時が来たか……。」

「あんた……。あっちでもそれやるつもり……？」

「まあまあ、セレナ落ち着いて……。」

「ウード、アズール、ブレデイ、セレナ、ノワール、シンシア……頼みましたよ。」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ナーガの声と共に絶望の未来からきた六人はフォドラ大陸に旅立っていった。ウード達六人はナーガの依頼でフォドラ大陸に向かった。長いこと光の渦に飲まれていて、それが収まると見知らぬ場所にいた。

「……ここは何処だ？」

「た、たぶんフォドラ大陸だと思うけど……。」

「……草木しか存在しないね。」

「いきなりテントなしでの野宿は嫌なんだけど……。」

「……そういつても野宿するしかないよね。」

「……向こうから闇夜に輝く光が見えるぞっ！」

「普通に明かりが見えると言えやっ！」

「と、取り合えずそちらに向かいましょう！」

六人は明かりが見えた方向に向けて向かっていった。しばらく歩いていると複数のテントを発見した。

「おいつ！誰かいるぞっ！」

「誰だ!？」

近づいていたため当然のごとく見張りに六人は見つかった。

「す、すみません。私達旅をしているものですが……。」

「明かりが見えたからこちらに伺わせていただいたのですが……。」

「あっ！あたし達は山賊じゃないから安心して……！」

「……見るからに怪しいな……。どうする？」

「どうするつたつて……。取り合えず団長を呼んでくるか……。」

「そうだな。」

見るからに怪しい六人を見た見張りはその集団の団長を呼びに行った。

「お前達っ！一先ず団長が来るまで大人しくしているよっ！」

「まっ、仕方がないわな。」

「そうね。彼らからしたら怪しいしね……。。」

しばらくすると複数の連中を引き連れて見張りが戻ってきた。

「……報告を聞いてきてみれば見慣れないガキどもだな……。」

「道に迷った旅のものらしいですが……。」

「ほう……旅のものか……。お前等何処から来た？」

「僕たちはイーリス聖王国から旅してきたものです。」

「イーリス聖王国？聞いた事ねえ国だな。……もしかしてお前等フォドラの外から来た連中なのか……？」

「は、はいっ！土地勘がなくて彷徨っておりまして……。」

「見知らない場所だから迷っちゃったっ！」

「やれやれ、のんきなガキだぜ……。」

「団長！どういたしますか？」

「そうだな……。お前等行く当てであるのか？」

「いやねえな。」

「そんなら、しばらくは面倒見てやるよ。俺の息子と同一年くらいのがキどもを見捨てるのは目覚めが悪いからな……。」

「えっ!?!息子!?!」

「団長、よろしいのですか？」

「ああ。今夜は遅えから取り合えず休ませてやれ」

「はっ！」

団長と呼ばれた男は部下にそう告げると天幕に立ち去っていった。その後ウード達は見張りの案内で宿泊用テントに案内された。荷物を下ろした六人に明日色々確かめることを見張りは告げると職務に戻った。ウード達は一先ず休むことにしてテントの中で眠りについた。

翌日……。アズール、セレナ、ノワールの三人は朝早くに目覚めてテントの外に出た。

「やあっ！早いね二人とも！」

「おはよう、アズール。」

「お、おはよう……。」

「セレナとノワール眠れなかったのかい？」

「あたしは問題なく眠れたわ。ノワールはどう？」

「……母さんの実験がなかったから久々にゆっくり眠れたわ……。」

「……………」

ノワールの母であるサーリヤのことをよく知る二人は何とも言えなかった。

「ん？、早いなお前等」

「くっ……!! 静まれ! 俺の血よ……!!」

テントの前で話しているとブレディとウードの二人も起きてやってきた。

「お、おはよう。」

「あれっ?! シンシアは……?」

「あいつならまだ眠っているぞ……。魔界の呪文を呟いているがな……。」

「寝言を言っているといいなさいよ……。」

「因みにシンシアの奴は『グリフォンプリン美味しそ〜』とか『ヴァルハルト饅頭が空から降ってくる〜』とか寝言で呟いていたな。」

「相変わらず意味不明な寝言を言っているんだね……。」

「ん? 早えな、おめえら」

そんなこんなで会話をしていると後ろから昨日会話した団長が此方にやってきた。

「「おはようございます!」」

「おう、全員起きているのか?」

「まだ一人寝ています。」

「んじゃあ、朝飯食ったら色々事情を聞かせてもらおうぞ。」

「了解しました!」

そういって団長は立ち去っていった。

それから1時間後やっと起きたシンシアと一緒に朝食をとった六人は、団長の部屋に連れていかれた。

「自己紹介が遅れたな。俺の名はジェラルドⅡアイスナー、傭兵だ。そして、お前らのいるこの場所はジェラルド傭兵団ということになる。」

「傭兵団だったんですね。」

「まあな。それで此奴が俺の息子のベレトだ。」

「……………ベレトⅡアイスナーだ。よろしく。」

そのあとはジェラルド傭兵団のメンバーが一人一人名乗っていった。

「じゃあ次は僕たちですね。初めましてアズールです。よろしくお願いいたします！」

「セレナよ。」

「ブレディだ。」

「ノ、ノワールです。」

「あたしは正義のヒーローシンシア！」

「そして俺は異なる空間より来た選ばれし希望の戦士……………ウッドだ！」

「お…おう。」

最後の二人の名乗り若干引き気味であったが、ジェラルドは受け入れた。

「ウッド、アズール、ブレディ、セレナ、ノワール、シンシアか。取り合えずお前等は何

「ができるっ！」

「ふっ……それはだな。」

「ここはアタシが説明するわ。」

「まっ、俺も手伝うぜ」

「お……おいつ！」

格好つけて説明しようとするウードを無視して、ブレディとセレナが話せる限りの事情を説明しだした。ジェラルドは渋い顔をしながらもフォドラの大陸出身者でないことを理解したらしく、溜息をついた。

「イーリス大陸にヴァルム大陸だと……？聞いた事ねえ大陸だな。」

「それに団長！セイロス教のことを全く持って知らないとは……。信じられませんよ！」

「まあいい。全員実戦経験があるみてえだし役立ってもらうぞ。」

「「はいつ！」」

こうして六人はジェラルド傭兵団に世話になるのだった。

序章 夜明け前の出会い

ウード達がジェラルド傭兵団に拾われてから数週間後……。

彼ら六人は正式にジェラルド傭兵団に加入して働いていた。アズールとセレナは元傭兵であったため、そのまま戦力として……。ノワールはその弓の腕を買われて食料調達などの狩猟要因として……。ブレディは回復魔法が使えるため救護班として……。そしてウードとシンシアに関しては、傭兵として正式に採用されていた。

「ふうっ、今日も疲れたな……。」

「仕方ないよブレディ。ジェラルドさんがまた飲んだくれちゃったし……。」

「それに乗じてウードとシンシアの奴も飲みすぎたけどね。」

「仕事が上手くいってタガが外れちゃったのかな……。」

アズール、ブレディ、セレナ、ノワールは近くの街で飲んだくれたジェラルド傭兵団の連中を今しがた運び終えて休憩しているとところであつた。そんな四人にベレトが声をかけてきた。

「四人とも助かった。父さんのアレは今に始まったことじゃないからな……。」

「気にしないでくれベレト。」

「ブレデイが居ない時は大変だったんじゃない？」

「……………そうだな。酔い覚めの回復魔法をかける人間が居なかったからあの状態になると大変だったな。」

ベレトは現在飲んだくれて眠っているジェラルドの天幕を見ながらつぶやいた。その言葉に四人は納得の顔をした。

「まあブレデイの魔法なら明日には回復してるよ！」

「……………多分それがあるから飲んだくれる日が多くなっているじゃないかな……………」

「ノワールの言うとおりかもしれないわね。……………ってアズール!?!どこ行くのよ！」

「飲んだくれた連中は介抱したから遊びに行ってくるよ！」

そういつてアズールは夜の街に向かっていった。その様子を見てブレデイが溜息をついていた。

「そういつてまたナンパしにいくんだろが……………」

「……………明日までに戻ってくれば大丈夫だから見逃してやってくれ。」

「あんたがそういうなら従うけど……………」

この数週間でワード達はベレトと仲良くなっていた。ベレトと同年代である彼らは馬が合うのか時間を見つけては一緒に訓練を行ったり、雑談を行ったりしていた。

「……………明日は昼頃にルミール村に向かう予定だからそろそろ寝た方がいい。」

「次の移動先のルミール村はここからどれくらいかかるの？」

「え、えつと………大体2日ぐらいかな……。」

「2日か……。ベレト！また訓練に付き合つてよね！」

「ああ、問題ない。それじゃあ、三人ともお休み……。」

ベレトは3人から離れてテントに戻っていった。

「次こそはベレトに勝つて見せるわっ！」

「つーか、ティアモさん直伝のアレ使つたら勝てるんじゃないか？」

「か……母さんのアレは……未完成だから……。」

「で、でも化け物じみたベレトには……使った方がいいんじゃないか？」

「うっ……そう言われると何とも言えないわね。」

「そういうノワールもサーリヤさんから呪術学んでいるんじゃないのか？」

「うん、確かに母さんが危険じゃない呪術を教えてくださいわ。でも……どちらかという

とまじないに近いかな……？」

「成程な。」

「そういうブレディはどのようなのよ……。マリアベルさんから教わっているんじゃないの

？」

「まあな、母さんからバイオリンやら紅茶やら貴族の嗜みを学んださ。」

「で、でもバイオリンは結構評判じゃないかしら？」

「まだまだだな。精進あるのみといったところだ」

それから三人は元の世界での思い出話に花を咲かせていた。しかしいつになってもキリがないため途中で豹変したノワールが中断させた。そして明日の移動に備えて休むことになった。

◇◇◇◇◇◇

翌日ブレディの回復魔法のお陰で回復したジェラルド傭兵団は次の目的地であるルミール村へ向けて移動を開始した。その道中は安全で特に何か変わったことはなかった。因みにセレナはベレトに訓練を挑んだが、ティアモ直伝の技をあっさりとかわされて敗北した。残りの五人もベレトに打ち負かされて、アドバイスなどを受けていた。

因みにベレトの評価ではアズール>セレナ>シンシア>ウッド>ノワール>ブレディの順番に剣術の腕は強く、槍術はシンシア>セレナ>ウッド>アズール>ブレディ>ノワールの順に強く、弓術はノワール>ウッド>セレナ>ブレディ>アズール>シンシアとのことであった。シンシアの弓術に関しては変な方向に飛んでいくため触らないように言われるのだった。

そんなこんなで2日後ルミール村にジェラルド傭兵団は到着した。

「ついたー！ー！！」

「くっ!? この感じは何だ……!? 血の騒ぎ方が……いつもと……違う……!?」

「シンシアの嬢ちゃんとは相変わらず元氣いっぱいだな。……それに引き換えウードの奴は相変わらず何言っているか分からねえな……。」

「ジェラルドさん、付き合いの長い私たちでも彼のアレは偶に理解できませんから。」

「……そんな昔からアレをやっているのか……。」

「うーん、いい村だね。よしっ！見回りに行つてくるよっ！」

「またナンパしに行くつもり？まだ陣営出来てないんだから……つてもういないし……。」

「安心しろアズールの分まで俺が働かさ！」

「そういうならさっさと手を動かせよウード！」

「……つて、シンシア！あんたドジなんだから手伝わなくていいから！」

「平気く平気く……つて、あいたっ」

ドンガラガッシャーん!!

「シンシア、貴様っ！我を巻き込んで転ぶなどいつも言っておろうがつ！貴様を弓矢で追いかけてまわしてやろうかつ！」

「ノワールゴメー！ーん!!」

「……やれやれ、あいつらが加入してから賑やかになったな。」

六人が加入して賑やかになった団を見て、やれやれといった感じでジェラルドは見ていた。

そんなこんなで何とか陣営の準備を達成した傭兵団は、ナンパだけじゃなくて見回りもちゃんとやってきたアズールの報告を聞いてから食事をそれぞれ採りだした。ワード達が加入してからもう一ヶ月……。ジェラルド傭兵団の一員としてすっかり溶け込んだ六人は雑談をしながら、楽しい夕食を行っていた。

夕食後自由時間が出来たので、それぞれ分かれていった。ワードは暗夜王国時代に魔術を学んでいたため森に練習しに向かい、アズールはいつもの様にふらりと居なくなり、セレナとノワールは武具の手入れを行い、ブレディはルミール村の村人のためにミニコンサートを開催しに向かい、そしてシンシアは傭兵団で飼っている動物のお世話をしに向かった。そしてジェラルドとベレトは天幕に戻っていった。

◇◇◇◇◇

それからしばらくして、動物のお世話を終えたシンシアは森で鍛錬を行っていた。

「はああああああつ！旋風槍！」

この世界に来てからシンシアはベレトの指導で戦技の存在を知った。ヒーローにあこがれる彼女は一刻も早く習得しようと張り切っていた。正確には彼女のヒーローと

して必殺技があればいいという情熱に火が点いたからここ最近毎日行っていた。

「うくん、勝利の決まり文句は十分だし、あとはヒーローに相応しい必殺技を身に着けるだけなんだけどなあ〜」

　　ブツブツと呟きながらも練習している彼女に三人の人物が近づいていた。

「やああああああつ！雷神槍！よしつ、雷を纏った一撃の完成だよつ！やつぱりヒーローは雷の力を操るよね〜」

「……お取込み中、悪いが少しいいか？」

「あれ、あなたたち誰？」

「なあ、クロード。話しかけて大丈夫か？」

「問題ないと思うわデイミトリ。…単純に戦技の練習してただけみたいだしね。」

突然現れた三人にシンシアは驚いた。彼女に声をかけてきた三人は男二人と女一人の一行で、三人とも似たような制服を身に纏っていた。

「そうだよつ！あたしの夢のために戦技の練習をしていただけだから警戒しないでっ！」

「夢？」

「それってさつき言っていたヒーローか？」

「あつ、そこから聞いていたんだ！うん、そうよ！それはそうと、あたしに何か用？」

「そうね、今は本題を話したほうがよさそうね。」

流石に初めて会った人間に自分の夢を話すつもりはなく、三人が急ぎの様子だったのでシンシアは話を元に戻した。

「俺達はこの近くで演習を行っていたんだが……。」

「いきなり、盗賊団に追われちまってね。近くに野営が見えたからこつちに來たんだが、アンタ関係者か？」

「うん、そうだよ！あたしはこの近くの傭兵団に所属している傭兵だよ。」

「ふうつ、何とかかなりそうね。傭兵団まで案内してくれないかしら？」

「そうだね。盗賊団が來ているっていうし……。急ごうかっ！」

シンシアは自分の荷物を持つと三人を野營まで案内しだした。

「こんな状況だけど自己紹介するね。あたしはシンシア！よろしくね！」

「俺の名はクロードだ。」

「デIMITリだ。よろしく頼む。」

「エーデルガルトよ。宜しくねシンシア。」

「うん、よろしく！それじゃあ、團長の元に急ぐよ〜！」

自己紹介を終えて、元氣一杯な彼女を見てクロード達はひそひそと話していた。

「元氣一杯な奴だが、悪い奴ではなさそうだな……。」

「そうだな。……あいつにこの元気を分けてほしい気分になったな……。」

「それに関しては私も同感よ。彼女の元気を何処かの誰かに分けてほしいわね。」

基本テンションが高いシンシアを見て三人はその元気を自分たちの知っている人間に分けてほしいと思っていた。どうやら、シンシアの天真爛漫な様子を見て警戒心はほとんどない様子だった。

シンシアは三人を連れて陣営まで向かうと、ジェラルドを呼んでもらうように傭兵に頼んだ。少しするとジェラルドがベレトを連れて天幕から出てきた。

「あーっ！ジェラルドさんっ！こっち来てっ！一大事だよ〜！」

「何だシンシアの嬢ちゃん……。」

クロード達の前にジェラルドが姿を現すとデイミトリが話し出した。

「突然、申し訳ありません！」

「こんな時間に、ガキどもが揃って何の用だ？」

「実は私たち、盗賊団に追われているんです。どうか力を貸していただけませんか？」

「盗賊、だと……？」

「ええ、野営中に襲撃されたのです。」

「上手いこと仲間と分断されて多勢に無勢、金どころか命まで盗られるところでしたよ。」

「その割には随分とのん気な……。ん？ その制服……。」

「ジェラルドさんっ！村の外にかなりの団体が来てやがるぜっ！」

「来やがったか。ったく、ガキどもはともかくこの村を見捨てるわけにはいかねえ……。おい、行くぞ。用意はいいな？」

「ああ、準備ならできている、父さん！」

ジェラルド達は準備を終えると迎撃の構えに入った。ベレットはウッド、シンシア、セレナとエーデルガルト、デイミトリ、クロードを引き連れて構えた。アズールとノワールは背後からくる盗賊団の迎撃に向かい、救護班のブレディは村で待機した。

「くっ……。血が騒ぐ……。っ!!」

「はあっ!?!……。血……。!?!」

「そいつのソレに関しては今は無視していいわよ。」

「そ、そうか……。」

「おいっ！最近俺に対する扱い酷くないかつ、セレナ！」

ウッドは自分の扱いに抗議したが、セレナは無視して向かってきている盗賊団に目を向けていた。

「さてと……盗賊が来たぞ……。準備はいいな……。」

「問題ないな。」

クロードが答えたと同時に盗賊はこちらに責めてきた。

「よーしっ！我は正義の戦士シンシア！この聖なる裁きを恐れぬ者は、我が前に歩み出よー！」

「えっ!?いきなり何を言っているのっ!?」

「喰らいなさい！雷神槍っ！」

「「ぎやあああああああああああつ!?」」

「へえー……、なかなかの威力だな」

ヒーローの名乗りを終えたシンシアが真っ先に飛び出して、戦技を放っていた。その様子をクロードは感心した様子で見っていた。

「ふっ、ふっふっふっふ。ここは漆黒のオーデインの力を解き放つとき……喰らえっ、必

殺ー!アウエーキング・ヴァンダーー!」

「「ごあああああああああああつ!?」」

「変な男だと思っただけ……以外にやるのね……。」

暗夜王国で磨き上げた必殺技をワードは放ち盗賊を吹っ飛ばしていた。その様子をエーデルガルトは意外そうな顔で見っていた。

「……全く、夜明けに盗賊が来るなんてついてないわね……。さてと、可愛がつてあげるわ!はああああああつ!華炎!!」

「何だ、これは……!?ぐああああああああつ!」

「何なんだよ……。あいつら強すぎだろ……。」

「なんだあの技はっ!?見たことがない戦技を持つているのか……」

セレナは神軍師の奥義である『華炎』を放ち盗賊を吹っ飛ばした。その様子をディミトリは驚愕した表情で見っていた。

「セレナもあんな技を隠し持っていたのか……。」

「そういうベレトもやるじゃない!」

「ふっ、我等闇の同胞の力があればこの程度苦でない!」

「まだまだ行くわよーっ!」

あつという間に盗賊の先陣を壊滅させたウッド、シンシア、セレナの三人を見て、クロード達三人は感心していた。

「凄いわね。あの三人……。」

「やれやれ、いくら何でも強すぎだろ……。」

「王国の近衛兵でも勝てないかもしれないな……。」

「盗賊の大多数はあいつらに任せて俺達は親玉のところに向かおう!」

ベレトはクロード達を連れて盗賊の親玉のところへと向かっていった。遅れてジェラルドが盗賊の親玉のところに向かっていった。ここでアズールとノワールが合流し

て五人は盗賊団の大半を相手に戦った。

「くそが……。『壊刃』に『灰色の悪魔』に加えて化け物じみた五人がいるだど!?こんな連中に付き合っていたら命がいくつあっても物足りねえ……!」

「親分っ!セイロス騎士団の連中が近づいていますぜっ!」

「ぐっ……この上セイロス騎士団まで相手にしてられるかってのっ!てめえら退却だ!退却しろーっ!」

盗賊団の親分 コスタスの命で盗賊たちは散り散りになって逃げていった。

「おっと、盗賊たちが逃げていくな。」

「た、多分あれが来ているからだと思う……」

「セイロス騎士団、ただ今参った!生徒を脅かす盗賊ども、覚悟せええ……い?おい、盗賊が逃げていくではないか!貴殿らは後を追うのだ!」

遅れてやってきた男が部下に命じると部下は盗賊を追っていった。

「さて、級長たちも無事のようなだ。……と、そちらは……?」

「おっと……面倒な奴が来ちまった……」

セイロス騎士団がやってきたことでひと段落したので、ワード達はブレディと合流してジェラルドの元に向かった。

序章 ガルグⅡマク大修道院

盗賊たちを撃退したウード達はジエラルドの元に向かった。

そこではジエラルドとセイロス騎士団の人間が話し合っていた。

「やはり、ジエラルト団長ではないですか！うおおお!! お久しぶりですなあ!! 私のこと、覚えておられますか!? 自称「あなたの右腕」、アロイスですぞ!! 団長が突然いなくなっってから20年、ずっと生きていると信じておりました!」

「相変わらずうるせえ奴だな、アロイス……。シンシアの嬢ちゃん並みに元気あるやつだぜ……。」

ジエラルドは久しぶりに会った知り合いが相変わらず元気一杯なことに呆れていた。

「あの人はアロイスさんというのか……。それにしてもうちの団長は嫌そうな顔をしているな……。」

「確かに……。それにあの人の元気な様子……。シンシアに似ているわね……。」

「えーっ！あたしはもつと元気一杯だよ〜!」

「んなどこで張り合わなくていいんだよ。」

アロイスとジエラルト親子の会話をウード達は眺めていると、エーデルガルト達が声

をにかけてきた。

「さつきはありがとう、あなた達。おかげで助かったわっ！」

「気にしなくていいよ！ヒーローとして困っている人に手を貸すのは当然だからねっ
！」

「わ、私たちは居合わせただけだから……気にしないで……。」

「そういうなよ。……それにしてもあんたら腕がたつよな。」

クロード達はウッド達の強さに興味を惹かれたらしく気さくに話しかけてきた。

「そうだっ！みんな自己紹介しない？どう呼んだらいいか分からないでしょ？」

「それもそうね。……それじゃあ、あたし達から名乗るわよ。」

「そうしてもらえるとありがたい。シンシアとはここに来る途中で自己紹介はしたな。」

「そうか、それじゃあ俺から名乗らせてもらうぜ、俺はブレディだ。」

「あたしはセレナよ。」

「は、初めましてノ……ノワールです。」

「俺は……異なる空間より来たる、選ばれし希望の戦士……ウッドだ！」

「僕はアズールだよ。」

シンシア以外の5人が名乗ると三人が名乗りだした。

「それじゃあ、私から名乗らせてもらうわね。私はエーデルガルトⅡフォンⅡプレスブ

ルグ。アドラステア帝国の皇女であり、第一位の皇位継承者よ。」

「ファーガス神聖王国第一王子、デイミトリⅡアレクサンドルⅡブレーダッドだ。」

「クロードⅡフォンⅡリーガンだ。実家はレスター諸侯同盟の盟主だが、そんなことは気にしないでいいさ」

三人が自分の身分を明かすとウッド達は目の前の三人が偉い人だと知って少し驚いた。

「あれっ!?三人とも皇女様や王子様、そして盟主の一族つて凄い家柄だっただね」

「その様子だと俺のレスター諸侯同盟やエーデルガルトのアドラステア帝国、デイミトリのファーガス神聖王国に関しても知らなさそうだな……。」

「我等は異なる空間より……。」

「普通に喋れや」

「俺達はフォドラ大陸の外から来たからここに關してあまり知らねえんだ。」

「ほう……フォドラの外から来たのか……。どこから来たんだ?」

「クロード……。あまり詮索するな……。」

クロードが興味を持って問いかけるとデイミトリが注意した。

「あゝ……。まあ言ってもいいか。俺たち六人はイーリス聖王国から来たんだ。」

「イーリス聖王国……?聞いたことがないわね。」

「因みにウードとシンシアの二人はイーリス聖王国の王族になるな。」

「ウードは現国王の甥で、シンシアは第二王女になるわね。」

「ほう。あの二人が……？」

「やれやれ……俺が知らない場所からの人間か……。」

「…そう。確かに俺たちは英雄の血を継いだ選ばれし者なのだ……」

「他の王族だからって警戒しないでいいよ。それに今は傭兵だからさく。」

「というか、僕も二人が王族であること忘れてたしね」

「どうやら色々と事情がありそうね。」

「確かにな……イーリス大陸か……。興味深い話だ。」

そんなこんなで談笑しているとベレットが此方にやってきた。

「……みんな大丈夫だったか？」

「あつ、ベレットさん！」

「あなたもさつきはありがとう、助かったわ。それにしても腕が立つのね。貴方は傭兵なのよね？しかも貴方の父は……セイロス騎士団の元団長、歴代最強の騎士と謳われる

『壊刃』ジエラルト……。」

「元団長とは知らなかった」

「そんなことがあるの？此方も何か言えない事情がありそうね……。」

ベレトと三人が話し出してしばらくするとジェラルトがやってきて出発することになった。途中で三人から熱烈な勧誘（特にベレトに対して）があつたりしたが、ジェラルト傭兵団は結局セイロス騎士団の本拠地であるガルグⅡマク大修道院に向かうことになった。

ガルグⅡマク大修道院に到着するとエーデルガルト達、士官学院の生徒とは別れてウード達教団所属の傭兵用の兵舎で待機をしていた。ジェラルトとベレトはアロイスの案内で施設に入つていった。

「それにしても凄い人達だったな……。」

「確かにフォドラ大陸の三人の跡取りと出会つたからね。」

「アズールはエーデルガルトにナンパして断られていたけどね……。」

「そ、それを言うなら王族もここにいるじゃない。」

「あやし達の中なんだから王族として扱わないでよ〜！」

「今更王族として扱われると調子狂うぞ……。」

手持ち無沙汰になつた六人はエーデルガルト達との出会いを含めて色々と話し合つていた。しばらく話し合つているとジェラルトが此方にやってきた。

「よう、探したぞお前等ここにいたか」

「あつ、団長！」

「あれっ!? ベレトがいませんね。」

「それを含めて説明するが、まずは俺はセイロス騎士団に戻ることになった……。つてそこまで驚いてねえな……。」

「アロイスさんの様子を見る限りだとそうなるだろうなと思つてましたよ。」

「……まあ、あいつらの様子を見れば分かることだよな……。」

「それで傭兵団はどうなるんですか？」

シンシアがジェラルト傭兵団はどうなるのかを聞いた。

「それに関してはセイロス教の傭兵団として働くことになる。」

「つまり、セイロス教と契約したということですね。」

「ノワールの嬢ちゃんの言う通り、セイロス教の傘下に入るということだ。」

「成程。……ジェラルトさん。ベレトはどうしたんですか？」

ジェラルト傭兵団の扱いに関して了解した六人だったが、ここでワードがベレトがこの場にいらないことに気が付いた。

「あいつなら士官学院で教師を行うことになった。実はあの盗賊騒動の時に一名教師が逃げたらしくな。その代わりだとよ……。」

「あれ？ 教育者になるには普通は試験とかあるんじゃないですか？」

「確かに普通はそういった試験が存在する。だが、アロイスの奴がレア様に推薦したらしくな……。レア様もレア様で随分と乗り気だしな……。」

「あのジェラルトさん……。レア様って誰なんですか？」

「セイロス教の大司教だ。まあ……教団のトップと考えてくれりゃあいい。」

「……もしかして、そのレア様の鶴の一声でベレトの教師就任が決まったのですか？」

色々と察したアズールの言葉にジェラルトは頷いていた。

「今頃あいつは自分が担当することになる学級を巡っているはずだ。……ところでお前等六人を見込んで頼みがある。」

「ふっ……。我が同胞の頼みならば……。聞き入れよう……。」

「まだ何も言っていないえが……。まあいい、頼みつてのはお前等六人もベレトの生徒として士官学院に入学してほしい。」

士官学院に入学してほしいというジェラルトの頼みにウッド達は驚いていた。

「いきなりですね。」

「自分で言うのもなんだけど……。フォドラの外から来た人間だけど大丈夫なの……？」

「レア様に聞いてみたら、お前等の実力もアロイスの奴から聞かされていたらしく問題ないとのことだ。素性に関しては……。まあ、何とかなるだろ……。」

ウッド達六人はジェラルトの頼みに了承の姿勢を見せていたが、ブレデイが問いかけ

た。

「それに関しては構わねえけどよ……なんか理由でもあんのか？」

「……正直な話をするとかいつを教師にする意図が分からん……。何か意図がありそうだからな……。」

「確かに見ず知らずの人間を教師に採用するのはおかしいわね……。」

「もう。ジェラルトさん！一言でベレトが心配だからって言うてくれればいいのに！」

「まつ、断る理由が俺達にはないから構わねえぜ！」

「ふっ……。我等選ばれし闇の戦士たちに任せておくがいい……！」

「そうかい？そんなら任せませ！」

ジェラルトはウッド達に頼みごとをすると修道院に戻っていった。入れ替わりとなってアロイスがウッド達に近づいてきた。

「探していたぞっ！貴殿らここにおったか！」

「は、はい！」

「アロイスさん、何か御用ですか？」

「うむっ、レア様とセテス殿が君たちと会いたいと言っておられるからな。探しに来たのだ！」

「アロイスさん……セテス殿って……誰なんですか？」

「大司教レア様の補佐をしてらっしゃる方だウッド殿。」

「分かったわ。直ぐにいきましょう！」

六人はアロイスについて大司教の待つ謁見の間に向かった。

「レア様、セテス殿！ ジェラルト傭兵団所属の六人を連れてまいりました。」

「ご苦労様ですアロイス。……さて、あなた方がジェラルトが言っていたフォドラの外から来た六人ですね。」

大司教に直接会うことになり、緊張していたウッド達であったがレアの威厳と母性のある声で緊張が解けた様子で返答した。

「は……はい！」

「ようこそガルグマク大修道院へ。私はセイロス教の大司教を務めているレアです。」
「私は大司教の補佐をしているセテスだ。」

セイロス教の大司教とその補佐が名乗ったので、六人はそれぞれ名乗りだした。

「は……初めましてイーリス聖王国より参りましたウッドと申します。」

「同じくイーリス聖王国より参りましたアズールです。」

「同じくブレディです。」

「初めまして！イーリス聖王国から来たシンシアです！」

「同じくセレナです。」

「同じくノワールです。」

六人はイーリス聖王国から来たことを隠さずにレアとセテスに伝えた。

「成程、イーリス聖王国というフォドラの外にある王国出身なのですね。」

「は、はい！」

「澄みきつた目をしています。嘘をついていないでしょう……。」

「レア……。後のことは……。」

「分かっていますセテス。ジェラルトの推薦で士官学院に入学するあなた方ですが、手続きを行う必要があります。後のことはセテスに従ってください。」

「「はい！」」

「それでは、君たち六人は私の執務室に来てもらおう。」

大司教レアと面会した六人はセテスの執務室に移動した。

「さあ、そこに座りたまえ……。正直な話をするとイーリス聖王国という名前を私は聞いたことがない。」

「そうですね。フォドラ大陸からかなり離れた場所に存在していますから……。」

「大司教の決定だから君たち六人が士官学院に入学するのは決まっている……だが、私

からの質問にいくつか答えてもらう。」

「話せる限りでしたらお答えします。」

真面目に会話をするウードの了承の言葉を受けたセテスは椅子に座り書類とペンを取り出してから問いかけてきた。

「まずは君たちの身分などから聞かせてもらいたい。イーリス聖王国から来たことは分かったが、王国である以上身分はあるだろう?」

「は、はい!」

「よろしい、では六人それぞれの身分を聞かせてくれ。」

「了解いたしました。」

「まず、イーリス聖王国は王族、貴族、平民の3つの階級で分かれています。」

「……其処等はファーガス神聖王国と変わらないようだな。」

「そ、そうですね。因みにイーリス聖王国の王族は自警団を作ったりと平民とも積極的に交流します。」

「……成程。」

「そして俺は現国王であるクロム王の甥です。そちらのシンシアはクロム王の娘で俺の従姉です。」

「むっ? 王族が傭兵をしているのか……!?!」

「其処等に関しては何オドラとの文化の差です。一度では説明しきれませんので……」
「……まあいい。ウードとシンシア以外の四人は平民なのか？」

セレナの一度では説明できないという回答に少し難色を示したが、セテスは続きを促した。

「いえ、俺の母はイーリス聖王国の辺境伯の娘です。」

「成程な。ウードとシンシア二名は王族で、ブレディが貴族……。残りの三名は平民と
いうことか……。」

「はい！」

「……宜しい。君たちの故郷と異なり、フオドラは身分をはつきりとする必要があるからね。」

「それに関しては、郷に入っては郷に従えですよ！」

セテスはウード達を警戒している様子を見せながらも次の質問をしてきた。

「君たちはどのようにしてフオドラにやってきた？」

「どのように……って言われましても歩いてやってきたとしかいせんが……」

「……ダグザの方から来たのか？」

「ダグザ……？」

「……ダグザを知らないのか……!?やはり怪しいな……。」

セテスは警戒していたが、答えられないものは答えられないため六人は返答できなかった。

「……では最後の質問だ。君たちはフォドラで何をしようとしている？」

「何って言われなくても……見聞を広げるために六人で旅をしていますので……」

「明確な目的はないとしか言いようがないです……」

「見聞を広げるため……か。」

「これ以上は言いようがないです！」

セテスは溜息をつきながら書類に何かを書き込んでいった。

「……私個人の見解では君たちは今のところ信用に値しない。だが、大司教の決定に私ができることはできない。」

「それは……まあ、仕方ないですよね。」

「……君たちに関してはまだまだ聞きたいことはたくさんあるが、生憎と私も忙しい身でね。今日のところはこれくらいにしておこう。」

「あ……ありがとうございます。」

「……私は大司教のレアを信じている。そのレアの決定に歯向かうつもりはないが、この大修道院で何か妙なことをしたら只では置かないことを頭に入れておくように……」

「「……………」」

「ちよつとなんであたしとワードを見てくるの!？」

「ものすごく侵害だぞ！」

「……あんた達、自覚ないの……?？」

「物凄く心当たりはあるだろうがよ……。」

「そ、それに関してはアズールもだよね……。」

「えっ!?!僕も!?!」

セテスの言っていた妙な事をする該当者三人をジトトとした目で見たブレディ、セレナ、ノワールの三人はセテスの警告に了承した。少し遅れてから該当者三名も了承した。当然セテスもその視線に気が付いており、三名をジト目で見ていた。

「……すでに三名が心配だが……。今日のところは下がりにさい。」

セテスに下がるように言われた六人はセテスの執務室から出るとそれを待っていたかのようにジェラルトが出迎えた。

「よう、どうやらセテスとの話は終わったみたいだな。」

「あれっ!?!ジェラルトさん?？」

「士官学院に入学するにあたって伝えることがあってな。お前等は生徒になるのだから一人一人の個室が用意されることになった。」

「えっ!?!本当ですか!？」

「ああ。色々な手続きがあるからいったん兵舎で待機していてくれ」
「了解しました！」

ジェラルドはそう伝えると去っていた。残った六人は一端兵舎に戻っていった。それからしばらくして、セイロス教の教団兵がやってきて六人を個室に案内した。案内された彼らは自分の荷物を置いてその日はゆっくりと休んだのであった。

ウード達の名簿

名前：ウード

性別：男

年齢：18歳 ※ナーガの力により、18歳まで若返った。

紋章：聖王の紋章 ※イーリス聖王国に伝わる聖痕のこと

誕生日：7月15日 ※本編とは関係ないが『ファイアーエムブレム 新・紋章の謎』の発売日

初期兵種：貴族

個人スキル：血の疼き（理学＋10）

ファイアーエムブレム 覚醒におけるイーリス聖王国の王女 リズの息子。重度の厨二病であるため、狂言じみたセリフや行動をする。以外に多才な一面を持ち、武器の手入れをさせたら右に出るものはなく料理も非常に上手な一面を持つ。ファイアーエムブレム IFの世界での事件解決後であるため、カムイやレオンのことをよく知っている。暗夜王国時代はオーデインと名乗り、同僚のゼロと共にレオンに仕えていた。

趣味：武器収集、呪術研究、料理

好きな物：武具と呪術全般、血が騒ぐもの、カッコイイ必殺技

嫌いな物：吊り橋、無視されること

得意科目：剣術、理学、馬術

苦手科目：格闘術、信仰

才能開花：信仰

名前：アズール

性別：男

年齢：18歳 ※ナーガの力により、18歳まで若返った。

紋章：なし

誕生日：8月7日 ※本編とは関係ないが『ファイアーエムブレム 新・暗黒竜と光の剣』の発売日

初期兵種：平民

個人スキル：青の踊り（踊るコマンド使用时、周囲2マス of 全味方の力・速さをターン終了時まで＋1にする）

ファイアーエムブレム 覚醒における旅する踊り子 オリヴィエの息子。恥ずかしがり屋な性格であるが、趣味はナンパな青年。踊り子であった母の影響で踊りが非常に

上手くよく夜中にこっそり抜け出して練習している。ファイアーエムブレム I F の世界での事件解決後であるため、カムイやマークスのことをよく知っている。暗夜王国時代はラズワルドと名乗り、同僚のピエリと共にマークスに仕えていた。

趣味：ナンパ、踊りの練習

好きな物：ナンパ、女の子と過ごす時間、女の子の笑顔

嫌いな物：踊りの練習を見られること、女の子の悲しい顔

得意科目：剣術、槍術、格闘術

苦手科目：理学、重装

才能開花：斧術

名前：ブレディ

性別：男

年齢：18歳 ※ナーガの力により、18歳まで若返った。

紋章：なし

誕生日：2月22日 ※本編とは関係ないが『ファイアーエムブレム 暁の女神』の

発売日

初期兵種：貴族

個人スキル：お茶会（ターン開始時に隣接する味方の命中を20上げる。）

ファイアーエムブレム 覚醒におけるイーリス聖王国の貴族 マリアベルの息子。見た目と裏腹に体力がなく、趣味も音楽演奏や紅茶の茶葉探しなどをする青年。母親の教育により、貴族の嗜みを一通りマスターしているが時々言葉遣いが荒くなる。ワイルドな見た目から盗賊によく間違えられていたが、この世界ではギルベルトやドウドウーなど強面な男がいるためそんなことはない。

趣味：バイオリン、紅茶の茶葉探し、チェス

好きな物：楽器の演奏、紅茶、読書

嫌いな物：賊に間違えられること、運動

得意科目：理学、信仰

苦手科目：剣術、槍術、斧術、格闘術、重装

才能開花：槍術

名前：セレナ

性別：女

年齢：18歳 ※ナーガの力により、18歳まで若返った。

紋章：邪竜の小紋章 ※邪竜ギムレー由来の邪痕のこと。

誕生日：1月21日 ※本編とは関係ないがSFC版『紋章の謎』と単体ソフト版『ト
ラキア776』の発売日

初期兵種：平民

個人スキル：負けん気（ターン中に味方が必殺を出した場合、相手に与えるダメージ
+10%あがる）

ファイアーエムブレム 覚醒におけるペガサスナイト ティアモの娘。非常に負け
ず嫌いで努力家。女の子らしく趣味はオシヤレと買い物でよく無駄使いをしてしまう。
ファイアーエムブレム IFの世界での事件解決後であるため、カムイやカミラのこと
をよく知っている。暗夜王国時代はルーナと名乗り、同僚のベルカと共にカミラに仕え
ていた。この作品ではルフレの娘であり、マークの姉である。

趣味：オシヤレ、買い物

好きな物：オシヤレ、無駄な買い物、家族

嫌いな物：節約、他人と比べられること

得意科目：剣術、槍術、弓術、馬術

苦手科目：なし

才能開花：指揮

名前：シンシア

性別：女

年齢：18歳 ※ナーガの力により、18歳まで若返った。

紋章：聖王の小紋章 ※イーリス聖王国に伝わる聖痕のこと。

誕生日：5月14日 ※本編とは関係ないが『ファイアーエムブレム 聖戦の系譜』の

発売日

初期兵種：貴族

個人スキル：ヒーロー見参！（ピンチの味方がいる場合自分の全能力+10あがる）

ファイアーエムブレム 覚醒におけるペガサスナイト スミアの娘。正義のヒーローに憧れて日夜奮闘しており、ウッドと違ってそこまで引かれていない。いつもハイテンションの天真爛漫な娘であるが母親の遺伝か非常にドジっ子。この世界ではいつでもハイテンションな様子を見て三人の級長からはその元気を誰かに分けてほしいと思われている。この作品ではクロムの娘であり、ルキナの妹である。

趣味：ボランテア、ヒーロー研究

好きな物：英雄物の物語、ヒーローの決め台詞

嫌いな物：説教、悪人

得意科目：槍術、信仰、飛行

苦手科目：弓術、格闘術

才能開花：理学

名前：ノワール

性別：女

年齢：18歳 ※ナーガの力により、18歳まで若返った。

紋章：なし

誕生日：10月7日 ※本編とは関係ないが『ファイアーエムブレム 聖魔の光石』の

発売日

初期兵種：平民

個人スキル：人格変化（相手ユニットに対する反撃は必ず命中する）

ファイアーエムブレム 覚醒におけるダークマージ サーリヤの娘。基本気弱な性格であるが、時々性格が豹変する二重人格者。邪竜ギムレー討伐後両親と穏やかな日常を過ごしていたためか、最近では怒った時にしかも一つ一つの人格が出なくなつた。弓術の腕は非常に高くウード達曰く豹変時の腕前は百発百中であるとも。また母親の遺伝か潜在的な魔力の高さと抜群のスタイルの良さを持っている。

趣味：お菓子作り、お守り作り

好きな物：フカフカのベッド、狩り

嫌いな物：呪術の実験、暗い場所

得意科目：弓術、馬術

苦手科目：指揮、重装

才能開花：理学

《今作品オリジナルの紋章》

・聖王の紋章……イーリス聖王国の血筋を引くものにしか現れない紋章……というか聖痕。

能力としては……竜系の職種及び魔獣に対する攻撃の威力が常時上昇する。

所持者……クロム、ルキナ、ウード、オフエリア ※本編にはクロム、ルキナ、オフエ

リアは登場せず

・聖王の小紋章……イーリス聖王国の血筋を引くものに隠されて継承される紋章……というか聖痕。

能力としては……竜系の職種及び魔獣に対する攻撃の威力がよく上昇する。

所持者……リズ、シンシア ※本編にはリズは登場せず

・邪竜の紋章……邪竜ギムレーの血筋を引くものにしか現れない紋章……というか邪

痕

能力としては……常時相手の大盾と聖盾を無効にし、滅殺の効果を受けない。

所持者……ルフレ ※本編にはルフレは登場せず

・邪竜の小紋章……邪竜ギムレーの血筋を引くものに隠されて継承される紋章……と
 いうか邪痕

能力としては……よく相手の大盾と聖盾を無効にし、滅殺の効果を受けない。

所持者……セレナ、マーク、マトイ ※本編にはマークとマトイは登場せず

《シンシアが持ってきた英雄物語》…後日追加したものです。

タイトルまで上げるとキリがないので、取り合えず英雄物語で主役として描かれているキャラクターを記載します。自分の先祖の時代であるアカネイア関連の本を多数所持しております。

・『新・暗黒竜と光の剣』～『新・紋章の謎』のキャラクター……マルス(※3冊)、シダ(※2冊)、カイン、アベル、ハーディン、ミネルバ、パオラ、カチュア、エスト、ナバル、カミュ、オグマ、ミシエイル、クリス、カタリナ、チキ

・『Echoes』のキャラクター……アルム、セリカ、マチルダ、セーバー、マイセン、バルボ、ルドルフ、ジーク

・『聖戦の系譜』～『トラキア776』のキャラクター……シグルド、セリス、エルト

シャン、フィン、シヤナン、ユリア、リーフ、アレス、レヴィン、ディアドラ、アイラ、ラナ、ラインハルト、イシユタル

・『烈火の剣』～『封印の剣』のキャラクター……ロイ、リリーナ、ヘクトル、エリウツド、リンデイス、マーカス、ルトガー、ゼフィール、セシリア、エキドナ、ニニアン、フロリーナ

・『聖魔の光石』のキャラクター……エイリーク、エフラム、ターナ、ヒーニアス、ゼト、リオン、デュツセル

・『蒼炎の軌跡』～『暁の女神』のキャラクター……アイク、エリンシア、ミカヤ、ティアマト、ゼルギウス、シグルーン、アシユナード、セネリオ、サザ、ティバーン、デギンハンザー、オルティナ、エルラン

・『IF』のキャラクター……リヨウマ、マークス、カムイ

白雲の章 青獅子の学級

白雲の章 青獅子の学級

翌日……。

与えられた部屋で起床した六人は兵舎にて集合を言い渡されていたため、兵舎でベレトが来るのを待っていた。しばらくしてベレトが六人分の制服をもつて兵舎にやってきた。

「あっ！ベレト！」

「教師になるって聞いたわよ！」

「ああ、君たち六人も一緒に入学するとレア様から聞いた。」

「なら話は早いな。」

「むっ、貴様が手に持っているものは一体なんだ？」

「これは君たち六人の制服だ。さっさと着替えてくれ。これから教室に向かうからな。」

「わ、分かりました。」

ベレトから制服を受け取った六人が、男女に分かれて着替えを始めた。

「そーいやベレトは教師になるのだったな。」

「そ、そうね。先生と呼ばないと……」

「いや……いつも通りで構わない……。」

「あんたがそれでよくても、俺達以外の連中が見たら面白くねえだろ？」

「まあ、あたしたちを導いてくれるんだから最低限先生と呼ばないとね……」

「……君たちからそういわれると違和感があるな……。」

士官学院に入る都合上最低限のマナーを守ろうとする六人にベレットは難色を示した。

「ねえ、だったらさ！あたしたちやジェラルトさんだけがいる場所だけはいつも通りはどうっ？」

「悪くないと思うな……。教室やクラスメイトの中だけでは先生と呼ぶだけだからね。」

「ベレット……これならどう？」

「……まあそれならばいいだろう。」

「よしっ！それで決まりだね！」

それから少しして制服に着替えた六人は待っていたベレットの前に来た。

「うくん。いい服ね！気に入ったわっ！」

「ふっふっふ、ここから俺の新しい伝説が始まるのだ！友達何人できるかなーっつと！」

「ちよつとワード。浮かれすぎじゃない？」

「で、でも気持ちはわかるかも……。あんな体験をしているからなおさらね……。」

「……それをいわれると浮かれたくなるのもわかるな……」

「あんな体験……？まあいい。とりあえず俺が担当するクラスに移動するぞ。」

「はーいっ！」

兵舎を出た七人はベレットが担任となるクラスへと向かっていった。

「そういえば聞き忘れていたけど……ベレットはこの担任になるの……？」

「えーつと、確かエーデルガルトのところアドラークラッセが黒鷲の学級だったな。」

「次にデIMITリのところルーヴェンクラッセは青獅子の学級よね？」

「そして最後にクロードのところヒルシュクラッセは金鹿の学級だよね？」

「我等の聖地となる空間は何処に……」

「もったいぶつてないで言つてよ〜」

「もったいぶるつもりはないが……。俺が担当になったクラスは……」

「急かすシンシアルーヴェンクラッセにベレットはゆっくりと担当するクラスを告げた。

「青獅子の学級だ！」

◆◆◆◆◆

ウード達六人は青獅子ルーヴェンクラッセの学級の教室に入り、教壇に立ったベレットの後ろで整列した。

「えつ、新しい先生つて、まさか……あわわ、あたし、友達みたいに話しかけちゃって……」

「同じ年くらいに見えたから、つい……！すみません、気をつけますっ!!」

「構わないよ。君たちのやりやすいようにしてくれ。」

「そ、そんなこと言われても……。」

「ええ、こちらの気が済みません。」

「先生が言うんだし、いいんじゃないですか？つーか、それを言ったらですよ、殿下……。そもそも、俺たちがあんたにこんな口を利いてるのだから、不敬もいとこでしよ。」

「いや、ここは王国ではないんだし、それとこれとはまた別の話で……だがまあ、先生がそれでいいならありがたくその厚意に甘えるところか。」

ベレトは青獅子^{ルーヴェンクラッセ}の学級に向けて自己紹介をした。教室内の生徒がベレトの周りに集って、ガヤガヤと騒ぎだした。どうやら昨日修道院を巡っていたらしく、何人かと親しげに話し合っていた。

「先生のほうはこれくらいにして……。俺としては後ろの六人も気になってるんですがね……。」

赤髪の青年であるシルヴァンがウッド達に視線を向けると、クラスの注目はウッド達六人に移った。

「……いきなり、六人増えたか……。どうやら隙がない奴がいるな……。」

「フェリクス。いきなり喧嘩売らないですよ……。」

「……殿下、彼らはお知合いですか……。」

「ああ。この前の盗賊騒動の時に出会った六人だ。」

「デIMITトリが出会った経歴をクラス内に説明するとワード達は信用されたく、クラスの生徒の中から様々な感想が飛び交った。」

「青獅子の学級ル・ヴェンクラッセに今日から編入する六人だ！簡単な自己紹介をしてくれ。」

「じゃあ！一番乗りはあたしね。初めましてシンシアよ！夢はみんなを守るヒーローになること！」

一番乗りでいつもハイテンションのシンシアが名乗った。みんなを守るヒーローになる夢を初っ端から言ったが、クラスの女子からは「かっこいい」、「素敵」といった声が聞こえてきた。

「ふふつ、凄く元気一杯な子ね。……誰かに元気を分けてほしいわね。」

「メルセデスも同じことを思ったか……。」

「……おいつ、猪！喧嘩売っているのか？」

「こらっ、フェリクス！あなたと明言してないんだから怒らないの！」

「ちっ……。」

「はいはい。次の自己紹介に行くぞ。色々言いたいのは分かるが、全員の自己紹介が終わった後でな……。」

初っ端から天真爛漫なシンシアが自己紹介したおかげで、場が温まったので残りのメ

ンバーが名乗りだした。

「次はあたしね、初めましてセレナよ。」

セレナは無難に自分の名前だけを名乗って終わらせた。変なことを言っただけでドン引きさせるよりは無難な方を選んだようだ。

「わ、私はノワールで……す。よろしくお願いします。」

緊張しながら自己紹介したノワールを青獅子ルーヴェンクラッセの学級の面々は暖かい目で迎えた。

「初めましてアズールです。こんなに可愛い子が多いクラスに入れて僕は嬉しいな。」

アズールの自己紹介にクラスの一部の女子から歓声が上がった。その一方でイングリットは渋い顔をしていた。

「ブレディだ。よろしく頼むぜ」

強面のドウドゥールーヴェンクラッセが青獅子の学級にいるからか、ブレディの容姿に関してそこまでざ

わつきはなかった。

「俺の名は…漆黒のウッド……。異なる空間より来たれし選ばれし闇の戦士だ！」

最後のウッドの個性溢れすぎる自己紹介にクラスの面々はしーんとしていた。

「……個性的な人ですね。」

「そ、そうですね。」

「……ねえメーチェ？彼の言ったこと分かる？」

「うーん。ごめんなさいねアン。私にもさっぱりだわ。」

「……非常に個性的な人間だが、腕は確かだ……。」

「……殿下の仰る通りでしょうが……少々理解に苦しみますね……。」

ウードの厨二溢れる自己紹介に引き気味であつた青獅子ルーヴェンクラッセの学級の面々だが、それから一人一人自己紹介をしていった。

「さて……彼ら六人を加えてこの一年間指導していく。よろしく頼む。」

「「はいっ！」」

こうしてウード達は青獅子ルーヴェンクラッセの学級に所属して学んでいくことになった。一段落したところでフェリクスがベレトに挑発込めて話しました。

「後で訓練場に来い。まずはお前の腕を見せてもらいたい。」

「構わないよ。」

「抜け駆けとは感心しないな、フェリクス。その試合、是非俺も交せてくれ。」

「……チツ。」

「舌打ちかよ……。」

一国の王族相手に平然と舌打ちするフェリクスにブレディは呆れていた。

「あ、あのっ！ 後学のため、僕も見学させていたくださいねですが！」

「アツシュ。見るだけと言わず、お前も加わればいいだろう。」

「じゃあじゃあ、あたしも混ぜてよ〜！」

「ふっ……この…漆黒のウード…の真の力を見せるときが来たか……」

「う〜ん。やつぱり、ウードって変な人だよね……。」

「あいつのアレは無視していいわよ。」

「……だから最近の俺に対する扱い悪くないかセレナ!?」

「あっ……普通に喋れるんだね……。」

「……アレしか喋れないと思っただわ。」

「ふっ、彼らがやってきて賑やかになったわね〜」

ウード達がやってきたことですっかりと賑やかになった様子をメルセデスは慈愛の眼差しで見ている。

「なあ……親睦を深めるのに剣を交えるって、何か根本的に間違ってると思うんだけど？」

「……気持ちには分かるけど。あの空気を変えることができる？」

「……無理だな。」

「さてと、そろそろ授業を始めるぞ！全員席に着くように！」

授業を始めるというベレットの言葉を聞いた彼らはそれぞれ自分の席に座った。全員が着席したのを確認したベレットは授業を開始した。



その日の授業が終了後、金鹿ヒルシユクラツセの学級の担任であるハンネマンがベレットを連れて何処かに行つた。帰り支度を済ませたウッド達は教室の外でデイミトリ達を待つていた。ハンネマンに連れていかれる前にベレットに頼まれたデイミトリ達がウッド達を案内することになつていたのである。

「デイミトリ、案内を買つて出てくれてありがとう。」

「礼は要らないさ。これから級友として切磋琢磨する中なんだこれくらいは当然さ。」

「殿下。もしよろしければ、セレナ、シンシア、ノワールの三人は私たちが案内します。」

「同じ女性同士で案内した方がいいと思うんですよ！」

「だからここは分けた方がいいと思うわ。」

「……殿下。男だけですとどうしてもいけない場所があると思うのですが……。」

「そうだな……。シンシア達はそれでいいか？」

「問題ないよー！」

「まあ、女性陣だけの方が気が楽ね。」

「も、問題ないと思います。」

「分かつた。それではよろしく頼む。」

セレナ達女性陣はデイミトリからの了承を得ると大聖堂方面へと向かつていった。

「さて、ではウード達は俺が案内しよう。」

「……俺も付き合おう。」

「僕も付き合いますよ！」

「よろしく三人とも！」

「ふっ……頼むぞ……」

「まっ、男は男でいこうや。」

ウード達男性陣はデイミトリに連れられて訓練場方面に向かっていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

それからしばらくしてイングリット達にガルグⅡマク大修道院の施設を一通り案内されたセレナ達は食堂で夕食を一緒に取っていた。

「今日は案内してくれてありがとうだね。」

「結構いろんな施設があったんだねー！」

「これから楽しみになってきたわ」

「気にしなくていいよ三人とも！」

「ふっ、私たちの案内でここまで感激してくれると嬉しいわね」

「そうですね。……偶にはこういうのもいいかもしれなですね。」

イングリット達もセレナ達の案内で新鮮な気持ちになったらしく嬉しそうであった。

「そういえば、あなた達は何処から来たの？」

「あたし達はイーリス聖王国という国出身だよー!」

「……イーリス聖王国？聞いたことがないですね。」

「まあ、ここからかなり距離の離れた場所にある王国と考えてくれていいわ。」

「聖王国ってことはセイロス教とはまた別の神様がいるのかしら？」

「ええ。私たちの王国は神竜ナーガ様という女神様を信仰しているわ。」

「神竜ナーガ……もしかしてガルグⅡマク大修道院のような場所はないのですか……？」

イーリス聖王国の文化に興味を持ったイングリット達は宗教面から問いかけてきた。

「こ、ここまでの施設はないわね。……でもナーガ様を祀るための聖なる山はあるわね……。」

「そんな山があるんだ……。」

「あたしの父さんがその山で儀式を行って聖王を継承したけど……。凄い場所だったよね……。」

「確かに……。次にみられるとしたらルキナが継承するときかしらね……。」

シンシアの父がイーリス聖王国の王であること聞いたイングリット達は驚いていた。

「えっ!?!シンシアって王族なのっ!?!」

「あれっ!? 言ってなかったっけ? あたしの父さんはイーリス聖王国の聖王だよ!」

「お……王族の方だったんですね……。すみません、正直王族に見えませんでした。」

「別に気にしなくていいよ! このフォドラ大陸では関係ないしね。」

「そう? だったら、普通に接しさせてもらおうね。」

「あつ! 因みにセレナのお母さんはイーリス聖王国の天馬騎士団団長で、お父さんはイーリス聖王国の最高軍師だよ!」

「……ってあたしの情報を勝手にさらすんじゃないわよっ!」

ついでとばかりにセレナの親の情報をばらしたシンシアにセレナが噛みついた。

「天馬騎士団団長ということは……セレナのお母さんはペガサスナイトってこと?」

「……まあ、シンシアが言っちゃったからもういいけど……。ええ、そうよ。あたしの母

さんはペガサスナイトよ!」

「そ、それじゃあ主君に使える騎士ってことですよ! どんな方なんですか?」

「えっ!? ちよ……ちよつと落ち着いてよイングリット……。」

「な、なんかイングリットの喰いつきようが凄いわね……。」

「うふふ、イングリットは騎士に憧れているからね。本物の女騎士が気になって仕方ないのよ。」

物凄い勢いでセレナに問いかけてきたイングリット様子を見てノワールが啞然とし

ていると、メルセデスがこの状況を説明した。

「ねえ、イングリット。その話はあとの方がゆっくり聞けるんじゃないかな？」

「はっ！ す、すみません。」

「……別にいいわよ。でも、もう少し落ち着いてよね……。」

「話を戻すわね。さつきノワールが言っていたルキナって……誰なの？」

「ルキナはあたしの姉でイーリス聖王国の第一王女だよ！」

「物凄く強い人なんだけど。も、もしかしたら……ジェラルトさんより強いかもしれないわね。」

「あらあら、ジェラルトさんより強いのね。シンシアのお姉さんは……。」

「そ、それって相当なんじゃない……。」

「あつ、言い忘れてたけどウードはあたしの従弟だよ。父さんの妹の息子だよ。」

「「……………えー……………!?」」

ウードの奇怪な行動を見ていた彼女たちは、ウードが王族であることに心底驚いていた。一緒に上げた声に食堂内にいた人たちが一時注目してしまったほどだ。

「ウード……………って、王族だったの!？」

「し……………知りませんでした。あのような行動をとっているのでも王族に見えませんでした。」

「びつくりしたわね。まさか彼が王族だったなんて……。」

「ちよ……ちよつと。みんなに注目されているから声を抑えて……抑えて……。」

「あつ！確かに注目されちゃってるね。」

「コ……コホン。すこし声を抑えないといけませんね。」

周りの視線に気が付いたイングリット達は声を抑えだしたので、食堂にいた他の人々は何事もなかったかのように視線を外した。

「ふう、どうやらみんなの視線が元に戻ったみたいね。」

「まあ、ウッドに関してはあの行動から王族に全く見えないからね。気持ちは分かるわ……。」

「それで……その。ウッドは何故アレをやっているの？」

アネットは王族でありながらウッドが何故あんな行動をとるか聞いた。

「あつ……そ、それは……。」

「……………」

「シンシア？」

「ど、どうしたんですか？」

ウッドの行動の理由を聞いた途端に三人が黙ってしまったためイングリット達は心配してしまった。

「……ゴメン。それだけはあたしの口からは言えないわ。」

「あたしも同じね。何故ウードがアレをやっているのかは知っているけど……。」

「言えないというより、言いたくないといった方が早いと思って……。」

「……何か事情があるのね。」

「そ、それならノワールのお母さんはどうなの?」

「気まずい空気になったためノワールの両親の話にアネットは話題を変えた。」

「ノワールの母さんか……。ねえ、正直に言っている?ノワール……。」

「……別に構わないわ。娘の私から見てもそう見えるし……。」

「えっと、無理して言わなくていいですよ。」

「……無理しないから大丈夫よ。……ちよつと変わっているんだ母さんは。」

「えっ? 変わり者のお母さまってことなのかしら?」

「簡単に言うとは呪術師ね。結婚前はあたしの父さんに付きまとっていたと聞いているわ。」

「ず、随分変わった方なんですわ……。」

ノワールの母 サリーヤの少し変わった行動を聞いてイングリット達は少し引いた。

「そ……そうだ! アズールとブレディはどうなの?」

「アズールのお母さんは旅する踊り子よ。物凄い踊り手だったわね。」

「そのような方がいらつしやるのですね。」

「でも、オリヴィエさんつてとても恥ずかしがり屋さんなんだよ！」

「そうなのね。アズールには似てなきそうね。」

「……そうでもないけどね。」

イングリット達はアズールとオリヴィエが似ていないと評したが、ノワールはボソツと否定していた。

「ブレデイのお母様はどうなの？」

「ああ、マリアベルさんね。あの人は正しく貴族のお嬢様つて人だよ！」

「で、でも頻繁に言葉遣いが荒くなつたわね。」

「それつてどんな風になるのですか？」

「うくん、返答に困つちやうなく」

「な、なんて説明したらいいのか分からないのよね。」

「そんなに荒くなるんですか……。」

「うくん、やつぱり本人に聞いた方が手つ取り早いんじゃないかな？」

「それは……そうですね。」

「じゃあ。今度本人たちに聞いてみるわね。」

「それじゃあ……次は……。」

それからどんどん話が盛り上がってしまい、結局話が終わったのは食堂の閉鎖を知らせるチャイムが鳴った時であつた。彼女たちは少し残念に思いながらも食堂を後にしてそれぞれの部屋に戻っていった。

因みに男子勢はというと、一通り案内を終えた後は訓練場にて手合わせを行うことで交流を深めていた。途中ウードが大きくなりやみをしてしまうことがあつたが、男は男で仲良くなれたようであつた。

白雲の章 数日後の青獅子の学級

ウード達が青獅子^{ルーヴェンククラッセ}の学級に編入してから数日が経過した。

彼らはすつかりと青獅子^{ルーヴェンククラッセ}の学級に溶け込んで、仲良くベレトの容赦ない授業を受けたり、親睦を深めるために手合わせを行ったりと学生生活を満喫していた。

そんなある日、ウード達とベレトはジェラルトに呼び出されて傭兵団の方に向かったため青獅子^{ルーヴェンククラッセ}の面々は教室でウード達のことを話していた。

「さて……ウード達が編入してから数日が経つが……みんなすつかりと仲良くなったな。」

「そうですね殿下。俺はアズールとのナンパ対決は面白いのなんので、満喫させてもらってますよ。」

「……その尻拭いを私がやっているのは何故かしらねシルヴァン……。」

「うおっ!?……イングリット……悪かったって……。」

「……そういえば殿下。アズールのナンパに関してウード達は何もしていませんね。」

「確かにまたかといった風に呆れているだけでしたね。」

「それに関してはノワールに聞いたんだけど……注意しても止めないから放置している

んだって。」

「それで問題が起きても知らんぷりしているみたいね〜」

「成程……自己責任ということですか。……私もそうした方がいいかもしれませんね。」

「あ……あの〜イングリット……?」

アズールのナンパ癖にウッド達が放置している話を聞いてイングリットも自分も参考にしようとしていた。いつもと様子の違うイングリットに流石のシルヴァンも戸惑いを見せた。

「アズールに関してはこちらくらいにしておいて……ウッドはどうだ?俺としては面白い奴だと思うが……」

「……ウッドに関しましては、あの言動がなければいい人ですね。」

「そうですね。彼は困っている人は放っておけないらしく行商人のアンナさんを手伝ってましたよ。」

「……意外にもドウドウとアツシユが仲良くしている様子を目撃したな。」

「おっ!それは本当かフェリクス!」

「別に大したことしてませんよ。彼は料理が上手いので一緒に研究していたんです。」

「それは意外ですね。」

「……俺の知らない調理方法や味付け方を知っていました。あれは長年研究していた証

と思われず……。」

「人は見かけによらないとは言うものね。」

何時も奇抜は言動をしているウードが実は料理上手な一面があると知った青獅子の面々は人は見かけによらないと思っていた。

「ウードに關してもこれくらいでいいだろう。ではブレデイはどうだ？」

「……あの見た目で運動音痴だとは思わなかった。……まさか剣もまともに握れんとはな……。」

「でも、メルセデス並みに回復魔法が上手だよね。」

「確かにお陰でいちいちメルセデスを呼ばなくても男子だけで手合わせを行えるようになったな。」

「後は攻撃魔法も使えてましたよ！ボルガノンをあつさりと放ったから相当魔法に關しては強いみたいです。」

「後は彼は貴族の嗜みを一通り身に着けていましたね。彼が淹れる紅茶はとても美味しかったです！」

「俺とアズールがお茶に誘った時は無視するのにブレデイの時は受けるのかよ……。」

「シルヴァンと違つてお裾分けしたいだけだというのが伝わったからだろうな。あの紅茶は俺も飲んだがあんな美味しい紅茶があるとは知らなかったな。」

「殿下の仰る通りですね。誠意のないシルヴァンとアズールの声掛けより彼の方が好感が持てました。」

「イングリット……お前さあ、ほんつと俺に対して手厳しいよなあ……。」

ブレディも見た目と違って貴族の嗜みを一通りマスターしているところが評価されていた。

「それじゃあ次はセレナですね！」

「この前フェリクスをポコポコにしてたよな。声かけたけど無視されたわ……。」

「ちっ……。」

「それにしてもあのフェリクスをポコポコにするなんて相当な腕前よね。」

「ああ。もしかしたらカトリーヌ殿並みに強いかもしれないな。」

「私はセレナとは仲良くなったのですが、彼女のご両親はとてつもない天才だったそうです。」

「……確か天馬騎士団の団長の母と聖王の軍師の異名を持つ父を持つと聞きました。」

「そんなに立派な両親がいると娘に対する期待も相当だっただろうな……。」

「はいっ！努力であそこまで強くなったと言っているので相当な努力家ですね！」

セレナは偉大な両親を持つ努力家としてデIMITリ達からは認められていた。

「ノワールはどうだ？」

「凄い腕前ですよ殿下！以前彼女の訓練を見たことがありますか……百発百中でしたよ。」

「お茶に誘ってみたら分かったんですが、意外とお菓子作りが上手ですよ。」

「少しばかり気弱ですけど、いい人ですよ！」

「……そういえば、シンシアが言っていたんですが、ノワールは怒ると怖いそうです！」

「それは意外だな。」

「でもあまり怒らない人が怒った時、怖くなるのはよくあるわよね〜」

「……まあ兎に角怒らせないようにすればいいだろう。特にシルヴァン……頼んだぞ

……」

「ちよ……なんで俺だけなんですか!?!」

ノワールは気弱であるが弓術の腕前が凄いことが話題になっていた。そしてシンシアが言っていた怒ると怖いということに関しても話題に上がった。

「最後はシンシアだな。」

「イングリットとアツシユが良く話しているのを見るわね〜」

「はいっ！ヒーローになることが夢ということで、ちよつと話してみたら意気投合しましたー！」

「彼女もイーリス聖王国の騎士物語を紹介してくれたりと積極的に交流してくれます

よ。」

「アズールがナンパに失敗して落ち込んでいたら励ましていたな。」

「話してみると底なしに明るい人ですよ！」

「彼女も困っている人は放っておけない人柄みたいね〜」

「……太陽みたいだな。彼女の姉はジェラルト殿以上に強いと聞く。……イーリス聖王国か。興味深いな……」

「……そうですね。」

シンシアは騎士に憧れるイングリットとアツシユと仲良くなったらしく、教室ではイーリス聖王国の話題が飛び交っていた。

「さて……彼らに関してはこれくらいでいいだろう。」

「それにしても、彼らは強いですよね。」

「ああ、アズールはアズールでこの前黒鷲のカスパルに圧勝しているところをみたな。」

「ウードはウードで、剣術も理学も両方優れていましたよ。」

「ブレデイも私よりもいろいろ回復魔法を知っていたわね〜」

「……セレナは金鹿のレオニーを瞬殺しているところを見ましたな。」

「私もそれなりに槍術の腕前に自信があったのですが、シンシアには歯が立ちませんでした。」

「僕も、ノワールの弓術にはまだ追いつけそうにないです。」

「……来月の模擬戦に奴らが参加したらすぐに終わりそうだな。」

「そうだな。ただ先生は今月末の模擬戦には戦闘力が高すぎるからという理由で不参加させるらしい。」

「まっ、フェリクスをボゴボゴにするアズールやセレナが参加していたら楽勝ですものね。」

「……俺達も精進する必要があるそうですね。」

「そうだな。」

そんなこんなで話し合っていたら、ベレトたちが教室に入ってきたので全員着席してベレトの授業を受ける体制になった。ベレトは青獅子ルーヴェンクラッセの学級の仲が深まっていることに気が付いたが特に追求せずに授業を開始した。

◇◇◇◇◇

その日の授業が終了した後ハンネマンにウッド達呼び出されて、彼らはハンネマンの研究室に向かった。

「やあ、来てくれて済まないな六人共。ベレト君の紋章の研究に夢中になっていて君たちの紋章を確認するのを忘れてしまっておったのだよ。」

「それは構いませんが……。」

「何を使って紋章を調べるのですか？」

「うむ、この装置を使って君達に紋章の力があるかを確かめさせてくれ。」

「そ……そういうえば、紋章ってそもそも何なんですか？」

紋章を調べようとするハンネマンにノワールが紋章とは何かを聞いた。

「なに、紋章を知らない？ そうかフォドラの外から来たと言っていたな……少し長くなるが、我輩が説明するでしょう。さて、まずは紋章とは何か、であるな。……紋章とは、力だ。遙か昔、女神より人に授けられたと言われ、人の体に宿り、血によって受け継がれる。紋章を宿した者は、魔道に優れたり、強靱な肉体を有したり、等々……それぞれ紋章に対応した、人智を超える力を持つのだ。」

「人智を超える力……か。」

「その反応だと何か心当たりがあるようだな。」

「あー、そうだな。」

「ふむ。その反応は気になるが……。まあよい、さてと吾輩の装置に一人ずつ手を乗せて行ってくれたまえ！」

「……因みに拒否権はありますか？」

「それに関してはと言っておこうか……。まあ、セテス君の様に例外中の例外はいるが吾輩の研究室にいる以上拒否権はないと思ってくれたまえ！」

有無を言わさぬ雰囲気であったため、渋っているセレナは溜息をつきながら承諾した。全員が承諾したのを見たハンネマンは一人一人確認していったが、アズール、ブレディ、ノワールの三名からは紋章は発見されなかった。

「さて、残るは君達であるが……」

「ふっ……… 漆黒のウッド… の出番のようだな。」

ウッドカッコつけながら装置に手をかざした。すると……

「こ、これは……!? 見たことのない文様……間違いなく大紋章！ まさか、フォドラの外にも紋章があったとは……この世にまだ我輩の知らぬ紋章が存在したとは……!! 格別の刺激だ！」

「ふっ………我が聖痕か……くっ………血が騒ぐ……っ!!」

「あー………やっぱりウッドはそいつが出てくるか………」

「むっ? 君たちはこの紋章を知っておるのか?」

「よく知っていますけど………全員の確認してからでいいですか?」

「ふむっ………構わないが………それではシンシア君も頼むぞ!」

「はい!」

元氣よく飛び出したシンシアがハンネマンの装置に手をかざした。

「先程に比べれば小さいがウッド君のものと同じものだな。」

「うわー！あたしにもこれがあったんだー！ルキナだけじゃなかったんだね！」

「……何やら大喜びしているが……事情があるのだな。」

自分も聖痕があったことを知ったシンシアは大はしやぎしていた。その様子をハンネマンは生暖かい目で見ていた。

「最後は渋っていたセレナ君か。それでは装置に手をかざしてくれたまえ！」

「……シンシアが出てきたってことは……。はあつ仕方ないわね……。」

セレナは渋々ハンネマンの装置に手をかざした。するとハンネマンからすると謎の紋章が、六人からすると見覚えのある紋章が出てきた。

「……この紋章は!?先程の紋章と同じく見たことのない形だ!……やはり、フォドラの外は興味深くなってきた。吾輩の人生の目標が一つ増えたよ！」

「あ……あの紋章って……。」

「シンシアに出てきたから……まさかとは思ったが……。」

「セレナ……。」

大喜びするハンネマンと対照的にウッド達は空気が重くなっていった。その様子を見たハンネマンが問いかけてきた。

「……その様子から察するに色々な事情があるのだな?」

「はい。」

「すみません……。ハンネマン先生、両方とも僕たちは知っています。」

「でも、説明に関してはウードとシンシアの紋章からにしてくれや」

ウード達の真剣な表情を見たハンネマンは承諾した。

「まず……。ウードとシンシアにでた紋章ですが……」

「俺達の国では聖痕と呼ばれているものです。」

「イーリス王家の人間に代々伝わっていくという聖王の一族である証です。」

「イーリス聖王国の話はベレト君やセテス君から聞いているが……。大変興味深いな……。」

ハンネマンはウード達が話す聖痕の話を大変興味深く聞いていた。

「もしかして……。シンシア君が先程喜んでいたのは……。」

「こいつの姉のルキナには聖痕があるが、シンシアにはなかった。多分姉との繋がりを確認出来て喜んだだろうな……。」

「ルキナやウードには聖痕があったけど、あたしにはなかったからちよつと気になっていたんだ。でも今日ハンネマン先生のお陰であたしとルキナの絆を確認できたから喜んじやつたんだ！」

「吾輩の研究がシンシア君のコンプレックスを救ったというなら研究者として喜ばしいことはいないな。」

シンシアが喜んだことに感激したハンネマンは複雑な顔をしているセレナに声をかけた。

「……さてと、セレナ君。いいかね？」

「……ええ、問題ないわ。」

「君はこの紋章を知っているのかね？」

「セレナ……。」

「……大丈夫よ。その紋章はね……。一言で言うとなあたしの父さん由来の紋章よ。」

複雑な表情を崩さないセレナにウッド達は心配したが、セレナは表情を変えずに答えた。

「君の父親由来の紋章か……。何か事情があるのだね？」

「まあ……。俺達も無関係じゃねえし、俺らの説明に参加させてもらおうか。」

「そうだね。」

事情を聴いてきたハンネマンにブレディとアズールが説明に参加すると宣言して、程なくしてウッド達全員が説明に参加した。

「その紋章は俺達のいた場所では邪痕と呼ばれているものです。」

「邪痕……？つまり、何やら禍々しいものだというのか……。」

「邪竜ギムレー……。大きさを言いますとこの修道院全部を覆ってしまうほどの大きさ

をもつ巨竜由来のものです。」

「そ、そんなに巨大な竜がいるというのかね!？」

「信じられないだろうが、実際そんな竜と俺達は死闘を繰り広げてきたんだ。」

「大いなる邪竜。世界をも滅ぼしてしまうほどの力を持つ邪神だからな。」

ハンネマンはギムレーの話に絶句していた。ガルグⅡマク大修道院を覆ってしまうほどの大きさを持つ邪竜……。そんな相手と目の前にいる六人が死闘を繰り広げてきたというのだから無理もない話であった。

「……あたしとしては父さんとマークの繋がりを確認できたことが嬉しい反面。ギムレーとの繋がりもまだあることが怖い反面があるから複雑な気持ちになっているのよ……。」

「……すみません、私達全員のトラウマ的な存在なので……これ以上は話せそうにないです……。」

「……そうか。残念だが、無理して聞こうとは思っておらぬから安心してくれたまえ。」ハンネマンは興味を持っていたが、トラウマを刺激すると言われてはこれ以上聞く気になれなかった。その言葉を聞いたワード達は機嫌が元に戻った。

「その代わりといっちゃあ何だが。俺の持っているイーリス聖王国の歴史書を貸出しするぜ。」

「そんなの持ってきていたんだ……。」

「え〜！そんなよりあたしの騎士物語の方が面白いって！」

「いやあなたの物語は脚色されているでしょ！研究なんだから歴史書の方が良いに決まっているわよ！」

「ぶーぶー」

「ふむつ、確かにイーリス聖王国の歴史は興味深いな……。申し訳ないが、借りたとしても返すのに時間が掛かってしまうがよろしいかね？」

ハンネマンは紋章学の権威として色々調べる必要があるため返却まで時間がかかる
とブレディに伝えた。

「ああ。構わないぜ、俺は3回読んだからな。」

「……って今持ってたんだね。」

ブレディは懐から分厚い歴史書を取り出すとハンネマンに手渡した。

「感謝しよう。むっ？これは上巻か……。」

「ああ、上中下の全3巻だが中以降はそれが読み終わってからの方がいいだろ？」

「……あんたそんな分厚い本持ってきてたんだ……。」

セレナは分厚い歴史書を持っていたブレディに呆れていたが、ハンネマンは歴史書の貸し出しについて了承した。

「……うむ。大変面白い時間であった。これは紋章学の新たな一面が見られるやもしれん。では、吾輩は研究をつづけるから戻ってくれて構わないぞ！」

「はい……失礼しました。」

「ふむつ、この紋章はベレット君の紋章と違って面白いな。聖痕か……。ブレディ君の貸出ししてくれた歴史書を早く読まなくてはな……。」

ウッド達との会話が終了するとハンネマンは紋章の研究をしだした。その様子を見た彼らは邪魔しないようにそつと扉を閉めて宿舎に戻っていった。ただ、宿舎に戻る際セレナは無言であった。他の5人もそんな彼女を気遣って、お喋りをせずに歩いたのであった。

しかし、次の日には元気なセレナを見たことでウッド達は安心するのだった。

白雲の章 摸擬戦

ウード達が自分の紋章を確認してから少しして……。

三つの学級の最初の摸擬戦が近づいていた。ベレトはウード達六人の実力がずば抜けていることを知っているため、彼らは摸擬戦には参加させないことをあらかじめ他のクラスにも伝えていた。しかし抜け目のないクロードによって、金鹿ヒルシユクの学級とウード達六人との手合わせをすることを了承させられたのであった。更にその話を聞きつけたエーデルガルト達黒鷲アドラーの学級との手合わせも行うことになっていた。

「……クロード達は相変わらず抜け目がないな。」

「確かに、あいつらとの手合わせを要求してきたしね。」

「話を聞きつけてきた黒鷲アドラーの学級の人達も手合わせを要求してきましたわね。」

「でも、彼ら六人が強いから不公平なのは理解できるわね。」

「ですが、ウード達が時間を見つけては僕達に付き合ってくれたではないですか。」

「まっ、フェリクスはセレナに毎回ポコポコにされてたけどな！」

「……シルヴァン。黙ってる……。」

「……だが、彼らの協力があつたから俺達は強くなれただろう。」

「そうだね。彼らの思いに答えるためにも負けられないね!」

模擬戦当日の朝。ドウドウー達は抜け目がないクロード達のことを話していた。ウード達との手合わせで強くなれたことの話題やクロードに一敗盗られたことに対する愚痴を互いに言い合っていた。

「ねえシルヴァン……。そういえば、デイミトリがどこに行つたか知らないかしら?」

「いや……。俺は知らねえな。」

「……。あいつなら奴の元にいるぞ。」

「ちよつと、フェリクスの先生を奴って呼ばないの!」

「……。フェリクスの言動はともかくとして、殿下は先生と一体何を……。」

「もしかしたら、先生と打ち合わせを行っているかもしれないね!」

「あり得そうだね! だったら、何時でも出発できるように準備しなきゃね!」

いつ模擬戦が始まってもおかしくないため、青獅子ルージュエンクラッセの学級の面々は支度を始めるのであった。因みにウード達というと、直前まで休みなしで三つの学級の生徒達と手合わせを行っていたため、現在は疲れ切つて宿舎で一休みをしているのだった。

◇◇◇◇◇

その一方ベレトとデイミトリは模擬戦前の打ち合わせを行っていた。

「いよいよ模擬戦か。はは、腕が鳴るな。先生はどうだ?」

「どんな戦いになるか楽しみだ。」

「良かった。先生の采配、期待してるよ。俺たちも、勝利のために力を尽くそう。」

「やあ、お二人さん。作戦会議かい？俺たちも交せてくれよ。」

「勘弁してくれ、手の内は隠すものだろ。相手が強敵なら、尚更だ。というより、ウッド達の一件でクロードには一杯食わされたからな。」

「ははっ、そりゃあ光栄だね。ならば期待に応えて、俺たちも奇策を用意しておかないと、なあ？」

「ええ、貴方たちがどんな手で来ようとも、それを上回る戦術で打ち破ってあげる。ウッド達のお陰で私達もクロード達も十分に実力はつけられたからね。」

「済まないなデイミトリ。ウッド達は正直言うところと化け物クラスの實力を誇る。セテスさんからの進言もあったから断ることが出来なかった。」

「まっ、利用できるものは何でも利用すべきだもんな。」

セテスを利用したことを悪びれた様子を見せないクロードにデイミトリは苦笑していた。

「だがまあ、何はともあれ。こうして摸擬戦を行う以上……あまり、無茶はしないようにな。」

「へえ。敵の心配をするなんて、随分と余裕があるようね、デイミトリ。」

「おやおや戦いはまだだつてのに、そんなに熱くなつて……我が学級は楽をできそう
だ。」

「そういうつもりじゃ……いや、悪かったよ。何はともあれ、実りある戦いにしよう。」

「ふふ、それはこちらと同じよ。そうでしょう?」

「二人とも、お手柔らかに頼む。」

「おつと、先生の本心はわかつてるんだ。負ける気はないつて顔に書いてある。」

「あらあら、みんな揃つてお喋りかしら? すっかり仲良くなつたようね。」

「君たちが親睦を深めるのは大変結構だが、そろそろ作戦会議の時間だ。」

「もうそんな時間か。それじゃ、お二人さん。また後でな。」

「貴方たちの力量、確かめさせてもらうわ。」

「さてと、先生。俺達も作戦会議と行こうか!」

ハンネマンとマヌエラの二人が現れると、クロードとエーデルガルトは作戦会議をしに立ち去つていった。それを見届けた後、ルーヴェンクラッセデイミトリとベレトは青獅子の学級に戻つていった。

◇◇◇◇◇

デイミトリ達の挑発合戦から少しして模擬戦開始時刻が迫っていた。一休みして体力を回復したウッド達は、デイミトリ達の模擬戦をジェラルト達と一緒に眺めていた。

結果は青獅子の学級の大勝利となった。クロードの指示を無視して突出してきた金鹿の学級ローレンツとイグナーツに加えて、釣り出しを図った赤鷲の学級のドロテアをデイミトリとアツシユが速攻で倒し、青獅子の学級は金鹿の学級を急襲した。クロードを守っていたヒルダをドウドゥーが撤退に追い込ませて、クロードはメルセデスの援護を受けたアツシユが倒した。そのままデイミトリがハンネマンを撃破して金鹿を壊滅させた。残る黒鷲の学級は正面から当たってきたため、数に有利な状況を活かしてそのまま赤鷲を全滅させたのであった。

青獅子の学級の大勝利に学級の生徒は大喜びをした。ワード達も喜んでいたが、セレナはあたしが手合わせを手伝ったんだから当然といった顔をしていた。

勝利した青獅子の学級の面々は食堂で祝勝会を行っていた。

青獅子の生徒たちは今回の摸擬戦で大活躍したメンバーを称賛して、食事会を楽しんでいた。

特に称賛を浴びていたのはイグナーツ、クロード、ヒューベルト、ドロテア、マヌエラの五名を撃破してMVPに輝いたアツシユであった。アツシユはMVPに輝いて物凄く緊張していたが、ハイテンションなシンシアに振り回されるうちに緊張が解けて心から楽しんだ。

青獅子の面々は先行して参加していたシンシア以外のワード達とベレットを引き連れ

たデイミトリが会場に入ってくると更に騒ぎ出した。普段は仏頂面のフェリクスでさえ宴を楽しんでいたのだから、相当に盛り上がった。途中でベレットがレアに報告するために抜け出したが、その日の宴はセテスによって解散させられるまで遅くまで盛り上がったのだった。

模擬戦が終了した次の日、ベレットは教室でレアから聞いた次の課題に関して伝えた。

「……次の課題はあの時の盗賊の討伐か……。」

「僕達とデイミトリが出会ったきっかけを作ったあの盗賊ですね。」

「いよいよ……実践か。緊張してきた。」

「まっ、気持ちには分かるぜ。……それよりもお前等には覚悟しておかなければならぬえ

ことがあるがな。」

「えっ？それってなんの覚悟？」

「……ここで俺が言っても恐らく実感は湧かねえだろうから……自分で見つけた方がいい。」

初めての実践に心躍る生徒達であったが、対照的にブレディはクラスにある覚悟を持つことを警告していた。しかし、詳しくはブレディは説明しなかったためなんの覚悟かはウッド達を除いた青獅子の生徒は理解していなかった。正確にはデイミトリとフェ

リクスの二人だけはウード達という覚悟が何のかは理解していた。そして、アツシユは何となく勘づいていた。

授業が終了後、アツシユはブレデイに声をかけた。ブレデイの言っていた覚悟が気になって仕方がなかったのだろう。

「ブレデイ！」

「なんだアツシユ？」

「先程君が言っていた覚悟とは……もしかして、人を殺すということに対する覚悟かな……？」

「……ああ。だが、ただの盗賊だからまだ温いほうだ。俺達はもつと悲惨な状況を経験しているからな……。」

「もつと悲惨な状況……だって!？」

「目の前で仲間が化け物になってしまう絶望……。そんな地獄を俺達六人は経験しているんだ。」

「め……目の前で化け物に……!？」

「ウードもあんなことをしている理由はちゃんとある。シンシアがヒーローに憧れるのにも俺達の過去が関わっているんだ。」

「……君たちの過去に何かあったんだね。」

「……悪い。自分で言っておいて、気分が悪くなっちゃった。すまねえが俺は行くぞ。」
「あ……ああ。」

物凄く暗い顔をしたブレディを見てアツシユはそれ以上追求することが出来なかった。その様子を影から見ていたシルヴァンは何かを考えていた。

「……成程な。あいつが言ったのは人を殺す覚悟……か。……ブレディの様子を見る限りだと、俺や殿下の経験したことはあいつらに比べたらまだましなのかもしれないな。」
いつになく真剣な顔をしているシルヴァンは思いつめた顔をしながら、自室に戻っていった。

同じころとある二人の人物がアツシユとブレディの会話を聞いていた。

「……人を殺す覚悟を彼らは知っていたのか……。年齢は他の生徒と変わらないようだが、ああ見えて修羅場をくぐり抜けているのだな。」

「……あのお方の様子を見る限り、相当苦しい経験をしていらしたのでしよう。……私達が経験したことよりも苦しいことがあったのかもしれないわね。」

「そして、人が化け物になる光景を見たのか。明るいシンシアも、変な発言をするワードも……やはり、事情があるのだな。」

「……それは私たちも同じですわよね。」

「ああそうだな。……盗み聞きをするつもりはなかったが、思ってもみなかった情報を聞けたな。」

「お兄様……。」

「戻ろうか……。まだ執務も残っているのだから。」

「はい」

偶々ブレデイの会話を聞いていたセテスは可愛らしい少女を連れて執務室に戻っていった。

更にもう一人ブレデイの様子を見ている人物がいた。ウッドである。

「……ブレデイの奴。無理しやがって……。あの時のことは一時も忘れたことはない。」

……だが、ここは息抜きができるようなイベントが必要だな……」

いつになくシリアスモードのウッドは、青獅子^{ルーヴェンクラッセ}の学級の空気を替えるためにイベントを企画しようとする場から去っていった。

白雲の章 二つの過去

ブレデイの意味深長な言葉を聞いても青獅子ルーヴェンクラッセの学級の面々は彼に対する態度を変えなかった。アツシユがブレデイの言葉の意味を考えれば成長できると説得したことが功を奏したようであった。

「やあ、おはよう！」

「早いなアズール……。」

「ブレデイこそ早いね。」

「……まあな。先日的一件事のことで悩んでいたんだ。」

「……覚悟、の話だよね。」

「……ああ。俺達はあの世界で生きて希望を繋げる為にどんなことでもやったよな……。」

「うん……。」

ある日早朝の教室でブレデイとアズールが先日の覚悟に関する話を話し合っていた。ギムレーを倒すために彼らは絶望と戦い抜いていたからだ。

「あの竜を倒す希望になる宝玉を探すために苦労したよね……。」

「ああ。倒れた仲間が屍兵になって、俺達を襲ってきたり……。」

「ギムレーの力を宿した連中を命からがら振り切ったりね。」

「あの時はマークの奴とレンハさんが助けに来てくれなかったら死んでいたかもしれないかったしな。」

絶望の未来で希望をつかみ取るために『白炎』を取り戻しに向かった時、大量の屍兵に囲まれて大変な目に彼らはあった。ルキナに頼まれてペガサスで助けに来たマークと偶々通りがかったレンハの二人が居なければウード達はこの世にいなかったかもしれない。

「あの吊り橋を渡り切ってイーリス城に辿りつくまで生きた心地がしなかったからね……。」

「まあ、マークの奴はイーリス城に先に戻っていて少し驚いちゃったがな。」

「うん、マークが無事だったのは本当によかったよ。……父さんと母さんが亡くなって、もう誰も仲間を失いたくなかったからね……。」

「そうだったな……。」

ブレディとアズールが絶望の未来で苦労したことを思い出して神妙になりながら話している。デイミトリ達が入ってきた。

「ブレディとアズールか！早いな。」

「おはようデイミトリ。」

「……何か話していたのか……？」

「……まあな。悪いが話すつもりはないぞ。」

「まっ、そう言われると気になってしょうがねえがな。」

ブレデイとアズールは先程まで話していたことを彼らには話さなかった。

「おっはよー！ さあて、今日も頑張ろうねー！」

「はは、シンシアはいつでも元気だな。」

「……毎朝付き合ってるあたし達は嫌になるわ。」

「……シンシアって、朝起きるのは苦手だし意味不明な寝言言うものね……。」

相変わらずの元気の良さを見せるシンシアを起こしに行ったセレナとノワールは溜息をつきながら教室に入ってきた。そのあとも続々と青獅子ルーヴェンクラッセの学級の面々が教室に入ってきた。ブレデイにも普通に挨拶をしており、昨日の一件を気にしている様子は見られなかった。そしてチャイムが鳴る直前にワードが入ってきた。

「遅かったわねワード……。」

「我が瞳が覚醒しせし時、血が騒ぎすぎていて……抑えるのに時を擁してしまった。」

「単純に遅刻しそうになったんでしょ……。」

「御機嫌よう、あたくしの一眼目を始めるわよ。」

厨二発言で言い訳しようとしたウードの発言をアネットがバツサリと切った。それと同時にマヌエラが一限目を始めるために教室に入ってきた。マヌエラの理学の時間になったため青獅子の一同は授業に集中しだした。

◇◇◇◇◇

その日の授業が終了後セレナは大広間でルフレから貰った戦術書を読んでいた。因みに書庫はトマシユとセテスが本の整理を行っているため本日は立ち入り禁止となっていたため大広間に向かったのだった。

「ふう……。いつまでも父さんから一本取れないのは良くないよね……。」

セレナは偶にルフレに戦術ゲームを挑んでいたが、まだ一回も勝っていなかった。ヴィオール你真似をして挑んでみたこともあったが、全て読まれていて駄目だったのだ。余りにも高すぎる壁であるのだが、負けず嫌いな彼女はルフレから彼が愛用している戦術書とルフレが書いた戦術書を貰って自習を行うようになっていた。

「あー！見つけたぞっセレナ！」

「……………うるっさいわね。何の用よカス。パル！」

自習を行っている、カス。パルが大声を上げてセレナの方に向かってきた。勉強をしていたセレナは当然のごとくカス。パルに怒った。

「もうすぐ実戦だろ？体が疼いちまってな。だからバトルしようぜっ！」

「……はあ、今あたしは勉強中なの。手合わせしたいなら他の人に頼みなさいよ！」

「なんだよ。手合わせするくらいいいじゃねえかよ。」

「いやよ。あたしは父さんに勝つために今は勉強したいの！」

カスパルは手合わせを引き受けてくれないセレナが言った父親に反応した。

「おっ？お前は親父を超えるのが目標なのか？」

「ええ、あたしの父さんは最強の軍師。戦術ゲームで今まで一度も勝てたことないわ。」

「戦術ゲーム……ってなんだ？」

基本的に体を鍛えることに集中しているカスパルは戦術ゲームを知らなかった。

「簡単に言うとお駒を使って模擬戦争をするゲームよ。」

「へえー。」

「……あんた興味なさそうね。」

「まあな。そういうものはリンハルトやヒューベルトにやらせた方がいいからよ。」

「……あんた少しはこういうのに興味持ちなさいよ……。」

戦術ゲームに全く興味をしめそうとしないカスパルを見てセレナは勘づいた。

「……あんた、もしかして小テストで赤点取ってんじゃないでしょうね？」

「うおっ！なんでそのこと知ってんだよ！」

「……本当に赤点取ってたのね……。」

「うぐつ……。べ、別にいいだろつ。卒業はできるんだからよ！」

「あんたは良くてもあんたの両親はなんていうかしらね。」

「そ、それは……。」

「分かったら、少しは勉強しなさいよ！」

カスパルはセレナに赤点を取ったことを指摘されて黙っていた。その様子を見たセレナは辺りを見回すとアズールが大広間に入ってきたのを発見した。

「……そんなに手合わせしたいんだつたら、アズールに頼めば？」

「……ん？おつ、アズールいるじゃん。そんじゃあ、また今度バトルしてくれよ！」

アズールを発見したカスパルは一気に元氣を取り戻してアズールの元へと向かっていった。

「ふう……。やっと戻れるわね……。」

カスパルはアズールを連れて訓練場に行ったのを確認したセレナは戦術書の勉強に戻るのであった。

「……なるほどね。前にヴァルハルトさんとの戦いでやっていった策はこれを参考にしたのね……。」

カスパルが居なくなつてからセレナは戦術書を読み更けていた。そんな彼女にイン

グリットが近づいてきた。

「セレナ……となりいいですか？」

「イングリット……ええ、いいわよ。」

イングリットに言われて大広間を見回すと生徒たちがチエスをしたりとたくさん集まっていた。セレナの隣に座ったイングリットは読書を始めた。セレナも戦術書に戻ろうとするとふとイングリットが読んでいる本のタイトルが目に入った。

「あれ……イングリット……あんたが読んでいるのって、『タリスの天馬騎士 シーダ』じゃない。」

「知っているのですか？……って、セレナはイーリス聖王国出身でしたね……。」

「もしかして……シンシアから借りたの？」

「はいっ！私のおすすめの騎士物語を貸したところ彼女がこれを貸してくれたんです。」

「確かにあの子……英雄物語を多く持っているもんね……。」

セレナはこの世界に来るときにシンシアが何十冊かの本を持ってきていたのを思い出した。何を持ってきたかを聞いたところ全て英雄物語であった。

「ええ。アツシユにも貸出ししていましたよ。……そういえば、セレナは読んだことあるのですか？」

「……幼いころにだけだね。あたしが幼いころは母さんと父さんは忙しくてね……妹の

マークによく読み聞かせていたな……。」

「セレナに妹さんがいたんですね……。羨ましいです……。私は一人っ子なので……。どんな人なんですか？」

セレナに妹がいることを聞いたイングリットは心底羨ましそうにしていた。

「……どこまでも甘えん坊で……。天真爛漫だけど……。ちよつと何処か抜けたところがある妹ね。」

「……それはいい妹さんですね。私の場合は……。シルヴァンやフェリクスの面倒ばかり見ていましたから……。」

「……何となくだけどシルヴァンの方がやらかしたことの重大さが目に浮かぶわね……。」

「全くです。王国の名将　グエンダル卿の息女を口説いて、激怒した彼に何故か私が頭を下げに言ったりしたことがありますし……。」

「うわっ……。シルヴァンって、幼馴染がいるからって調子に乗りすぎなんじゃ……。」

その後はセレナはシルヴァンのやらかしたことにドン引きしていた。

「ええ、彼の父君もあまり叱りませんでしたし……。そのしわ寄せが私に来てしまつて……。アズールはどうなんですか？彼もナンパをよくしていますよね？」

「……まあ、アズールもアズールで、人妻や王女を口説いて問題起こしていたわね。その

後始末は父さんやマークス様がやっていて、特にマークス様からは頻繁に怒られていたわ……………」

セレナは暗夜王国時代にアズールがマークスによく叱られていたことを思い出していた。

「あの……………セレナ。マークス様……………ってどなたなのですか？」

「あつ……………ごめん。その話は今度にさせて……………ちよつと複雑な話だから……………」

「は、はあ。……………分かりました。」

セレナはアズールの愚痴でうっかりとマークスの名前を出してしまったことに気が付いて、慌てて今度に話すと言つてごまかした。イングリットの方は何か今は話したくない事情があると思つて追及してこなかった。

「……………そういえば、セレナが読んでいる本つて何ですか？色々書き込みもしているみたいですけど……………」

「これ？これはあたしの父さんから貰つた戦術書よ。」

「……………ちよつと見てみてもいいですか？」

「ええ、構わないわよ。」

セレナはイングリットに自分の戦術書を渡した。受け取つたイングリットは戦術書を一通り見てみたが、非常に高度な戦術指南が乗っており自分では無理だと思つて彼女

に返却した。

「非常に高度な戦術書ですね。……私では無理ですね。」

「……まあ、至高の軍師である父さん直筆の戦術書だからね。あたしでも追いつくのがやつとよ……。」

「……セレナのお父様はルフレさんというのでしたね？どんなお方なのですか？」

フォドラ大陸では見ることが出来ないほどの高度な戦術書を直筆できるセレナの父にイングリットは興味を持って聞いた。

「……そうね。一言で言うとう万能の天才ね。剣と魔法の両方を使いこなせる天才だったわ。あたしの剣も父さんから習ったからね……。」

「凄い方ですね……。」

「ただマークのようにどこか抜けたところはあつたわね。料理の味を『鋼の味』にしてしまったらね……。」

「……どうやったら、そのような味になるのでしょうか……。」

イングリットはセレナの語るルフレの人物像を興味深そうに聞いていた。

「……でも、あたしにはそんな父さんに一本取るといふ目標はあるけど人生の夢はないわ。その点あんたは騎士になるといふ夢があるんでしょ？」

「はい。私は幼い頃から王国に仕える騎士になるのが夢でしたから……。色々あります

が今でも諦めてません。」

「……夢があるのは羨ましいわね。あたしはもう誰かに仕えようとは思えないから……。」

「もしかして、マークスさんという方が関係していますか？」

「……まあ、ある意味関係しているわね。悪いけどそこに関しては今は話せないわ……。」

「セレナ……。」

寂しそうに呟くセレナに対して、イングリットは何も言えなかった。

「あつ、悪かったわね。こんな雰囲気にしてしまつて……。」

「構いませんよ。私にも話したくないことだつてありますから……。」

「……そつか。さてと、話題を変えるわよ。」

「ええ、分かりました。」

湿っぽい空気になつてしまつたのを感じたセレナが空気を変えるために話題を変更した。

「あんたは騎士物語が好きなの？それとも英雄物語が好きなの？」

「私は騎士物語ですね。英雄物語も面白いと思いますが、私の理想である騎士の物語がいいですー！」

「なるほどね。因みにあんたがシンシアから借りた『タリスの天馬騎士 シーダ』は、シンシアのご先祖様で自らもペガサスナイトだったシーダ王妃の物語よ。」

「えっ!この物語はシンシアのご先祖様の物語なのですか!?!」

「シンシアは英雄王マルスとシーダ王妃の子孫ね。それはシーダ様に関する物語だからもしかしたら、騎士物語よりは英雄物語に近いかもしれないわね……」

「なるほど……シンシアのご先祖様の英雄物語だったのですね……。因みにアッシュが借りたのは『蒼炎の勇者 アイク』でしたね……。」

「『蒼炎の勇者 アイク』は最強の勇者であるアイクの英雄物語よ。」

「……見事に騎士物語ではないですね。」

「どうやらシンシアは間違えて英雄物語の方をアッシュとイングリットに渡してしまったようである。」

「……シンシアはかなりのドジだから。あんた達が英雄物語が好きだと勘違いしたと思うわ……。」

「……まあ、借りた以上は読ませて頂きます。」

「そうそう、シンシアは騎士物語もちゃんと持ってきているわよ。」

「本当ですか!?!」

「ええ、ジェラルトさんと行動を共にしている時に確認したから間違いないわ。何の偶

然かシンシアが持つてきた本の中にあたしが知っている騎士物語があったわね。」

「そ……それってどのようなタイトルですか!？」

イングリットは嬉しそうにセレナに聞いてきた。

「6つぐらいしか覚えてないけど……それでもいい?」

「問題ないです。というより、よくそれだけのタイトルの名前を覚えていますね……。」

「まあ、昔はよく読んでいたからね……。紙にタイトルを書いて渡すけどいいわよね?」

「是非お願いします。紙を見せたら、さすがに間違えませんかよね……。」

「……一応借りた時にタイトルを確認しなさいよ。」

「ええ、分かりました。」

イングリットがセレナの忠告を了承したので、彼女は小さな紙を取り出して6つの騎士物語のタイトルを書きだした。

「これでよしと……はい。」

「あ、ありがとうございます。えつと……タイトルは……『伝説の騎士と猛牛のカインと黒豹のアベル』、『マケドニアのペガサスナイト三姉妹』、『黒騎士カミュ』、『伝説の女騎士 マチルダ』、『獅子王エルトシャン』、『漆黒の騎士と神剣エタルド』の6つですね?」

「そうよ。その6つはあんたが求めている騎士物語よ。アツシユにも伝えてあげたら

？」

「はい、ありがとうございます。それでは、シンシアから借りた本を……」

イングリットがここまで言いかけた時にチャイムが大広間に鳴り響いた。

「あつ……チャイムが鳴ってしまいましたね」

「そろそろ戻らないとセテスさんが来るから急いで戻るわよ！」

二人は急いで、荷物をまとめて宿舎に戻っていった。宿舎に着くとイングリットは騎士物語を紹介してくれたお礼を言っつて自室に戻っていった。セレナはイングリットと分かされると部屋に戻り、キリのいいところまで戦術書の勉強をするのであった。

白雲の章 盗賊退治

ブレデイが警告してから少し経ち……青獅子の学級とセイロス騎士団との実戦演習を行なった。

因みに青獅子の学級とセイロス騎士団との実戦演習はの圧勝となった。MVPになったのはアネットで魔法を使ってセイロス騎士団の体力を削ったり、自ら魔法で責めたりと大活躍であった。因みにウード達はまだ見学を行っていた。しかし、次の課題からは彼らの参加も解禁されるためウード達は文句を言わなかった。

時は過ぎて豎琴の節の末日。

ガルグⅡマク大修道院による実戦の日となっていた。当日を迎えた青獅子の学級の面々は実戦の準備をしていた。しばらくすると教室にベレットが入ってきた。

「先生、今しがた騎士団から連絡が入った。ちょうど全員を集め終えたところだ。」

「予定通り、盗賊を追い込んだそうです。場所は、赤き谷ザナド。」

「悪事を働く盗賊を放っておくわけにはいきません。力を合わせて頑張らしましょう！」

「……いかなる敵であろうと殿下には指一本触れさせません。」

「面倒だ……敵はただの盜賊だろう。腕の立つ者がいるとも思えん。」

「つれないこと言うなよ。俺は楽しみだぜ。ほら、美人の女盜賊がいるかもしれない。」

「……何にせよ、今の私たちが実戦でどれだけ通用するか確認する、良い機会だよね。」

「そうね、模擬戦でも上手くいったのだし、普段どおりやればきつと大丈夫よ。」

青獅子の面々が実戦に興奮していたり、盜賊を許さないという雰囲気に含まれている中でワード達は静かであった。

「みんなの戦いに期待するよ。」

「「はいっ！」」

「ワード達は……最初から平気のようだね……」

「我らは天啓を賜りし時から深淵を覗く意気込みを手中に収めているからな……」

「……あいつらに比べたら盜賊くらい可愛いものね……」

「確かにな。あいつ等に比べたらこんな状況……温いな。」

盜賊の討伐で緊張している青獅子ルーヴェンクラッセの学級であるが、ワード達は幾度も人との戦いを行ったことがあるため全く緊張しておらず戦士の目を六人共していた。

ベレットは少々浮かれている青獅子の面々をやんわりと注意した後、赤き谷に青獅子ルーヴェンクラッセの学級を出陣させたのであった。

それから少しして盗賊たちが追い詰められている赤き谷に一同は着いた。

「さてと、そろそろ盗賊達を殲滅させる。準備はいいな？」

「問題ない。」

「赤き谷、か……立ち入るのは初めてだな。何かの遺跡のようにも見えるが……何はともあれ、始めよう、先生。すでに賊は奥へと追い込まれているはずだ。」

「それでは、盗賊殲滅の実戦を行う。これは訓練ではないということを十分に理解して進んでくれ！」

「はいっ！」

「ディミトリ！号令を……」

「はいっ！……進軍開始！」

ディミトリの合図と共に青獅子ルーヴェンクラッセの学級の面々は進軍開始した。当然盗賊側もその動きはしつかりと見ていた。

「……クソツ！ 騎士団の奴らか？こんなところまで追つてきやがって……！」

「お頭、もう逃げましょうよお！ 奴ら相手に勝つてこないですよお！」

「……馬鹿野郎、今更どこへ逃げるってんだ！死ぬのが怖くて盗賊やってられるかよ！野郎ども返り討ちにしてやれ！」

「おう！」

盜賊側も迎撃するために進軍を始めるのであった。

「この赤き谷は西側に裏道がある。ウッド達六人とアネット、フェリクス、アッシュ達は正面の盜賊を相手にしてくれ！」

「ふっ……任せるがいい！」

「いいだろう。」

「了解しました！」

「任せてください！」

「残りは西側から進軍して二方向から敵を攻撃する！」

「二はいっ！」

ベレトは赤き谷の地形を確認後すぐに二方向からの挟撃を思いつき青獅子ルーヴェンクラッセの学級に指示を出した。正面の大量の盜賊に向けてウッド達はすぐさま向かっていった。残りのメンバーは西側の小道へと向かい、作戦を開始した。

「はあっ！ウインド！」

「ぎゃあああああ」

「はあ……はあ。良かった、何とかなった……。あたしでも、戦える……！」

「……やあ！」

「ぐっ……」

「…………躊躇していたら、僕たちが殺されていた。…………これが、戦いなんですね。そして、ブレディが言っていた人を殺すということ…………。」

正面から盗賊を相手にしているアネットとアツシユは初めての实战で人を殺したことですこし堪えてしまい、他の生徒たちの中にも露骨に動きが悪くなっている人がチラホラと出てくるのだった。

「せいっ!」

「やあつ! 『華炎』!」

「はいっ、たああああ! 『旋風槍』!」

「…………やっ!」

「アヴェイキング・ヴァンダー!」

「喰らいなボルガン!」

「…………こいつら動きが良すぎる…………。もしや本物の戦場を知っているな…………。」

ウード達は攻めてくる盗賊相手に一切躊躇せずに攻撃をしていた。余りにも慣れた手つきを見たフェリクスは彼らが本物の戦場を経験していることを悟るのであった。

「ぐっ…………あの時の化け物五人もいやがるのか…………。」

「お頭、大変です! 奴らが西側から責めてまいました!」

「チツ、西からも攻めて来やがったか! ガキの分際で、頭の回る…………!」

西側から進軍したベレット達の中にも人を殺したことに堪えてしまった生徒はいたが、デイミトリ達は今は何も考えないで進軍していた。

「おいつ！西側から奇襲されているぞ！」

「まずいつ！お頭を助けに戻るぞ！」

「今よつ！一斉に攻撃しなさい！」

「「おおつ！」」

盜賊のお頭が攻撃されている様子を見た盜賊達は動揺して慌ててお頭の元に戻ろうとした。それを見過ぎさなかつたセレナは正面から盜賊と戦っているメンバーに突撃の指示を出した。

「むっ、盜賊の動きが鈍いな。」

「フェリクス達がやってくれたんでしよう。」

「今だつ！デイミトリ、敵将のコスタスを討てつ！それ以外のみんなはデイミトリの援護をつ！」

「「はいつ！」」

「……殿下。お供いたします。」

「ああ、頼むぞドウドウー！」

盜賊の動きが目に見えて鈍りだしたので、ベレットはデイミトリに敵将を討つように指

示を出した。デイミトリはドウドウーを連れて敵将まで向かうのであった。

「まずいぞ、どつちから攻撃……ガハッ！」

「ま、仕方ないこつた。恨んでくれるなよ。」

「せめて主の御許で、安らかに……。」

シルヴァン達が盗賊を倒していったことで残りは敵将 コスタスと数名を残すになつていた。

「苦勞も知らねえ貴族のガキがッ！今度こそおとなしく死にやがれ！」

「生憎と、そういうわけにはいかない。……己の所業を悔いることだな。」

「おめえら、奴らを殺せ！」

「「うおおおおお」」

デイミトリとドウドウーはコスタスの元にたどり着き攻撃を仕掛けようとしていた。コスタスは最期の抵抗で残っている部下に突撃命令を出した。盗賊達はデイミトリに攻撃仕掛けたがドウドウーが弾き飛ばした。

「くそつ、くそつ、くそがあああああ！」

「せいっ！」

デイミトリはコスタスの斧を弾き飛ばして槍で突き刺した。

「あんな奴の……口車に乗ったのが……間違いだつた……がはっ……」

不気味な言葉を遺してコスタスは倒れた。敵將が討伐されたことで残党は蜘蛛の子を散らすかのように逃げ出した。

「逃がすものか……！ 蒼炎劍ブルーフレイルムソード！」

「ヒーローとして逃がさないよっ！ 天空！」

散り散りになって逃げたそうとした残党はウッドとシンシアが全滅させた。フェリクス以外の青獅子の面々は彼らの強さに驚いていた。

ウッドとシンシアが全滅させたことで青獅子ルーヴェンクラッセの学級による盜賊退治は終了となったのであった。

盜賊討伐後青獅子ルーヴェンクラッセの学級は大修道院に戻ってきた。初陣を勝利に終わられたことと一緒に胸を撫で下ろした。その後は自分の活躍を自慢する者や人を殺したということので落ち込む者など様々な反応を示していた。

初陣を済ませて緊張が解けてざわざわしている一方でフェリクスはアズールに話しかけていた。

「おいっ、お前等の戦いぶりを見たがお前等は本物の戦場を知っているな？」

「……まあ、動きで分かる人は分かるよね。うん、そうだよ。僕達六人は本物の戦場で戦ったことがあるよ。」

「……だが、それ以外にも経験しているな？かつての仲間を切ったことがあるな？」

「……悪いけど、僕達六人にとっては仲間内で話し合う以外ではあまり思い出したくないことだから……。」

「……奴らは地獄を見てきたのか……」

アズールはフェリクスにその話題は話したくない為逃げするように去っていった。その様子を見たフェリクスはアズール達が地獄を見てきたことを悟るのであった。

その後はベレトが報告に向かったので、青獅子ルーヴェンクラッセの学級の面々はその場で解散となった。

◇◇◇◇◇

(おまけ ブレデイのお茶会)

盗賊討伐から一夜明けた次の日ブレデイは市場に向かっていき、行商人のアンナに話しかけていた。

「あらっ、いらっしやい。」

「よう、アンナさん。いい紅茶は入っているかい？」

「ええ、今日は『セイロステイ』と『ローズステイ』が入っているわ。」

「おっ、両方とも良い茶葉だな。しかも『ローズステイ』に関しては最高級の『フォドラローズ』じゃねえか！手に入れるのに手こずったんじゃないか？」

ブレディはアンナが良い茶葉を手に入れた経路を聞いた。

「そうね。専門の人と交渉したりそれなりに大変だったわね。」

「ありがてえな。それでこれ二つでいくらだ？」

「毎度あり、この金額になるわね。」

「おつ、思ったより安いな。……またいい茶葉が手に入ったら売ってくれ！」

「ふふつ、またのご来店を！」

ブレディは良い茶葉を手に入れて気分よく歩いていた。そして庭園に差し掛かるとローレンツとヒルダが話しながら歩いているのを発見したため声をかけた。

「よう、ローレンツにヒルダじゃねえか！」

「むつ、ブレディ君か。僕に何か用かい？」

「すつごく嬉しそうですねー。ブレディくん、何かいいことでもあったの？」

「実はいい茶葉が手に入つてな。お裾分けを考えていたら二人が通りがかつたんだ。」

「ほう。……どんな茶葉だい？」

『『フォドラローズのローズティー』だ！』

「えーっ!?!、あの高級な茶葉を手に入れたのー!?!」

フォドラ大陸においてフォドラローズは最高級の薔薇であるため、手に入れるのが難しい茶葉であった。それを手に入れたと聞いた二人は物凄く驚いていた。

『フォドラローズ』か……。僕も一度だけ飲んだことがあるがあそこまでの上品な味はないな……。』

「あたしも気になるー！ねえねえ、飲ませてもらってもいい？」

「勿論だ。そのつもりで声を掛けたんだからな。」

「ふむつ、それじゃあ。茶器は僕のを提供しよう。それでは少し待っていてくれたまえ。」

ブレディから最高級の紅茶の話を聞いたローレンツはウキウキしながら、茶器を取りに自室に戻った。

「そんじゃあ、お茶会の準備をするからよ……。ヒルダは庭園で席を取っておいて貰っていいか？」

「いいよー！『フォドラローズ』のお茶が飲めるんだもん。それくらい問題ないよ。」

茶器を取りに向かったローレンツを待つ間。ブレディはお湯を沸かしたり、お菓子を作っていたノワールからお菓子を分けてもらったりとお茶会の準備をしていた。少ししてローレンツが茶器を持って食堂に入ってきた。

「待たせたな。これが僕の愛用する茶器だ！」

「へえ、この色合い……。とてもいいものじゃねえか！」

「至高の茶葉にはそれに合う茶器を用意するのは当然だからね！」

「まつ、それもそうだな。おっと、お湯が湧けたな。」

「ポットは3つあるから3種類の味わいを用意しないか？」

「それは良いな。ローズティーにはレモンとはちみつが合うからそれをいれてみようぜ。」

「それはいいな。……さてと、ヒルダさんが待っているから急ごうか。」

ブレディとローレンツはお茶会の準備を終えるとヒルダが待つ庭園に向かっていた。

「あつ！来た来た。こつちだよー」

「待たせたな。それじゃあお茶会を始めようぜ！」

「ああ。まずはストレートに飲もうか！」

ブレディはお茶菓子を置いたので、ローレンツは3つのカップに紅茶を注いでいった。

「ありがとうー！」

「気にすんなって、そんじゃあ。ローレンツも味わってくれ！」

「ああ。では、頂こう。……ふう。この色、この香り、この後味。まさに

至高の紅茶と呼ばざるを得まい。最近は良く出来た紛い物も多いが、これは最高の品質……よく入手できたな。」

「うーくん、美味しい！あたしはローズティーが大好きなだけど……。こんなに美味しいローズティーは初めてだよー。」

「それに、ノワール君のお茶菓子も紅茶に合って大変上品な味だ！」

「うんうん。結構腕がいいよねー、今度ノワールちゃんから貰おうかな……」

ノワールが提供したお茶菓子もローズティーに会った物らしくローレンツとヒルダは至福の一時を過ごしていた。

「……ふう。久々に美味しい紅茶に出会えたな……。やはり、美味しい紅茶はみんなで飲むと更に上手いな……。」

「確かに……。こんなに上品な味だと更に美味しい。それにしても、ブレディ君。君は口調は兎も角として……紅茶を飲む作法といい、奥深さといい。貴族に相応しい人柄なのが伺えてくるよ……。」

「そいつは光栄だな。……俺の母さんがこういった貴族の嗜みに詳しい人だよ。幼いころから色々教えて貰ったんだ。」

「ほう、それは興味深い話だな。」

「ブレディくんのお母さんか……。どんな人だったのー？」

「そうだな……。プライドが高くかなりの自信家だったな。それでいて正義感が強く法務官として奮闘していたな。」

「ほう……法務官か。」

「母さんはよく『法の前では全ての人は平等であるべし』と言って、俺に教育をしてくれた方だったよ……。」

「結構変わった一面があるお母さんなんだね。」

「……法の前では全ての人は平等であるべしか。どうやらフェルディナントの理想を体現とした人物だね。」

「あー、確かに！フェルディナントくんも正義感が強いもんねー」

フェルディナントの理想を体現とした人物がマリアベルであることを知ったブレディは驚いていた。

「へえ……あいつがそんなことを……貴族の鏡みたいなやつだから知らなかったわ。」

「ふっ……彼と僕はクラスは違うが共に高めあう同志だからね……。」

その後もマリアベルの話や紅茶の話題で三人の会話は弾むのであった。ブレディの用意した紅茶を複数の飲み方で楽しんだりしていた。

「あー、そういえば。噂で聞いたんだけど、ブレディくんってバイオリンが弾けるんだってー？」

「何っ!?それは本当かブレディ君？」

「まあな。一通りは弾けるな。」

「もし良かったら聞いてみたいなー！」

「僕からも頼もうか。君の腕前が気になるからね！」

「分かった。準備するから少し待つてろ……」

ローレンツとヒルダに頼まれたブレデイはバイオリンを取り出すと奏でだした。その音色に庭園にいた他の生徒達も聞き惚れていた。演奏が終了した後庭園に生徒からの拍手がブレデイを出迎えて、ローレンツとヒルダと共にその日は楽しい一日を過ごしたのであった。

白雲の章 ロナート卿の叛乱

盗賊討伐から時は経ち……

ワード達は青獅子ルーヴエンクラッセの学級で勉強と訓練に励んでいた。このころからベレットは初級試験パスを資格がある面々に渡して試験を受けるように言った。その結果の主な面々は次々をクラスチェンジを行ったのであった。ワード達も勿論初級試験を受験して、あっさり合格していた。

盗賊討伐の一件があり、クラスの面々も実践の恐怖を知ったためこれまで以上に鍛錬に真面目になって取り組んでいた。

「はい、あたしの勝ちね。」

「ぐっ……また俺の負けか……」

「相変わらず強いなセレナは……」

「……フェリクスも奮闘していますけどまだまだ実力の差はあるようです。」

訓練場で鍛錬している青獅子の面々であるが、セレナがフェリクスを叩きのめしていた。デIMITリ達はワード達のことを信用しているが彼らの強さには驚愕が続いているのであった。

「うらっ!」

「……甘いよっ!隙ありっ!」

「し……しまった。ゴハッ!」

「ふふん、あたしの勝ちだねー!」

「参った参った、降参だ。……ったく相変わらず強いなシンシアは……」

「シルヴァンはちよつとサボりすぎじゃないかしら?」

「ぐっ……否定できねえな……」

その傍らではシルヴァンとシンシアが手合わせを行っていた。しかし、訓練をサボり気味であったシルヴァンはあっさりとシンシアに敗北するのであった。

「じゃあー。次はイングリットだねー。」

「ええ。よろしく頼むわねシンシア!」

シルヴァンと交代してイングリットがシンシアとの訓練を行いだした。そしてセレナは今度はデIMITリと訓練を行い始めていた。

残りの四人は何をやっているのかという……ワードとブレディはアネットとメルセデス共に魔法の勉強を行っていた。ノワールはアッシュと弓術の訓練を行っていた。そしてアズールは青獅子の一般生徒を訓練しているのであった。

しばらく青獅子の面々だけで訓練を行っていると……ペレットが走って訓練場に入っ

てきた。

「全員集合！一大事が起こった！」

「先生？みんな、先生の周りに集合しよう！」

全員がベレットの前に集合するとベレットが話し出した。

「先程レア様から今節の課題を言い渡された。」

「今節の課題ですか……？」

「そのどこが一大事だというのだ……」

ベレットはアツシユを見ると告げた。

「アツシユ……心して聞いてほしい。」

「えっ!?僕に関わることですか!？」

「ロナート卿が叛乱を起こした。」

「……………えっ!？」

「ロナート卿が!?!……一体どういうことなんだ先生?」

突然の事態にアツシユは茫然としてしまった。ディミトリも衝撃を受けてベレットに聞いた。

「俺も詳しいことはしらない。ただ大事なのはロナート卿が叛乱を起こして、青獅子^{ルイウェンクラッセ}の学級の今節の課題は叛乱の鎮圧だということだ。」

ベレトが今節の課題を告げてから数日後……

青獅子の学級の面々はいつも通り授業を受けていた。しかし、アツシユは授業は受けても心ここにあらずという状況であった。青獅子の面々はアツシユの気持ちがかかるのでそつとしていた。しかし、その様子を見かねたアズールがある日の晩にアツシユを釣り堀に呼び出した。

「こんな時間に僕を呼び出して何の用なのアズール？」

「……君を見ていると昔の僕を思い出してしまつて放っておけない気がしたからね……こんな時間に呼び出しをさせてもらったよ。」

「……アズール。」

「僕に話したところで解決するわけじゃない。けど、胸の内をさらけ出してごらん。少しは気が晴れると思うよ。」

アズールは昔両親を失つて塞ぎ込んだ自分を思い出して、アツシユを放っておけないと考えたようだ。その為彼の胸の内をさらけ出すために釣り堀に彼を呼び出したのだ。アツシユとアズールは釣り堀に腰掛けるとアツシユは話し出した。

「……ロナート様は……孤児だった僕を養子にしてくださいました。僕の弟たちも屋敷に住まわせてくださる優しい方なんだ……」

「……そうか。」

「そんな方が……僕に何も言わないで叛乱を起こしたただなんて……何かの間違いに決まっている……。」

アツシユはロナート卿が叛乱を起こしたことを認めたくないよう涙を流しながら、アズールに打ち明けた。

「ねえ……アツシユ。僕達六人はね。本当の両親を失っているんだ。」

「えっ……だつてシンシアは聖王の娘なんじゃ……。」

「其処に關してはまだ話せないけど……大事なのは、僕達六人の実の両親は既に亡くなっている。それも……化け物から僕達を守つて……ね。」

「……………」

アズールは自分の過去をアツシユに語りだした。アツシユは何も言えなかった。

「僕達がかつていた場所には邪竜ギムレーと呼ばれる竜が世界を滅ぼしてしまつたんだ。」

「えっ?!世界を……滅ぼしただつて!?!」

「うん、その上亡くなつた人々を屍兵と呼ばれる化け物に変えてしまつたんだ……。」

「……もしかして、前にブレイデイが言つていた悲惨な状況つて……。」

「……先程まで一緒になつて戦つていた仲間が屍兵になつて僕達を襲つてくるという状

況だね……。僕達はね。生きるためにはどんなことでもしたさ。」

「……それってワード達もだよね？」

「そうだね。ワードもセレナもシンシアもブレディもノワールも……みんな必死になって戦ってきたんだ。」

アズールの話をアツシユは聞いていた。話を聞いているうちにいつの間にか彼の目から涙はなくなっていた。

「ねえ……アツシユ。僕達は家族をもう守ることはできない。でも、君は違うだろ？」

……ロナート卿を助けるのは恐らく難しいと思うよ……。でも君の家族を守ることはできるよね？」

「あつ……………」

「……これは推測だけど、多分ロナート卿は君に後を任せるつもりで叛乱を起こしたんじゃないかな？」

「ロナートさまが……僕に……？」

「セイロス教と彼の間になんかあったかは僕は知らない。きつとそこに事情があっただろうね。」

「……………」

「ただ一つ言えるのは、ロナート卿は君を大事に思っているからこそ何も告げずに叛乱

を起こしたんだろうね。」

「それは……。」

「勿論、僕の推測も入っているし正確なことは分からないよ。でも、ロナート卿は信念を持って動き出した。それなのに君はここで立ち止まってしまふのかい？」

アズールの言葉にアツシユは返答をしなかった。ただ、彼の言つた言葉がアツシユの心に響いていた。

「無理をするなどは言わない。でも……僕がロナート卿だったら、立ち止まった君の姿は見たいとは思わないと思うよ。」

そう言うときアズールは宿舎に立ち去つていった。残されたアツシユは、しばらく一人で考えていたが立ち上がると宿舎に戻つていくのであつた。

次の日……青獅子の面々がクラスに入るとすこし気分の晴れたアツシユの姿がそこにあつた。昨日までと変わつて授業と鍛錬に集中して行かうようになっていた。デイミトリ達は彼の様子を見て少し安心した様子で授業を受けるのであつた。

◇◇◇◇◇

それから時は経つていよいよ課題の時になつた。

青獅子^{ルーヴェンクラッセ}の学級の面々は戦の支度をするときガスパール領へと向かつていった。

ガスパール領に到着すると、出陣前の最後の準備に取り掛かりベレットたちは会話をし

ていた。

「武勇名高い」雷霆のカトリーヌ”さんとご一緒できるとは……ふふ、光栄ですね。」

「雷霆ってなんだ？」

「はん、知らないのか？これが”雷霆”……英雄の遺産の一つだ。遙か昔、女神より力を授かりし10人の英雄……その子孫に伝わる聖なる武具さ。つつても、今回は雷霆を振るう機会はない。アタシらの任務は事後処理だからね。」

英雄の遺産のことを知らないベレトにカトリーヌが自分の得物を見せた。彼は興味深そうにカトリーヌの英雄の遺産を見ていた。

「……やはり、ワードは目をキラキラさせているわね……。」

「う、うん。でもシンシアもカトリーヌさんの得物を見るよ……。」

「まっ、あいつ等とつてああいふものは羨ましいんだらうよ……。」

カトリーヌの得物をワードとシンシアは目をキラキラと輝かせてジーツと見ていた。その様子を見たセレナ達は呆れていた。当然カトリーヌはワード達の視線に気づいていないわけがなくこちらにやってきた。

「あんたらが青獅子ブルーエンクラーツセの学級に編入した傭兵かい？」

「は、はいっ！」

「セテスから色々話を聞いているよ……。おやつ？……。あんた……隙がないね。」

「……初めて会った相手に警戒するのは当然だと思えますけど?」

「ははっ、言ってくれるね。」

初対面の相手に警戒するセレナの隙の無さにカトリーヌは興味深そうに見ていた。その後はウード達も一瞥して面白いものを見たという表情をした。

「……六人共良い目つきだね……。どうやら、六人共本物の戦場を知っているようだね……。」

「!!?!?」

「あはは……。やっぱり、分かる人には分かってしまうんだね……。マークス様の時みたいな……。」

「ちっ……。いきなり何言ってるんだか……。味方同士だつていうのによ……。」

「おっと……。これはすまないね。シャミア以来に面白い奴らにあつたからついつい観察してしまったよ……。」

カトリーヌの言ったウード達が本物の戦場を知っているということに青獅子ルーヴェンクラッセの学級の面々は驚いていた。ただし、なんとなく勘づいていた面々と事情を知っている面々は驚いていていなかった。

「あんたらの腕前は信用に値するだろうね。……でも観察はさせてもらおうよ……。」
カトリーヌはウード達にそう告げるとデイミトリ達との話に戻っていった。

「……なんだお前も気が付いていたのか。」

「……まっ、セレナの剣捌きやアズールの隙の無さから何となく勘づいていた程度だけどな。」

「最近訓練サボっていたのに……ちよつと見直したわ。」

「……見直した……つて、どんだけ俺の評価が下がってんだよ……。」

「でも、あなたはナンパばかりして訓練サボってたじゃない……否定できるの？」

「ぐっ……まったくもつて否定できねえな……。」

カトリーヌの発言に勘づいていたシルヴァンはイングリットの彼の評価が下がっていることを知ってガツクリとしていた。

「……まあ、勘づく奴はいると思っていたがな。」

「そ、そうね。あのカトリーヌさんつて人を見ているとサイリさんを思い出すわね……。」

「確かに彼女を思い出すね。口調や立ち振る舞いは全く別だけどね……。」

「まあ、カトリーヌさんのことはともかく。……あのバカ二人はどうする？」

「どうするつていわれてもよう……。」

「放っておくしかないんじゃないかしら？」

カトリーヌに勘づかれたことを話している四人の傍でウッドとシンシアは本物の英

雄の遺産に興奮して、浮かれていた。

「報告！敵が接近中です！ 避けられません！敵の兵力が予想以上に多く、霧のせいで騎士団の包囲をすり抜けてきます！」

そんなこんなで戦い前の会話をしていると教団兵が駆け込んできた。

「おっと……ベレト、任務変更だ。総員、戦闘準備にかかれッ！」

「「おおっ！」」

カトリーヌの号令で青獅子ルーヴェンクラッセの学級は戦闘態勢に入った。

「こう霧が濃くちや、どこにどれだけ敵がいるんだか把握できないね。霧の中から敵が……囲まれたか？けど、厚く包囲できる兵力はないはずさ。分散した敵を各個撃破して、包囲を切り崩すよ！」

「霧の中から喚声が……すでに騎士団が戦闘を始めているようだな。」

「……なあ、カトリーヌ。」

「どうしたベレト？」

「……ガスパール領はこんなに霧が濃くなる地形なのか？」

「いやっ……そんなことはないね。」

「となると……霧を濃くしている術者がこの付近にいるな……。警戒担当は篝火を絶やささないよう警戒を怠るなよ。」

ベレトの指示を受けた警戒担当の面々は篝火を強くした。

「……そこかっ！アヴェイキング・ヴァンダー！」

ウードが霧に紛れて近づいてくる敵に気が付いて先制攻撃を行った。

「ぐっ……気づかれたか。」

「ちっ……霧を盾にしてくるとは面倒だね。」

ベレトの予想通り濃霧を起こしているのはロナート卿側だと知ったカトリーヌは舌打ちをしながら戦闘に入った。

「えっ!? あ……あれは……まさかっ!?」

「うおおお！領主様を死なせてたまるかああ！」

「まさか街のみんなまで戦場に……!?ロナート様は、どうしてこんな……!」

ガスパール軍との戦闘に入ると粗末な鎧を着た人々が此方に攻めてきた。

「やあっ！」

「ロ……ロナート様……」

「……これって……。」

「民兵か……いや……恐らくはロナート卿を守るために……」

ロナート卿を慕う民衆たちが粗末な装備をしながら、此方に攻めてきたのであった。

民を斬ることを躊躇してしまった一部の青獅子の面々は負傷してしまうが、セイロス騎

士団によって切り伏せられるのであった。

「ロナート様……どうか、生き延びて……おらたちの分まで……！」

「くっ……すまない……。こんなことが、許されてたまるものか……！」

デIMITリとアツシユは襲ってくる民兵を苦悩の表情を浮かべながら倒していた。

「見つけたっ！はっ！」

「ぐっ……見つけたか……。だがこの身尽きようともロナート様には近づかせぬ……！」

「あいつが術者だ！ノワール……討てっ！」

「はいっ！やあああああっ！」

霧の中を注意深く観察していたノワールが濃霧を発生させている術者を発見した。それを確認したベレトはノワールに討ち取るように指示をだし、ノワールは戦技『ブレイクシヨット』を放ってガスパール兵長を討ち取るのであった。

「よしっ！術者を討ち取ったか……これで……！」

「……霧は晴れても、我が息子の無念は晴れぬ！腐った中央教会に主の裁きを……！！」

濃霧を起こしていた術者をノワールが討ち取ったことで霧が晴れて、ガスパール軍の姿が露になった。そして、鬼の形相をした一人の老将が此方の軍を……特にカトリーヌを睨みつけていた。

「皆の者かかれっ！我が息子を裏切った狂信者……雷獄のカサンドラを討ち取れー！」
「アタシの名はカトリーヌだ。女神の僕たるセイロス騎士団の剣、その身で味わいな！」
ロナート卿は霧が晴れた途端に全軍をカトリーヌ目掛けて進軍させた。

「フェリクス、アズール、セレナ、シンシア！カトリーヌの援護に入ってくれっ！」

「……いいだろう。」

「了解しました！」

「任せなさい！」

「まっかせてー！」

ロナート卿の狙いがカトリーヌであることを察したベレトはフェリクス達前線メンバーをカトリーヌの援護に回らせた。

「他の面々はディミトリとアッシュを援護しろっ！」

「「はいっ！」」

ベレトは大勢の戦力が押し寄せるカトリーヌに実力者四人を援護に向かわせた。そして、残りのメンバーを引き連れて最短距離でロナート卿目掛けて進軍するのだった。

「ロナート様はオラが守るだ！」

「……っ！きゃあ！」

「危ないっ！」

「あ……ありがとう。ウッド……。」

「気にするな……。戸惑う気持ちは分かる……。今は前に進むんだ。」

苦悶の表情を浮かべながら戦っていたアネットが奇襲してきた民兵に襲われたが、間一髪でウッドが魔法で倒した。苦悶の表情を浮かべているのはアネットだけではなかった。他の面々も民からの攻撃をなんとかかわしながら倒していった。しかし、盗賊討伐の時と異なり彼らの士気は上がらなかった。

「ロナート様……。もうおやめください！なぜ、こんな無謀な振る舞いを……！」

「そこを退くのだアツシュ！わしは……。クリストフの無念を晴らさねばならん……。いくらお前であろうとも我が息子の復讐を止めることは許さぬっ！その為に……。裏切者と女狐を……。レアは民を欺き、主を冒瀆する背信の徒！大義は我らにある！」

「だからって、こんなことは間違っています！街の人たちまで動員するなんて！」

「……ならば遠慮なく、刃をわしに向けよ！わしはもう、後には引けぬのだ……。いくら義息子であろうと容赦はせんぞっ！」

「ロナート様っ！」

アツシュは必死になってロナート卿を説得しようとするが、息子を失った怒りと哀しみでもうアツシュの言葉は彼には届かなかった。

「アツシュ！危ないっ、リザイア！」

ロナート卿はアツシユに攻撃を仕掛けてきを見たメルセデスが彼を救うためリザイアを放った。リザイアを喰らってロナート卿が怯んだ隙にウードがアツシユを救出した。そして、今度はデイミトリがロナート卿に向き合った。

「ロナート卿……。どうしても刃を交わす気か？」

「申し訳ありません、殿下……。あなたと刃を交えることになろうとは……」

「……ロナート卿。貴公の悲憤、察するに余りある。貴公を討つのは本意ではない、が……すまない。」

「殿下……。我が子のため、民のため、私は、ここで止まるわけにはいかぬのです。道を開けられぬと仰せならば、押し通るしか……！」

「……ロナート卿……。」

デイミトリも説得を心掛けたが、聞く耳を持たないロナート卿はデイミトリをよけてカトリーヌに突撃していった。その様子をデイミトリは悲痛な表情で見っていた。

「雷獄のカサンドラ！ 貴様だけは……貴様だけは……このわしが！」

「……せめてアタシの手で送ってやるよ。主の身許へね……！」

そういうや否やカトリーヌはロナート卿に激しい連撃を繰り出して、一閃した。その攻撃で彼は呆気なく倒れこんだ。

「あの、女狐、め……ああ……クリストフ……父を、許せよ……。」

ロナート卿が討ち死にしたことでガスパール軍の士気が下がり、そこをロナート卿の義息子であるアツシユが説得したことで叛乱は終息を迎えた。

「……どうして、こんな。ロナート様は優しい方だったのに。街のみんなも、いい人ばかりで……僕は、そんなみんなを……殺してしまった。こうするしか……こうするしか……」

「……無理をするな、アツシユ。」

「……ご心配をおかけして、すみません。……僕、ちよつと街の様子を見てきます。弟たちが、無事でいればいいけれど……。」

ロナート卿が戦死して叛乱を終わらせたアツシユは彼が叛乱を起こしたことにシヨツクを受けていた。その様子を見た他の青獅子の面々は何も言えなかった。そして、アツシユは家族のことを思い出して様子を見に行くのであった。

それからしばらくして弟たちを引き連れたアツシユが戻ったのを見た一同はガルグⅡマク大修道院に戻るのであった。その日は青獅子の面々は無言で宿舎まで戻っていたのであった。

白雲の章 武術大会

ロナート卿の叛乱を鎮圧してから一晩が過ぎた。ロナート卿の死後も彼を慕う民が叛乱を起こそうとしていたが、養子であるアツシユが必死に説得したことが功を奏したのか彼らは矛を収めた。その為、ガスパール領の人々へのおとがめは無しとなった。……それとは別に大司教レアの暗殺計画がロナート卿の屋敷から発見されたため、また叛乱を起こされたら溜まったものではないセイロス騎士団の思惑もあったが……。

そして、アツシユの弟達はガルグマク大修道院近隣の教会に引き取られることになった。ロナート卿の死にアツシユは落ち込んでいたものの、弟たちの声援とを受けただことで少しづつ立ち直っていくのであった。

時は少し戻り……

「みんなあつまつたな……」

「先生、もしかして今節の課題が決まったのですか？」

「ああ。先日のロナート卿の叛乱で大司教の暗殺計画書が発見されたのは知っているな？」

「……もしかして、今節の課題は大修道院の警備ですか？」

「ああ。セイロス騎士団の人手が足りないらしく他のクラスも動員するようだ。」

「私たちは何をすれば宜しいのですか先生？」

「俺達は暗殺計画に備えて情報収集も頼まれている。」

ロナート卿の一件の後の翌日の朝にベレトは今節の課題をに説明していた。

「……なるほど。だったら、みんな。何かつかんだら俺か先生に報告をしてくれ。」

「分かりました！」

「やれやれ、穏やかに過ごせる雰囲気じゃないですね……。」

「それとは別に今節は武術大会も開催される！」

「そういえば、そんな時期だな……。」

「でも、私たちのクラスの勝利じゃないかしら？」

ベレトはセイロス騎士団の要請だけに彼らが縛られないために武術大会の持ち出して、話の空気を変えた。

「そうですね。セレナ達は参加するのでしょうか？」

「悪いけどあたしはパスね。」

「僕も辞退するよ。」

生徒の中では屈指の実力を持つセレナとアズールが不参加を表明したため、青獅子^{ブルーエンジェルス}の学級の一同行は驚愕した。

「……実力者であるお前たちは参加しないのか？」

「まあね。あたしはちよつとその日は用があるから出れないわ……」

「僕も用事があるから出ないよ。」

「まっ、用事があるなら仕方ねえよな……。」

「……仕方ない。剣術に自信がある者は参加してみてください！」

「「はいっ！」」

「武術大会に集中するのもいいが、情報収集も忘れないように……。では、授業を開始するぞ。」

朝の集いを終えた青獅子^{ルーヴェンクラッセ}の学級の面々は授業を受け始めるのであった。

今節の課題を言い渡されてから少し経って、青海の節の6日。青獅子^{ルーヴェンクラッセ}の学級の主な面々は大広間に一度集合していた。

「暗殺計画に備え、大修道院の警備に当たる。それが俺たちの今節の課題だったよな。騎士団はレア様の警護で忙しいとのことだが敵の狙いはむしろ、そちらでは……。」

「ああ、俺もそう思う。」

「……意味を、お聞きしても？」

「ロナート卿は暗殺計画の記された密書を始末もせずになぎわぎ持っていた。暗殺計画に皆の目を集め、他の何かを狙っている……とは考えられないか？」

「貴重なものといえば……宝物庫ね！ 他にも書庫とかハンネマン先生の部屋とか……」

「大修道院には、英雄の遺産に匹敵するような武器がいくつもあったはずだ。」

「ま、狙いが何であれ、修道院の女性たちに被害が及ばないようにしないと。」

「……修道院内を調べ、敵の狙いを探り当てる……ということでしょうか。」

「そのとおりだ。それに敵との戦闘に備え、訓練にも力を入れておきたい。」

「そういえば、ワード達はどこ行っただんですかね？」

「彼らなら既に個別に動き出している。元傭兵の観点で動くはずだ。」

「でしたら、その情報に期待しましょう！」

「デIMITリ達が今節の行動を話し合っているとシャミアが少年を連れてこちらにやってきた。」

「顔を突き合わせて悪巧みか、先生。おっと、直接名乗ったことはなかったな。私はシャミアだ。」

「シャミアさんはセイロス騎士団の一員だ。で、こちらの少年が……」

「レアさまの従者で、シャミアさんの弟子の、ツイリルです。」

「シャミアの弟子なのか……。」

「弓とか剣とか、稽古をつけてもらってます。ボクもレアさまを守りたくて……。だか

ら、シャミアさんの弟子に。」

「ツイリルはレアさんが大好きだからな。ま、互いにやれるだけやろう。」

「ああ、よろしく頼む。因みにウッド達は一足先に動いている。」

「奴らなら大丈夫だろうよ。さてと、私はもう行くぞ。」

その後は青獅子ブルーエンクワッセの学級の面々は解散して、それぞれ動き出した。

デイミトリ達がミーティングを終えると武術大会に参加する者や応援する者は訓練場に向かい、それ以外の生徒は個別に動き出した。

デイミトリ達のミーティングから少し経ち…訓練場で武術大会が始まろうとしていた。

参加者は合計で32人の生徒が参加することになった。その中にはウッドとシンシアもエントリーしていた。因みに参加者がここまで多いのは、今回の大会にセレナとアズールが不参加であることが大きい。カトリヌと互角とも言われている実力を持つ二人とは大会では戦いたくなかったためである。

「なるほど……これだけの人数がいるとそこそこかかりそうだな……。」

「まあ、剣術ですし案外早く終わると思いますよ。」

「……それもそうだな。ところでお前も参加するのだよな？シルヴァン？」

「……ええ、殿下とイングリットに言われたら参加するしかないじゃありませんか……。」

「……ですが、殿下。シルヴァンはサボり気味なので一回戦負けもあり得ると思います
が……」

「……っつておいつ！流石に一回戦で負けないっての！」

「ふう……。まあ、取り合えずは結果を出すことだな……」

「セレナとアズールがいないんだから頑張りなさいよね……」

「……そんなに実力を疑われてんのかよ……」

デIMITリとイングリットによって強制参加させられることになったシルヴァンは、最近鍛錬をサボっていたことで彼らから実力を疑われていて落ち込んでいた。その一方でフェリクスは神経を研ぎ澄まして、瞑想をしているのであった。

セテスによって武術大会が開催することが宣言されて、審判を務めるイエリツツアの準備が整ったので武術大会 剣術部門が開催された。順番に戦い始めて、次はウードの出番となった。

「……この漆黒のウードの相手は貴様か……。ふっ……相手をしてやろう……」

「……えーつと。これはどう反応したらいいの？」

「時間がない……構えろ。」

ヒルシユクラッセ

ウードの対戦相手は金鹿の学級所属のフルーフオルジュロであった。鍛冶屋の義父をもつ少女であるが、ウードの芝居がかかった発言に困惑していた。その様子を見て

いたイエリツツアはさっさと試合を行うように告げた。

「……と、とりあえず。勝負ですよ、ウッドさん！」

「始めっ！」

開始の宣言と共にフウルはウッドに訓練剣で斬りかかってきた。対するウッドは自分の訓練剣で受け止めた。その後はしばらくフウルによる猛攻が続いたが、ウッドはそれを流れるように受け流した。

「くっ……攻撃が当たらないっ……!?!」

「おいおい……フウルの剣筋を完全に見切ってやがるぞあいつ……。」

「……セレナちゃんとアズール君だけだと思っただけだと思っただけだ、彼も相当強いんだね。」

フウルの剣筋を見切って受け流しているウッドの様子をクロードとヒルダは完全に観戦モードで見ている。

「……せいっ！」

「きゃっ！」

しばらく受け流していたウッドはフウルの焦りで生まれた隙について、フウルに勝利したのであった。

「うー……負けてしまいました。」

「勝者……青獅子の学級ルーヴェンクラッセのウッド！」

修道士のクラスについて魔法ばかり習っていたウッドが実は剣術も強いことを知って、訓練場は驚きの空気に包まれていた。

勝利したウッドが退出して、今度はシンシアが壇上に上がった。

そしてイエリツツアによる開始の宣言から数秒でシンシアは相手の訓練剣を叩き落としていた。その様子をクロードは面白そうに見ていた。

「やっぱ、シンシアの奴もやるねえ。ウッドとシンシア……どっちが勝つか気になってきたわ……。」

「そうだねー。」

クロードとヒルダはウッドとシンシアの試合をお菓子を摘まみながら観察していた。

◇◇◇◇◇◇◇◇

二回戦は二人共危なげもなく圧勝して突破して、三回戦を迎えた。最初の試合のカスパルがイングリットを破って準決勝に駒を進めた。そして次の試合はウッドとアドラークラッセ黒鷲の学級のフェルディナントになった。

「ふっ……：ウッド君。今度はこの私、フェルディナントⅡフォンⅡイーギルが相手になるうー！」

「いいだろう……。我が奥底に潜みし常闇の力を解放してやろう……。」

「……始めっ！」

イエリッツアの合図と共にフェルディナントがウッド目掛けて突撃してきた。彼はそのまま剣で受け止めて、反撃してきた。それをフェルディナントがろうじて耐えていたが、最終的にウッドに剣を弾き飛ばされてしまいフェルディナントは敗北した。

「くっ……負けてしまったか……」

「先程の剣筋……なかなかのものであったぞ……フェルディナントよ……」

「勝者、青獅子ルーヴェンクラッセの学級のウッド！」

フェルディナントにも圧勝してしまいウッドの強さに会場の人々は騒いでいた。そして、ウッドが退出して次はシンシアとレオニーの戦いになった。

「さてと……負けないよ……シンシア！」

「意気やよしっ！こっちも全力で行くよー！」

「始めっ！」

「やあああああっ！」

「ていつ！」

イエリッツアの合図と共にレオニーがシンシアに攻撃してきたが、彼女はそれを受け止めた。受け止めた彼女は一端弾いてからレオニーに攻撃してきた。

「はいっ！」

「ぐっ……なんてパワー……！」

「まだまだいくよー！そらそらっ！」

「くっ……」

シンシアの猛攻をレオニーは何とか紙一重でかわしていた。シンシアはそんなレオニーに猛攻を仕掛けていったが、段々とシンシアの攻撃が大振りになっていき、レオニーはシンシアの攻撃が大振りになった瞬間を見逃さなかった。

「今だっ！せいやつ！」

「あっ！」

「勝負あり……勝者、ヒルシユクラツセ金鹿の学級のレオニー！」

レオニーがシンシアに勝つという大番狂わせが起こり、会場は熱気に包まれた。

「やった！レオニーちゃんが勝ったー！」

「おいおい、大番狂わせじゃねえか！」

凄まじい實力を見せていたシンシアにレオニーが勝ったことで金鹿の生徒たちは大喜びしていた。一方敗北したシンシアはスツキリとした顔をしていた。

「……負けちゃったよ。でも、久々に熱くなれたからよかったよレオニー！」

「……ふう……。セレナの動きをちよつと真似てみたが、うまくいつて何よりだよ

……。」

「……お前たち、次の試合の邪魔だ。降りろっ！」

「すみませんっ！」

レオニーはシンシアと会話をしていたが、イエリツツアに次の試合の邪魔と言われたので速やかに降りた。

◇◇◇◇◇

敗北したシンシアと迎えたのはブレディとノワールだった。

「まさか、久しぶりにお前が負けるのを見たな。」

「そ、そうね。私たちやベレト以外でシンシアが負けたのはバリスさんの手合わせ以来かしら……」

「うん、そうだねー。まあ、私のメインウエポンは槍だからここから鍛えなおすだけだよ！」

ワード達とベレト以外との手合わせでシンシアが敗北したのは、かつて共に戦っていた『蒼炎の勇者 アイク』の子孫であるバリス以来であったため、ブレディとノワールは驚いていた。しかし、シンシアはここから鍛えなおそうと気合を入れていた。

「ふっ……我が闇の同胞が地に墜ちてしまうとはな……。だが、漆黒よりいでし我が聖痕がこの場に月光をもたらしてやろう……。」

「……相変わらずワードが何言っているか分からねえな……。」

「多分、シンシアの代わりに自分が優勝すると言っていると思うわ……」

「……よく分かるな……。」

「……っというか、あたしを勝手に闇の同胞にしないでよー!」

相変わらずのウードの厨二発言にブレデイが困惑しているとノワールが訳した。一方の正義のヒーローを目指すシンシアはウードに闇の同胞扱いされたことを抗議していた。

一方三回戦の最後の戦いはフェリクスがペトラを破って準決勝に勝ち残った。これで、準決勝に進んだのはイングリットを破ったカスパル、フェルディナントを破ったウード、シンシアを破ったレオニー、ペトラを破ったフェリクスの4名となった。

レオニーがシンシアを破るといふ大番狂わせが起こった三回戦が終了して、いよいよ準決勝になった。準決勝第一試合はレオニーとフェリクスの勝負となった。

「さてと、負けないよ。フェリクス!」

「いいだろう……。来いっ!」

「始めっ!」

イエリッツアの号令と共に同時に攻撃を仕掛けて打ち合っていた。準決勝まで来ただけあつて凄まじい剣戟の試合となったが、基礎技術があつてかレオニーが段々と劣勢になつていった。

「くっ……。シンシアよりも早いっ!」

「当然だ。俺の速度はまだまだ早くなるっ！」

「ちっ……。早すぎて、隙が見つからないね……。」

「隙ありっ！」

「し、しまった。」

フェリクスの際を探そうとして、逆に隙を付かれてしまったレオニーが敗北した。

「あっちゃー。あたしもまだまだだっってことだね……。」

「ふん、いい剣筋だったぞ……。」

試合を終えた二人は互いの健闘を称えて、舞台から降りていった。その様子をヒルダとクロードが見ていた。

「あー、レオニーちゃん負けちゃったね……。」

「まっ、シンシアに勝つという大番狂わせをやったんだ。十分だろ……。」

「それもそうだねー。」

レオニーとフェリクスの試合が終わって次はカスパルとウードの試合となった。

「おっしやー、負けねえぜっ！ウード！」

「……この熱血ぶりあいつを思い出すな……。さてと……。漆黒の剣士の力とくと見よっ！」

「始めっ！」

開始早々ウッドとカスパルの二人共に仕掛けてきた。力任せに素早く訓練剣を振るうカスパルに対して、足さばきをうまく利用してテクニカルに動くウッドの試合は互角の勝負となっていた。

「やりやがるぜっ! だったら、この連撃はどうだー!」

「ちっ……ジエローム並みの一撃だな……。いや……あいつよりはましだな。」

「この攻撃も受け流すだどっ! すっげえっ、楽しくなってきたぜっ!」

カスパルの怪力を知っているの面々は受け流しているウッドの体捌きに驚いていた。

「……これは驚きね。カスパルの力技をあそこまで受け流すだなんて……」

「くくく……あの男は珍妙な行動をするだけの人間ではなかったということですね。」

カスパルの腕をよく知っているエーデルガルトとヒューベルトはウッドの評価を再評価していた。

「おまえやるじゃねえか! だったら、もっと筋肉の力を見せてやるぜっ!……ふんっ、おらあっ!」

「……見切った!」

「何っ!?!」

「せいっ!」

ウッドの実力を認めたカスパルが渾身の一撃を放ったが、大振りになってしまったこ

とでうまく受け流されて敗北した。

「勝負あり……勝者、青獅子の学級ルーヴエンクラッセのウッド！」

イエリツツアの宣言でウッドの勝利が確定した。青獅子の学級ルーヴエンクラッセの面々はどちらにしろも青獅子の生徒が優勝することが決まったため大喜びをした。

◇◇◇◇◇◇◇◇

青獅子の興奮が続く中、ウッドとフェリクスの決勝戦が行われることになった。

「血が騒ぐ……宿命の剣士との決戦……腕が疼くぞ」

「……何を言っている……さっさと構えろ……」

二人が剣を構えると訓練場からは互いを応援する声が響いた。

「始めっ！」

開始早々、フェリクスが神速の動きでウッドに連撃を放った。ウッドは見事な体捌きで受け流していった。そして、ウッドは隙を見つけてはフェリクスに反撃したがフェリクスは素早い動きで防いだ。

「……流石にやるな。……決勝まで来ただけはある。」

「……こいつの剣筋……油断できないな……」

「……あいつ強すぎだよな」

「ああ。魔法に加えて剣も使えるのか……」

「変なことはいうけどな……」

クラスは修道士なのに剣でフェリクスと渡り合うウッドに一同驚愕していた。一方のフェリクスは精神を研ぎ澄ませると一気にウッドに襲い掛かった。

「くらえっ!」

「くっ……貴様の刃……我が漆黒と渡り合うか……」

フェリクスの凄まじい連撃にウッドは段々と押され始めていった。しかし、それでもウッドは決定的な隙はフェリクスに見せなかった。

「はあっ!」

「ふん、奥義『流星』!」

「なっ、何っ!?!しまった……」

隙を見せないウッドの剣筋にフェリクスは未完成であるが『流星』を発動して、ウッドの守りをぶち破いたのであった。そして、フェリクスはウッドの訓練剣を弾いて剣を首元に当てた。

「そこまで……!勝者、フェリクス。……よって今節の武術大会の優勝はフェリクス!」
決勝戦はウッドの守りを破ったフェリクスの勝利となった。青獅子の面々はもちろんのこと、黒鷲や金鹿も互いの健闘を称えて惜しみない拍手を二人に贈っていた。

この後はフェリクスに優勝賞金と優勝賞品の贈呈を行い、2位ウッド達にも参加賞が

配られるのであった。商品を渡すとイエリツツアはさつきといなくなったので、それによりお開きとなった。

「……ウード、よく頑張ったね。」

「まあ、最近魔法に集中していた割にはよくやった方なんじゃねえのか？」

「そうだよー。それにしても、未完成とはいえフェリクスが『流星』を放つなんて驚いたねー！」

「蒼穹のアズールが悪しき闇の眷属に放ち、宿命の剣士が傍に戦っていたのだろう。」

「あー、普通に喋ってくんねえかな……」

「アズールが盗賊との戦いのおきに『流星』を放つところを見て、見よう見まねでやったと思うぞ。」

「な、なるほどね。アズールの真似をしたんだね……」

ウード達は宿舎に向かいながら、武術大会のことを話したっていた。当然ことながらフェリクスが『流星』を放つたことに関して話していた。ウードは盗賊討伐の時にアズールが使ったのを見て見よう見まねで未完成ながら習得したのではないかと推測していた。その推測を聞いて3人は納得した表情を見せていた。

宿舎に着いた彼らは一先ず自室に戻って、本業のレアの暗殺計画の調査にそれぞれ赴くのであった。因みにセレナとアズールは夜に戻ってきてベレトに報告した後宿舎に

戻っていった。こうして武術大会の日が終了となったのである。

白雲の章 女神再誕の儀

武術大会から一夜明けた次の日……

武術大会に参加したメンバー（ワードとシンシアは除く）は昨日戻ってきたセレナとアズールに手合わせをお願いした。昨日出なかったからせめて手合わせを行ってくれというベレトの頼みもあって二人は引き受けた。そこで次の休息日に手合わせを行うことになったのであった。

手合わせの件が決まった後は女神再誕の儀に向けて打ち合わせを行っていた。

「……なるほどな。先生とデイミトリは聖廟が怪しいと睨んでいるのか……」

「ふん、猪一人では考えられなかっただろうな。」

「フェリクス……!」

「ははっ、フェリクスの言うとおりで。先生の情報収集がなければ絞り切れなかったよ……」

昨日の武術大会の最中にベレトが一通り調査を行っていた模様で、デイミトリは敵の狙いが聖廟であると推理していた。

「それはそうとして……セレナとアズールは昨日どこ行ってたんだ?」

「あつ、それは私も気になる！」

「……武術大会を棄権してまでどこに行っていたんだ？」

「……別にここで報告するつもりだったけど……」

「おっと、疑うような聞き方をして済まなかったな……」

その一方でシルヴァンはセレナとアズールが昨日何していたのかが気になっていた。それは他の面々も同じように二人に問いかけた。問いただすような口調にセレナが難色を示したが、シルヴァンが軽く謝つてとりあえず話し出した。

「あたしとアズールは西方教会と東方教会に調査に行つてたのよ。」

「西方教会と東方教会に……？」

「……もしかして、ロナート様の一件で調査に向かったのですか？」

セレナとアズールが二つの教会を調べに向かったことにアッシュはロナート卿の一件が切っ掛けと勘づいた。

「そうだね……名君であつたロナート卿があそこまでガルグマク大修道院に憎しみを滾らせていたことに疑問を感じたんだ。」

「なるほどね。それで西方教会と東方教会の調査に向かったのね。」

「……というか、よくバレなかつたな……」

「因みに武術大会の日に調査に向かったのはなるべく早いうちに調査を行った方がいい

と判断したからだよ。」

ロナート卿の叛乱で他の教会が関与しているのではないかと疑ったセレナとアズールの行動に青獅子の面々は感心していた。

「……別にこういった潜入捜査は前にやったことがあるから問題なかっただけよ。」

「確かにね。前に比べたら簡単な内容だったよ……。」

「前に比べたら……？」

「……あのこと言っているんだろ……。」

セレナとアズールが前に行つた潜入調査に比べたら簡単だったといったことにウード達以外は首を傾げていた。

「……そのことは一端置いておくとして、それで調査はどうだったんだ？」

「僕が調べた東方教会は真つ白だったよ。中央に対する不満は確かにあつたけど、叛乱を裏で操るほどではなかったな。」

「……東方教会は悪く言っちゃうと影が薄いわよね〜」

「メーチェの言うとおり、フォドラの歴史を見ても叛乱を起こしたことないよね……。」

アズールの担当であつた東方教会は真つ白であつたことにメルセデスとアネットは、昔から東方教会は影が薄いことにサラツとデイスつていた。

「……東方教会が影が薄いことはこの際別にいいとして……。」

「……まつ、今はそれはどうでもいいわな。」

「……東方教会もある意味哀れね……」

「西方教会はどうだったんだ？」

東方教会が影が薄いことに青獅子の面々がそこまで反応を示さなかったことにノールは若干引いていた。そんな空気を察したベレトがセレナが担当であった西方教会はどうであったか聞いた途端、セレナは数枚の書類を取り出した。

「少ししか持つてこれなかつたけど……真つ黒だつたわ……元々レア様に憎しみを持つていたロナート卿を唆したのは彼らだつたみたいね……」

「これは……大司教暗殺計画書にロナート卿の叛乱のやり取りまであるのか……」

「……ロナート様……」

「ねえセレナ、これはセテスさんに渡したの？」

「セテスさんにはもつと重大な証拠を渡してきたわ。今は女神再誕の儀で忙しくて動けないから終わり次第強制査察を行うといっていたわね……」

「なるほど……。つまりこれに関してには私たちが見ても問題ない物ということなんですね。」

「まあ、そういうことだろうな。ただし、他の学級には知らせないように……あくまでも女神再誕の儀が終わるまでだが……」

「「はいっ—」」

セレナの調査で思いがけない事実を知った青獅子の面々は打ち合わせを終了した為、その後はベレトの授業を受けるのであった。

◇◇◇◇◇◇

それからしばらくして……女神再誕の儀の当日を迎えるのであった。

因みに武術大会参加したメンバーによるセレナとアズールの手合わせは、ウッドとシンシアを除いた30人中22人が二人に手も足も出ずに叩きのめされて、残りの8名も敗北した。特に手合わせでは手加減を一切しないセレナと戦ったメンバーはボコボコにされたのであった。

青獅子の面々は事前の打ち合わせ通り、聖廟へと向かうのであった。

「いよいよ女神再誕の儀が始まる。俺たちも打ち合わせどおりに動こう。」

「は、お任せを。……先生も、問題はないな。」

「問題ない。」

「ええ、しつかり狙いは絞れましたからね。務めを果たしてみせましょう！」

「ああ、みんながいれば問題ない。」

「先生、頼みにしているからな。さて、それじゃあ……」

大聖堂の近くで話しながら進んでいると前からセテスとフレンがやってきた。

「君たち、緊張感が足りないようだ？間もなく女神再誕の儀が行われるのだぞ。我々が女神の塔に入っている間、警備が薄くなりそうな場所を特に警戒してくれ。」

「大体の目星がついた場所に向かっているから安心してくれ……」

「ならばいいが……」

緊張感がないことをセテスが咎めたが、ベレットが問題ないことを言うとセテスは納得した様子を見せた。するとここで傍にいたフレンドがベレットに微笑みながら、セテスの話をしてきた。

「先生、聞いてくださいいます？お兄様だったら、酷いのです。心配だからお前は棺の中にも隠れていたらどうか、なんて仰いますのよ？ ふふふ。」

「そ、それは冗談だと言っただろう、フレンド。お前は私の後ろにずっといなさい。」

「セテスさん……完全にシスコンね……まって……これは……」

「確かにシスコンだな。」

「……シスコンってなんだブレディ？」

過保護な様子を見せるセテスを見てセレナは最初はシスコンと思ったが、彼女の勤が何か違うと察したようであった。その一方でブレディが二人の様子を見てシスコンと判断して、その言葉を聞いたドウドウが聞いてきた。

「か、簡単に言う……妹さんに対して極端な過保護を見せたりする人のことね。」

「確かに！セテスさんってフレンに対して過保護だもんね！」

「そうですねのよ。この前だってお兄様ときたら……」

「わかった、わかったからフレン……！その話は止めなさい。それはそうとベレト、君は教師として生徒をしつかり指揮するように。以上だ。」

「ふつつ、それでは皆さん、失礼いたします。儀式の後でまたお会いしましょうね。」

セテスの過保護に関してフレンが青獅子の面々に告げ口しようとする、セテスが慌てて遮って逃げるようにフレンを連れて立ち去っていった。

「逃げたな……」

「逃げたわね〜」

「逃げましたね。」

「ふつ……闇夜に去っていったか……」

当然のことだが、青獅子の面々にはセテスが逃げたようにしか見えなかった。

「セテス殿はさておき、時間だ。」

「さあ、予定の場所に身を隠すぞ。聖廟への入り口を見張るんだ。怪しい者が入っていないことがあれば、後を追って一人残らず捕まえる。いいな？」

「……おおっ！」

デイミトリの号令で先程までの空気から一変して青獅子の面々は真剣な眼差しで聖

廟に向かっていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇

聖廟に到着すると既に団体さんがご来場していた。

「俺たちの推理どおりだったらしいな。やはり、敵が入り込んでいる。」

「とうか、中央教会に裏切者いるでしょこれ……」

「確かにそうでなかったら、ここまで侵入されてないよね……」

「まあ、それに関してはおいおい明らかにするとして……カトリーヌに使いをよこそう。」

ベレトは青獅子の生徒をカトリーヌに使者として派遣した。すると、何かをやっていた謎の一団が此方の存在に気が付いた。

「もう中央の奴どもに気づかれたか……。わしが、棺の封印を解くまで時を稼げ！」

そのリーダーの号令で敵は反撃の構えに移ったので、青獅子は不屈き物を縛るために得物を構えた。

「敵の狙いは、奥の……セイロス様の棺だな。まさか、遺骨でも奪おうというのか……？ 棺を開けられる前に、敵を倒してしまいたいところだが……」

「おそらくそれは厳しいだろうな。中央に一切隙が無い謎の男がいる……」

「ああ。あの男以外にも床に奴らが仕掛けをしているようだ……。注意して動くぞ！」

謎の一団のリーダーが棺の封印を解こうとしているが、その前に圧倒的な存在感でその場に立っている謎の男がいた。

「死神騎士よ！ おぬしは強いのだろうか？ 奴らを蹴散らしてきてくれ！」

「貴様らの指図は受けん……。懦弱な者の相手など、退屈なだけ……。」

「……なかなかの手練れのようだ。あの騎士に無闇に挑むのは、下策だぞ。」

「……ただ単にやる気がないだけみたいだから今は無視していいと思うわ……」

死神騎士と呼ばれる謎の男はやる気なさげに馬に乗っていた。その様子を見たノワールは今は無視していいとみんなに助言した。

「さてと……三方向に分かれて進軍する！各自、罨に注意して進軍せよっ！」

「「はいつー」」

ベレトは一通り眺めた後、三手に分かれて進軍することを青獅子の面々に告げた。青獅子の面々は前に行った訓練通りに3つのチームに分かれて進軍するのであった。

「くっ……助っ人に来た癖して動かないぞ……」

「こうなれば、我らの力で蹴散らすのみよっ！」

「敵が動き出したぞっ！警戒を怠るなっ！」

死神騎士がやる気ないことを察した謎の一団は迎撃に動き出した。

「……聖廟を荒らす愚か者どもには容赦はしません！」

「そうね、手加減はしないわよ」

「ちっ、雑魚ばかりだな……」

「こ、こいつら強いぞ……」

「士官学院の連中はこんな強い奴がいるというのか!？」

謎の一団は青獅子の面々の強さに逃げ腰になっていた。それを見た謎の一団のリーダーは発破をかけた。

「ええい、何をやっている！罨や魔法を使って足止めをせよっ！」

「は、ははっ！」

リーダーの発破で連中は罨や魔法を使って足止めをしてきた。

「ドォラ△！」

「ファイア！」

「ウインド！」

「ブリザー！」

「ウォームZ！」

魔導士がそれぞれ魔法を放っていったが、ベレトの訓練を受けていた青獅子の面々は難なく相手の魔法を弾いていた。

「この程度……先生の訓練に比べたらどうということないです！」

「まっ、先生の訓練通りで逆に怖いかな……」

魔導士は青獅子の面々が難なく足止めを突破していく様子を見て焦りだしていた。

「増援はまだ到着しないのか……？ 奴らの背後についてくれれば、挟み撃ちにできるのだが……」

「お待たせしたっ！ 我等も参加するぞっ！」

「おおっ！ よく来てくれたっ！ さあ、足止めをするのだ！」

「……まあ、増援は呼んでいるわよね……」

魔導士が焦ったと思ったら敵の増援が青獅子の背後から現れて挟み撃ちにあった。

「……あの程度の連中だったら俺らに任せな。」

「みんなは聖廟を荒らす悪人をとっちめてね！」

「ふっふっふ、魂が躍動する……」

「了解した。彼らに任せて、制圧を急げっ！」

「「はいっ！」」

ワード、シンシア、ブレディの三人が中心となって敵の増援を引き受けることを聞いたベレットは残りの生徒に制圧を急ぐように指示を出した。するとここでノワールが何かを察してベレットに叫んだ。

「……!! 先生、伏せてっ！」

「……………?!」

「ほう……………かわしたか……………」

「むっ!」

今まで中央に座して動かなかった死神騎士がベルトに奇襲を仕掛けてきた。最初の一撃をかわしたベルトに死神騎士は面白い者を見つけたと言わんばかりに大鎌で襲い掛かってきた。

「くっ……………」

「先生!」

「死神騎士が動くとは!よし、皆の者奴らを蹴散らせっ!」

「「ははっ!」」

死神騎士が動いたことを好機を見た魔導士が指示を出したが、既に増援はワード達三人に思いつきり足止めを喰らっていた。魔導士は棺の封印を解くことに集中していて、そのことに気が付かなかった。

「はあああああ、ボルガノン!ギガウインド!」

「ぐわあああああ!」

「な、なんだこの魔法の威力は!」

「くらえー!『月光』!『天空』!」

「ぐはああああ」

「聖魔剣ホーリーデビルソード、烈火剣レイジングファイアーソード！」

「こ、こいつ修道士でないのか……ぐはっ！」

ウード達三人が中心となって、増援を蹴散らしていた。一方死神騎士とベレットはリーチで勝る死神騎士の大鎌に鋼の剣でベレットが何とか食い下がっていた。サリエルの大鎌を物凄い速さで操る死神騎士にベレットは鋼の剣で何とか受け流していた。

「くっ……。」

「愉悦……愉悦なり……」

「流石の先生もリーチの差で苦戦してしまっているか……」

「……セレナ、アズール！あの死神騎士を抑えることはできるか？」

「問題ないね。あのような相手だったら……本気を出せそうだね……。」

「そうね……分かったわっ！」

「ならば、頼むっ！いくら先生でもこの場では不利だからな！」

「了解！」

デIMITリの命を受けた二人は狭い空間で何とか死神騎士を抑えているベレットのもとに向かった。

「せいっ！」

「むっ……貴様ら……」

「ベレト！ここはあたしとアズールに任せて制圧して！」

「……わかった。任せたぞ二人共！」

「大丈夫だよ！……リヨウマさんに比べたらこんな男強くないしね……」

「それを言ったら、スメラギ王に比べたら大したことないわこんな男！」

暗夜王国時代に死神騎士よりも化け物であったリヨウマやスメラギと戦ったことがある二人は全く臆せず、死神騎士と戦いだした。本気の戦いを行う二人に死神騎士は押されていた。

「す……すげえな。あの化け物を二人で追い詰めてるぞ……」

「ぼさつとするなシルヴァン！……言いたいことは分かるが今は制圧に集中しろっ！」

「はいはい、さてと……あいつらに負けてられねえな！」

「それにしても、地の利が彼方にあるとはいえあそこまで戦いなれているとはな……」

青獅子の生徒はアズールとセレナの戦いぶりに驚いていたが、デイミトリやフェリクス、スズの叱責で目の前の制圧に集中しだした。

「……貴様等ほどの強き者がいようとはな……」

「一気に行くわよっ、アズール！」

「了解だよ、セレナ！」

「なんだ……この連携攻撃は……」

「デュアルアタック!!」

セレナとアズールは息の合った連携攻撃で死神騎士を追い詰めていった。流石の彼もこの狭い空間では動きづらいためか競り負けた。流石の死神騎士もこの狭い空間では動きづらかつたらしく競り負けると速やかに転移陣を起動した。

「……………!」

「あつ!二人が競り勝った!」

「……………凄い……………あれが二人の連携攻撃……………」

「おいおい、あんな隠し玉持ってたのかよ……………」

二人が死神騎士に勝利した様子は青獅子の面々は目撃していた。

「……………良き邂逅だ……………。逸楽、見つけたり……………」

「ふうつ……………引いたみたいだね……………」

「……………つて何か落としていったわね……………」

ベレトやアズール達といった強者と出会えた死神騎士は満足そうに撤退していった。しかし、死神騎士は何かを落としていったためセレナはそれを拾った。確認しなかったが、戦闘中であるため棺の方に視線を向けた。

視線の先にはベレトが魔導士を既に追い詰めていた。更に他のみんなも既に大半を

制圧を終了していた。

「手遅れよ……………！ 封印はすでに解かれた！おぬしらなど……………な!? この剣は……………」

謎の魔導士は謎の剣を取り出して困惑していた。それを見たベレトは一気に畳みかけた。

「……………はあああつ！」

「うおつ！ぐつ……………ファイア！」

「ふんつ！」

魔導士から剣を奪いかえしたベレトは悪あがきに魔法を放つ魔導士の攻撃を次々に斬り捨てていった。そして、魔導士はシールドを張って身を守ろうとしたがベレトに一閃されて倒れた。

「……………あの剣……………何か光ってない？」

「そうだね……………カムイ様が夜刀神を覚醒させたときに来ている気がするな……………」

「……………あれよりは光り方は薄いけどね……………」

ベレトが謎の剣を光らせた光景を見たアズールとセレナは、かつて透魔王国でカムイが夜刀神の真の力を解放した時のことを思い出していた。勿論アレに比べると光などは薄いですが神器が覚醒したように二人には見えていた。そして、同じことを近くにいたウッドも感じているのであった。

「侵入者はここか!? ……つて、あれまあ。だいたい片づいてんな。者ども！ 生き残ってる侵入者どもを、残らずふん縛れ！」

「ははっ！」

遅れてカトリーヌが教団兵を連れて聖廟にやってきた。しかしその時には青獅子の生徒によつて粗方制圧されていたため、残党をセイロス教団兵は取り押さえていった。逃亡した死神騎士を除いた生き残っていた連中は取り押さえて青獅子の生徒は任務を達成するのであった。

それからしばらく時間が経つて、女神再誕の儀が終了してのち、デイミトリがベレトと共に青獅子の学級に戻ってきた。

「先生、殿下！ 結局どうなりましたか？」

「ノワールの危惧していたとおりに中央協会の司祭たちの一部が西方教会と手を組んで今回の一件を主導していたらしい。」

「セレナが持つてきた証拠が役に立ったのかしら？」

「ああ、セテスさんが提示したら何も反論せずにレア様を罵るだけだったな……」

西方教会が主導で起こした今回の一連への流れは、事前に知っていたためか青獅子の面々は特に驚いていなかった。

「そうそう、死神騎士といったか？ 襲撃を指揮していた奴の行方は、ようとして知れない

「まもらしい。」

「まあ、転移で逃げましたから厳しいですよね……」

「しかも仮面をかぶっていたしねー!」

「しかし西方教会は、なぜこのような……?」

「セイロス教も一枚岩ではないということだ、ドウドウー。教団の運営はガルグⅡマク主導で行われる。公会議の場でも、西方教会の発言権は弱い。かねてから西方教会は、中央教会への不満を募らせていたのだろうな。」

「やれやれ、いつの時代も権力闘争かよ……」

西方教会が中央教会に対して起こした騒動が権力闘争と知ってブレデイは呆れ果てていた。

「まあ、そういうなって……お前の故郷もそうなんじゃねえか?」

「完全に否定は出来なさそうね……」

「そういえば、先生は今回の一件があるまで西方教会と東方教会を知らなかったのですよね?」

「ああ、この一件があるまで知らなかった……」

「イーリス聖王国から来た六人はともかくとして珍しい人だな、先生も。このフォドラに生を受けて……セイロス教と関係せずに生きてこられたなんて、信じがたいものがあ

る。」

「……大司教様は、なぜ先生を登用したのだろうか。」

「あの……西方教会の人たちはみんな、レア様に殺されてしまったんですよ……。」

「多分、レア様に歯向かおうとした上層部だけじゃないかな？」

「そ、そうですよね……。」

西方教会に知り合いがいるらしいアツシユは心配したが、腐敗した上層部だけだと知って安心した。

「でも仕方ないことだわ。教えに背くのは決してやってはいけないことだもの……。」

「……相容れぬ者は討つしかありません。ですが先生、私は……。」

生徒たちの中にも意見が割れていて今回の一件は賛否両論だったみたいであった。

「……まあ、割り切りすぎるのもよくないけどな……。」

「……？ウード何か言ったか？」

「ふっ……問題ない。精霊と交信していただけだ……。」

「……相変わらずだな……。」

ウードは自分が呟いた言葉を直ぐに誤魔化した。近くにいたアズールは彼の意図が分かっていたため何も言わなかった。ただし、青獅子の面々にはウードの発言に呆れられていたが……

「ここにいたか、先生。大司教から話があるそうだ。来てくれ。」

今回の一件に関して青獅子で話し合っているとセテスがやってきてベレトを連れて行った。その時間帯は授業も終了している時間帯であったため、しばらく青獅子の面々で話し合った後解散するのであった。

白雲の章 天帝の剣

女神再誕の儀襲撃事件から一夜明けた次の日……

偶々教室に向かった青獅子の面々が教室に入るとベレットがいた。そしてその手には聖廟にあった天帝の剣を持っているのであった。

「先生、その剣どうしたんだ？」

「レア様から預かった。正しいことに使うようにという警告は受けたが……」
「すっげえっ……天帝の剣を継承したのかよ……」

「しかし、その剣は…解放王…ネメシスが使っていた武器なんだったな？」

「聖廟のときに赤く光っていたし適合しているんじゃないー？」

「そういえばそうだったな……」

「まあ、先生ならその剣も扱えるんじゃないかな？」

青獅子の面々はベレットが持ってきた天帝の剣を前に会話が弾んでいた。

「そうそう、一端その剣がどういった物か見せに行つたいんじゃないか？」

「ウードの言うとおりだ。そいつが役に立つか分からないから……」

「そういえば、大修道院にある鍛冶屋って結構博識だったな……」

「そうね。でも、よく武器を壊して怒られているデイミトリの姿が浮かぶわね」

「あ。そういえば、休日に偶に鍛冶屋から怒号が聞こえてきたわね……。」

「け、結構デカい声だったわね……。よくカスパルが怒られていたけど……」

「確か……ゴジヨウだったか……。そうだな。行ってみるか……」

「今日は休日だし俺らも行かせてもらおうぜ」

「……やれやれ野次馬根性か……」

ベレットは野次馬根性を丸出しの青獅子の面々に呆れていたが、同行を拒否しなかつたので彼らはベレットと一緒に鍛冶屋に向かうのであった。

◇◇◇◇◇

鍛冶屋に着くと中から怒号が聞こえてきた。

「貴様また武器壊したのか!? わしらをナメとるのかああん!？」

「……凄い怒号ね……」

「相変わらず凄い声だ……」

怒号のした店内を覗いてみると見覚えのある人物がハンマーを持った人物に怒られていた。

「……あれは、シルヴァン?」

「見た感じシルヴァンが武器を壊してゴジヨウさんに怒られているみたいね……」

「あつ、イングリット！いいところに来たつ、助けてくれー！」

ゴジョウに怒られているシルヴァンがイングリットの姿を見た途端に助けを呼んできた。

「悪いけど…偶には自分で何とかしなさいよシルヴァン……。」

「おいおい、それはないだろうがよ!？」

「ん!?ブレードット王子か……まさか、貴様も武器を壊したんじゃないだろうな……。」

「その節は済まなかつたなゴジョウ殿。今回は別件でゴジョウ殿に用があつてきた。」

「別件だあ……つてそこにいるのはジェラルトの倅か……そうか……成程な。天帝の剣について調べに来たつてところか……。」

「まだ言つてねえのにそのこと知つてんのかよ……。」

ゴジョウはベレットを見た途端に天帝の剣について調べに来たと察してくれた。

「ジェラルトの奴から天帝の剣をレア様から預かつたと聞いたからよ。倅が俺のところに来ると来たらそれしかねえだろう?。」

「ジェラルトさんはゴジョウさんに話していたのね……。」

ベレットの父であるジェラルトがゴジョウに事情を昨日のうちに説明していたおかげで彼の理解は早かつた。

「さてと、改めて名乗ろうか。俺はゴジョウⅡフォルジュロ。市場の鍛冶屋店主が引退

したところを大司教にスカウトされて、娘と一緒にガルグマクに引越してきた。宜しく頼むぞ先生。」

「ベレトⅡアイスナーだ。よろしく頼む。」

「さてと、シルヴァンの馬鹿垂れは置いておいて、」

「……………ふう……………助かった……………」

ベレトが来たお陰でシルヴァンに対するゴジョウウの怒りは一端治まったようであり、そのことにシルヴァンはほっとしていた。

「お父さん……………？誰か来たの？」

「フウロか、ちようどベレト先生が来てるぞ。」

「えっ！もしかして、天帝の剣を持ってきているんですか!？」

シルヴァンがほっとしたところで奥から一人の少女が此方にやってきた。

「むっ、貴様は……………武術大会に出ていた炎の眷属か……………」

「……………その変な紹介は止めてほしいな……………」

「君は……………たしか……………」

「あっ、改めて名乗らせていただきますね！それでは、私の名はフウルⅡフォルジュロです。鍛冶屋ゴジョウウの娘です。」

「……………顔は似ていませんね……………」

「あつ！私は養女なんです！だから似ていなくて当然ですよ！」

「なるほどね。養女だったのね。」

「……その割には怒った時はそっくりだな……」

フウルがゴジョウの養女と知って青獅子の面々は容姿が似ていないことに納得した様子を見せた。しかし、シルヴァンはその割には怒った時がそっくりだと呟くのであった。

「まあ、俺らのことはともかくとしてだ。天帝の剣を貸しな。」

「いきなりだな……」

「今現在俺が知っている情報を教えてやってもいいが、もう少し正確な情報がほしいとは思わんのか？」

「まあ、私たちも詳しい情報がほしいです……先生、ここは一度預けてみては？」

「ああ。情報をくれるというなら貸し出そう。」

「ありがとうございます。……これが天帝の剣……この手で触れられるなんて、感激です！私、士官学校に入学して良かったです！」

「ほう……随分と変わった作りだな……」

フォルジユロ親子はベルトから天帝の剣を受け取るとそれぞれ調べだした。かなり熱心に調べだしたので青獅子の面々はこれは時間がかかりそうだと思っただけで一端解散し

た。

天帝の剣を預けてから三時間後食堂で待機していた青獅子の面々はゴジョウに呼ばれて鍛冶屋に戻っていった。しかし、途中で用がある人もいたためか一部は参加しなかった。

「おつ、来やがったな」

「ええ、ゴジョウ殿。それで何かわかりましたか？」

「まあ、ほんの少しだがな。俺はこいつを扱うことはできねえから限度つてもんがあつたがな。」

「それでもかまわない。」

「そんじやあ、元々俺が知っている情報とあわせて説明していくぞ。」

ゴジョウは天帝の剣を火事場台に置くと言明しだした。

「まずはこいつは、解放王、と呼ばれた英雄ネメシスがかつ使用していた剣であることは知っているな？」

「ええ、女神よりその剣を授かって邪神を退けた男ですよね？」

「ああ、だが邪な心に支配されてしまって聖者セイロスに討たれた男だったな？」

「タルティーンとの戦いですね？教科書にも載っていることです！」

教科書にも載っているセイロスとネメシスの戦いについて一同はおさらいをした。

「まあ、ネメシスに関してはそれくらいにしておこうか。奴が使っていた天帝の剣の説明に入るぞ。」

「ああ、よろしく頼む。」

「まずこの剣に関してだが、英雄の遺産として……何か足りないと思わんか？」

「そういえば、紋章石がはめ込まれていませんね。」

「紋章石？」

「うーん、私ではうまく説明できないのでハンネマン先生に聞いたほうがいいと思います。」

「逃げたわね……」

紋章石が何かノワールが疑問を投げかけたが、イングリットはそこまで詳しく知らない様子でハンネマンに聞くように逃げた。

「……まあ、紋章に関してはハンネマンに聞きな。とりあえず、大事なものはその紋章石がないということだ。」

「……もしかしたら、レア様が先生の實力を見極めるために外したのかも……」

「アズール君の推測どおりだと思うよ。ネメシス以来にこの剣に適応する人物が現れた。見極めたいと思うのは当然だよな。」

その後も紋章石がない理由を議論しあつたが、レアがベレットを見極めたいと思つて外

したという結論になった。

「さて、紋章石に関してはこちらくらいにして……この剣に関してだが、実際に使ってる場面を見たことがねえが……鞭のように刃が伸びる仕組みをしているな……」

「つまり、蛇腹剣ということか？」

「ああ、どうやって作られたかは知らんが相当扱いが難しい武器だな……」

「ほかに分かったことはあるか？」

「あとは……この武器はお前さん以外には扱うことはできない。」

蛇腹剣であること意外に変わったことがないかベレットが聞くとゴジヨウはこの剣はベレット以外に扱うことはできないと断言した。

「……英雄の遺産はほかの人にもただの武器としてなら使えたと思うが……」

「実は俺は紋章もちだね。蛇腹剣であることが分かった後少し振るってみたんだ。」

「……もしや、蛇腹にならなかつたのか？」

「ああ。理由はわからねえが、紋章をもっている俺でできないのだから先生以外には使えないはずだ。」

「うーん。いったいどうしてかしらねー」

「そこまでは知らん。」

メルセデスがゴジヨウに問いかけたが、彼は知らんとそっけなく答えた。それを見た

フウルが補足した。

「す、すみません先生。英雄の遺産を調べるのは鍛冶屋でも難しいことなんです……」

「……つまり分からないということか……」

「すまんな、英雄の遺産は構造などが不明な点が多すぎる……後はお前さんたちで見つけてもらうしかない……」

「いや……レア様が見極めたいというのならば自分で見つけ出すさ」

ゴジヨウとフウルが申し訳なさそうにしながら天帝の剣をベレトに返却した。英雄の遺産に関してよく知っている面々以外は微妙な表情をしながら、その場を離れるのであった。その後は休日の最中であつたためそれぞれのやることをするために解散するのだった。

◇◇◇◇◇◇

(おまけ アツシユとリアーシア)

ベレト達がゴジヨウの元に向かって次の日……

アツシユは大聖堂で祈っていた。西方教会が起こした一件で知り合いが西方教会にいるため、彼女の無事を祈っているのであった。そんな彼に後ろから聞き覚えのある声があった。

「……アツシユ?」

「えっ……リア……？」

「アツシユ!!」

謎の美少女はアツシユに駆け寄ると思いつきり抱きしめた。

「ちよ……リア……落ち着いて……」

「おいおい、アツシユの奴……あんな美人と只ならぬ関係かよ……」

「正直言うと羨ましいね……」

「えつと……ここは……大聖堂ですから……落ち着いて……」

「そうね。一先ず落ち着いた方がいいと思うわ」

偶然その様子を見ていたシルヴァンとアズールはにやにやしながらその様子を生暖かい目で見ていた。アツシユと同じようにその様子を見ていたメルセデスと金鹿のマリアンヌは祈りの場で抱き着いている二人を止めようとしていた。

「あつ……ごめんなさい……アツシユ……」

「いいよ……リア……それにしても、フォドラ語が話せるようになったんだね!」

「ええ、あなたと話したかったから東方教会で頑張っていたのよ!」

「東方教会!? 西方教会から移っていたんだ……」

「色々あつてね……あつ、ごめんね。とりあえず食堂で話しましょう!」

「そうだね……既に野次馬もいるけど問題ないかい?」

「……あなたがいれば大丈夫と思うわ……」

生暖かい目で見ているシルヴァンとアズールを始めとした野次馬連中を連れて、二人は食堂に移動した。

食堂に着くなりシルヴァンがアツシユに聞いてきた。

「おいおい、アツシユ。誰だよその美しいお嬢さんは!?」

「詳しく聞かせてもらおうかな!」

「お、落ち着いて……二人共……」

物凄い勢いで問いかけてきた二人にアツシユはたじたじになっていた。その様子を見た謎の美少女が話し出した。

「アツシユが困っているから止めて……自己紹介くらい私がやるわ!」

「だったらお願いしちやおうかしら〜」

「……私も気になりますわ!」

「……!?フレンさん!」

「えっ?!?いつの間に……」

いつの間にかフレンがアツシユ達のテーブルにやってきていた。よく見ると後ろにはノワールとリシテアも野次馬として来ていた。

「あつ……リシテアさんにノワールさんも……」

「ノワールからお菓子を貰っていたらあんたらがいたから来ただけよ。」

「お菓子のお裾分けをしていたら、ちよつと気になって……」

「これで3人増えたけど……大丈夫かいリア？」

「ええ、問題ないわアツシュ。」

「そ、それじゃあ。私が作ったお茶菓子も置くわね。」

ノワールが話しながら摘まめるようにお茶菓子を置くと謎の美少女は話し出した。

「私はリアーシア、最近大修道院の食堂で働きましたわ。そして、アツシュの幼馴染よ。」

「すっげえ美人な幼馴染だな！羨ましいぞコノヤロー！」

「アツシュにこんな知り合いがいたんだね……」

「でも……シルヴァンさんにはイングリットさんがいますよね……」

シルヴァンは美少女であるリアーシアが幼馴染のアツシュに嫉妬していた。アズールは興味深いといった感じであり、マリアンヌはこっそりとシルヴァンにツツコミを入れていた。

「リアは今から10年前に霧の中を彷徨っていると場所を発見して保護したんだ。それから僕たちは仲良くなって、僕の家族と一緒に暮らしていたんだ。」

「ま、もしかしてあの霧の中を彷徨っていらしたの!？」

「ええ、突然の台風に巻き込まれてテリウス大陸からフォドラに飛ばされてしまったわ

……」

「台風に巻き込まれてしまったんですね……」

「そういえば、テリウス大陸って聞いたことないですね。」

「リアが言うには、ここから離れた場所にあるみたいだよ。」

「なんか……最近どこかで聞いたことがある事情ですね……。」

リアーシアの故郷であるテリウス大陸に関しては幼馴染であるアツシユも離れた場所にあることしか知らない様子だった。アツシユの言葉にリシアは最近何処かで聞いたことがある反応を示した。

「ふむ……テリウス大陸か……」

「そういえば、ワード達はイーリス大陸出身だったわね〜」

「そういえば、そんなこと仰っておりましたね。」

「どつかで聞いた話と思ったらアズール達だったか……」

シルヴァン達はワード達と少し似た事情であることを思い出したのであった。

「テリウス大陸……もしかして、勇者アイクの伝承に出てくる大陸のことかな？」

「あ、そういえばそうだったわね。」

「勇者アイクを知っているの!？」

テリウス大陸から勇者アイクのことを思い出したアズールとノワールにリアーシア

が少し驚いた様子で声を掛けた。

「僕やノワールはイーリス大陸から来たんだ。」

「アイクさんの子孫であるバリスさんとも知り合いよ……」

「えっ、バリスさんと!？」

「……話についていけねえな……」

「仕方ないですよ。私達は知らない大陸ですから。」

「あつ、勇者アイクってシンシアから借りた英雄物語の人物だったね!」

覚醒組とリアーシアの会話にシルヴァン達が付いていけない一方で、アツシユはシンシアから借りた英雄物語にアイクの名前があったことを思い出していた。

「勇者アイク……そんな素晴らしい方がいらしたのですわね……」

「勇者アイクで思い出したけど、君ってかつてアイクと共に戦ったリアーネ王女に似ているよね?」

「リアーネ様も知っているのね。ええ、私はリアーネ様の子孫よ。」

「よく分からんが、リアーシアはそのリアーネという人物の子孫……ってことか?」

「あつ、ごめん。置いてけぼりにして……うん、そうみたいだね。」

ここでアズール達はシルヴァンに声を掛けられて置いてけぼりにしていたことに気が付いた。

「あ、もしかしてリアーシアは獣石で変身するのかな？」

「ええそうよ。でも今は持つていないから見せられないし見せるつもりはないわ。」

「まあ、アツシユに先に見せたいでしょうから仕方ないですね。」

「ところで……獣石ってなんですか？」

「獣石っていうのは、特別な血を引く種族が戦闘の姿に変身するために必要なアイテムのことだね。僕の知り合いも獣石を使って兎の姿で戦っていたな……。まあ、一人は超絶ビビりだったけどね……」

「兎が戦えるのかよ……」

獣石を知らないフレンの質問にアズールは簡単な説明をした。姿を見たことがないシルヴァンは想像できないといった表情をした。

「因みに私はセリノスの民と呼ばれる白鷺に変身することができる種族の人間よ。呪歌でみんなを助け、翼で作り出す風の渦で敵を倒すことができるわ。」

「だから台風に巻き込まれてフォドラに来たのですね……」

「それにしても、フォドラの外には色んな種族がいるのね〜」

リアーシアの話を聞いてメルセデスはまだ見ぬフォドラの外に憧れを抱いた。

「まさか……私やお兄様、レア様やおじ様のような方が他にもいたのですね……」

「フレン？何か言いましたか？」

「いえ、なんでもありませんわ。」

フレンは自分の眩きを誤魔化した。

その後はフレンがリアーシアとアツシユの恋事情などを聞いてきた。二人共顔を真っ赤にして否定していたが、悪乗りしたシルヴァンとリシテアに揶揄われた一面があった。その後もリアーシアのことで話が盛り上がって、セテスがフレンを探しに来たタイミングで解散するのであった。アツシユは幼馴染の無事が分かってほっとした様子を見せているのであった。ロナート卿の叛乱以降暗い顔をしていた彼が久しぶりに明るくなった瞬間であった。

白雲の章 ノワールの呪術

天帝の剣のことをゴジヨウに聞いてから二日後……

ベレトはレアとセテスから今節の課題を聞いた後、デイミトリと合流して青獅子のクラスに戻ってきた。このとき二人の同行者が彼らとともに教室に入ってきた。

「おや？殿下に先生！」

「どうやら課題がわかったみたいだね……」

「あれ？後ろの二人は……？」

「ちっ……」

青獅子のクラスに入ってきた二人を見てフェリクスは舌打ちをした。二人とも彼がよく知る人物であつたからだ。

「フェリクス様……ご当主様を前に舌打ちをするとは……よろしくごいませんよ。」

「……お前がいるとはな……」

「私がいたらまずいことでもおありでしょうか……？」

「誰？」

舌打ちをしたフェリクスに謎のメイドが注意して、それでも態度を変えない彼にメイ

ドが毒舌を吐く様子を見たシンシアは事情を知っているであろうイングリットに聞いた。イングリットが答える前に男性から名乗りだした。

「すまないな。……倅の態度を見るたびいつもこうなるんだ……。さてと、初めてのものも多いだろうから名乗らせてもらおう。私の名はロドリグⅡアシルⅡフラルダリウス。そこにいるフェリクスの父だ。」

「これは失礼しました。では、僭越ながら私も名乗らせていただきます。シエファイⅡサウサンプトンと申します。フラルダリウス家にお任せさせていただきます。ありがとうございます。」

「ロドリグは父の古い友人でな。昔から懇意にしていた信頼できる人だ。」

「……それは別にいい。それよりなぜ親父殿がここにいる？」

あまり、クラスで父親と話したくないフェリクスはさっさと本題を話すように促した。しかしどう見ても恥ずかしくなっているようにしか見えなかった。

「……主人様。どうやらフェリクス様は照れている様子です。」

「おい、シエファイ！」

「ふむつ、確かにこの場所で父親に会うのは気まずいか……。」

あからさまに恥ずかしがっているフェリクスの様子を見た青獅子の面々はすこし驚いていた。

「フェリクスもあんな顔するんだね……」

「そうですね。シエファイがいると結構賑やかになるんですよ……。」

「まあ、俺に対する扱いはイングリット以上にひでえがな……」

「ああ、見覚えのある顔がいると思ったらシルヴァンでしたか、てつきり害虫かと思つてしまいました。」

「……こんな感じなんだよな……。」

「あはは……。」

シエファイはシルヴァンを見つけると容赦なく毒舌を吐いた。その様子を見たアネットは乾いた笑い声を出していた。

「……脱線しているようだから。俺から本題を話そう。」

「まあ……それがよさそうね〜」

脱線して話が続かないことに呆れたベレットが本題を話し出した。

「彼らがここにいるのは今節の課題がファーガス貴族にかかわっているからだ。」

「……もしかして、馬鹿兄貴がやらかしましたか?」

「鋭いなシルヴァン……。そうだ、君の兄であるマイクランが英雄の遺産を盗み出した。」

ベレットがファーガスが関わっているということをつた途端に、シルヴァンは今節の

課題のないように察しがついた。

「彼は英雄の遺産を盗み出した後、盗賊団を結成して各地で暴れまわっている。もはやゴートイエ家だけの問題ではなくフラルダリウス家の領地でも問題が起こってしまっているのだ。」

「あの害虫がやらかしたことで、民が不安になっているためご主人様と私は修道院に参らせていただきました。」

「……つたくあの馬鹿やろうが……。」

「シルヴァン……。」

「悪い、ちよつと風に当たってくる。」

シルヴァンは気分が悪くなつてしまつて教室から退出していった。その様子を見た青獅子の面々は何もいえなかつた。

「もしかして盗賊団の討伐が今回の課題ってことか?」

「ああ。それとマイクランが盗んだ英雄の遺産も回収してくるようになつた。」

「君たちが盗賊を討伐したことは卒から聞いている。だが、マイクランは将の器がある人物だ。ゴートイエ家とフラルダリウス家が彼らを抑えるので君たちは盗賊団の本拠地に向かつてほしい。」

「ファーガス国内の問題でもあるが、英雄の遺産は悪しきものが使うと大変なことに

なってしまう。どうか協力してほしい。」

「「はいっ！」」

デIMITリの頼みを聞いた青獅子の面々は承諾した。

「……でも、将の器か。ロドリグさんが言うんだから相当指揮に優れているのでしょ？」
「ええ、あの害虫はゴーテイエ家にいた時は軍隊長としての素質を発揮しておりました。」

「軍隊長か……これは警戒しながら戦わないとまずそうだね。」

「……彼らの討伐は君たちに一任する。十分注意しておいてくれ。……それではフェリクス、またな。」

「……ああ。」

「それでは皆様これにて失礼いたします。」

ロドリグは青獅子の面々に警告をするとシエフィと共に去っていった。二人がいなくなつた後シルシアが唐突に呟いた。

「それにしても、シルヴァンのお兄さんは勘当されたんでしょ？余程素行が悪かったのかなー？」

「勘当された理由を知らないのっ!?!……って、そうかフォドラの外から来たんだっただね……。」

「……済まないが、そこら辺に關しては色々と事情があるんだ。マイクラン討伐の時にも話させてもらうよ。」

「……どうやら、フォドラ大陸における根深い問題があるみたいだね……。」

「まあ、其処等に關しては俺らでも調べさせてもらうわ。」

マイクランが勘当された理由に關して青獅子の面々は知っていたが、今は話そうとしなかった。シンシアも不満気であつたが、後で話すと言われたのでその場は引き下がった。

その後はベレトの授業に戻つたが、その日はシルヴァンは教室に戻つてこずに寮に戻つていった。血のつながつた兄を討つということに気持ちの整理がかかることを察した青獅子の面々はそつとしておいた。

◇◇◇◇◇

マイクラン叛乱の話の聞いてから少しするとシルヴァンはいつもどおりに振舞つていた。しかし、イングリットやフェリクスから見ると無理しているように見えていた。しかし、彼がいつも通りに振舞う理由も理解しているので何も言わないでそつとしておいた。

そんなある日ノワールはアネットに頼まれてある物を作っていた。彼女が得意とするお守りである。その様子を興味深そうにメルセデス、アネット、リシテアの三人が見

ていた。

「え〜つと、これをこうして……と。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……そんなにジーツと見られるとちよつと居心地が悪いんだけど……。」

「あら、ごめんなさいね〜。」

「ごめん、ノワール。ちよつと魔導学院でも見たことがない物を見たからつい……。」

「私もこんな魔法を見たことがないのでつい観察してしまいました……。」

三人にとってはノワールが行っている魔法は未知の領域であるため興味深いものであった。そのことは承知している彼女であったが、やはり見つめられると気まずいものがあるのであった。

「……まあ、母さん譲りの呪術だからね……。気持ちには分かるけど……もう少し離れてくれない?」

「あつ、ごめん。」

「……そういえば、ノワールのお母様であるサーリヤさんは変わった人なのよね?」

「ええ、でも母さんは魔法と呪術の天才で……父さんやクロム様の役に立っていたわね

……」

「なるほど……潜在的な魔力の素質は感じていましたが……あんたの母親譲りなんです
ね……。」

「……そうね。」

「どうやらお母さんから前に言われていたんだね……。」

とある事情で魔力に敏感なりシテアはノワールの潜在能力を母親譲りであることに
気が付いていた。前にそのことをサーリヤから聞かされていたノワールは否定をしな
かった。

「でも、母さんは呪術を多くは教えてくれなかったわ……。」

「えっ!? 潜在能力があるのに教えてくれなかったの!？」

「……何か事情がありそうですね……。」

「もしよかったら、教えてくれないかしら〜?」

サーリヤがノワールに呪術を多くは教えなかったことに三人が驚いているとノワー
ルが説明しだした。

「……そもそも呪術という魔法は危険なものが数多いわ。あなた達が知っている闇魔法
は此方では基礎として習うものよ……。」

「……もしかして、あんたは闇魔法を一通り習っているのですか?」

「ええ、主に母さんから習ったわね……。」

「……今も闇魔法は使えるのですか？」

「ええ、ある程度は使えるわ……。」

「ふふつ、よかつたら今度見せて頂戴ね。」

「分かったわ。丁度練習したかったところだから、今度ね……。」

「うーん、この感じだとウードよりもできる気がするな。」

闇魔法を一通り使えるというノワールに三人が闇魔法を見せてほしいと頼むと彼女も久しぶりに練習したいらしく快く引き受けた。

「さてと、ここからは集中させて……結構シビアな場所だから。」

「ええ、邪魔にならないように見学させてもらうわね。」

彼女が集中したいと言ったので、見学者三人は黙ってノワールの作業を見学しだした。

「……これをこうして……ここにこれを入れて……。」

「……………」

「……最後にここをこうすれば……よしっ、出来た！」

ノワールは完成したペンダントタイプのお守りをアネットに手渡した。

「一通りの作業は終わったわ。後はあなたの髪の毛を入れてから自分の魔力を込めて

……この修道院の範囲内にいたらアネットの探し人は見つかるわ……」

「分かった！……」

「さてさてどうなるのでしょうか……」

アネットはノワールからお守りを受け取ると自分の髪の毛をお守りにいれて、魔力を込めた。その様子をメルセデスとリシテアがドキドキしながら見守っていた。

「……反応ないわね〜」

「……手順は間違っていないから……となると今修道院にいないかもしれないわね。」

「なるほど……外出中だから分からないのですね……」

「そっか……」

アネットはすぐに会えないことにガツカリした様子を見せた。その様子を見たノワールは修道院の地図を取り出してその上に小麦粉を振りかけた。

「ノワール？」

「どうして小麦粉を……」

「……ちよつとお守りを貸して？」

「ええ。」

「何をするのですか？」

「アネットの父さんがセイロス騎士団にいるならなんと名乗っているか、この小麦粉の

上に描くわ……。」

「そつか……あたしに見つからないように名前を変えている可能性もあったわね……。」
「確かに……アロイスさんに聞いた限りではギユスタヴという騎士はいなかったみたいだしね〜」

ノワールはアネットからお守りを受け取ると修道院の地図の上に置いた。そして何かブツブツと呪文を唱えだした。するとお守りが動き出した。

「お、お守りが動いた!?!」

「あれ……でも誰かの名前を書いていますね……。」

「え〜つと、ギ……ル……べ……ル……ト……ギルベルト?」

お守りが動いて描いた文字にはギルベルトと書かれていた。

「こ……これって……」

「アネットの父さん……ギユスタヴさんだったよね?」

「ええ。アンのお父様はギユスタヴというわ〜」

「……もしかして、ギユスタヴさんは今はギルベルトと名乗ってセイロス教団に仕えているのでは……」

「ほ、本当なの!?!」

ピンときたりシテアがギユスタヴがギルベルトと名前を変えていることに気が付い

た。それを聞いたアネットは興奮した様子を見せた。

「私の呪術の結果だとギルベルトさんは現在教団の任務で外出中ね。でも、戻ってきたらそのお守りに反応があるわよ。」

「そ……そっか。よかったあ……。」

「アン、お父様の居場所が分かってよかったわね〜」

「うん、ありがとうノワール!」

ノワールのお陰で探していた父親の場所が分かったことでアネットは大喜びをしていた。

「それにしても、ノワールの呪術は凄いですね……。」

「うん。父さんの居場所をこんなに早く見つけてくれるなんて……。」

「呪術というよりは呪まじないだけだね……それでも、アネットの役に立ってよかったわ。」

「うん、ありがとう!」

「それにしても、大変興味深いですね……。」

リシテアはノワールの呪術に興味を惹かれていた。それを見た彼女はリシテアに提案をした。

「よかつたら、今度簡単なものになるけど……すこし教えようか?」

「いいんですか!?!」

「ええ、簡単なものでよければだけど……。」

「ぜひお願いします!」

「あつ、それはあたしにも教えて!」

「わたしにも教えてほしいわね」

「それじゃあ、今度教えるわね。」

リシテアに簡単な呪いまじなを教える話になったら、アネットとメルセデスも希望した。ノワールは快く了承するのであった。その後、四人で呪術の道具を片付けているとお守りが突如光りだした。

「あれっ!?お守りが光っている……?」

「あつ、ギルベルトさんが修道院に戻ってきたみたいね。」

「本当!」

「あつ、行くなら私も付き合いますよ。でも先に道具を片付けてからにしましょう。」

「アン、気持ちは分かるけど先にお片付けをしましょうか」

「うん、それじゃあ。さっさと片付けましょう!」

四人は手分けして道具を片付けていった。途中アネットがドジを踏んで転ぶ一面があつたが、何とか片付けた。

「えっと、お守りは……まだ光ってるね!」

「それじゃあ、ギルベルトさんを探しに行きましよう」

四人はお守りが導くままにギルベルトの場所へと向かった。大広間を抜けて教員の個室の方へお守りは導いていた。

「……あれ？ここって……ジエラルトさんの部屋だよな？」

「ここにいるというのですか？」

「覗いてみましょうよ」

四人がジエラルトの部屋をのぞき込むとジエラルトが教団の騎士と話していた。

「……そうかい。やはり、マイクランは将の器だったってことか……」

「ええ……彼がこのようなことをしてしまったことが残念ではありません……」

「そういえば、お前さんは元々は王国の騎士だったな……」

マイクランの一件に関して二人は真剣に話し込んでいた。

「あれは……やはり、父さん……」

「あの人がギルベルトさんか……会わなくいいのアネット？」

「真剣に話しているみたいだし……あの話が終わってからのするよ……」

「それがよさそうですね。……って押さないでください！」

「わわっ！」

四人は二人の会話をもっと聞こうと身を乗り出しすぎて、部屋の中に入ってしまっ

た。

「……さつきから誰かが覗いていると思ったらお前等か……」

「流石は歴戦の傭兵……私たちに気が付いていましたか……」

「父さん！」

「……アネット!?!……どうしてここに……」

「やっと思つけたよ、父さん！」

誰かが覗いていることに気が付いていたジェラルトとギルベルトであったが、ギルベルトは予想だにしない人物がいて動揺した。

「……つておいおい。どうなつてやがるんだ？」

「実は。」

事情が理解できていないジェラルトにメルセデスが一通り説明した。

「……成程な。ギルベルトの娘か……ノワールの嬢ちゃんのか呪術でギルベルトの場所が分かつたな？」

「よく分かりましたね？」

「まあ、俺の勘だが……」

「流石はジェラルトさんですね……」。

ノワールの呪術と当てて見せたジェラルトに三人は感心していた。一方のアネット

とギルベルトは感情的になっていいるアネットの話をギルベルトは黙って聞いていた。

「父さん！黙っていないで何とか言つてよ……。」

「アネット……私は……。」

「……心配したんだよ！手紙も一通もよこさないで……あたしと母さんと伯父さんがど
んだけ心配したか……。」

「……連絡を取らなかつたことは済まないと思つていいる……だが……私はお前たちに合
わせる顔がないんだ……。」

「あの事件でランベール様を死なせてしまったこと？あたしと母さんを捨ててセイロス
騎士団に入ったこと？ねえ……答えてよ……父さん……。」

数年ぶりの親子の再会であつたが、連絡をよこさずに失踪したことを責めるアネット
の問いかけをギルベルトは申し訳なさそうに俯いていた。

「……まだ殿下とお前に対する償いが終わつたわけじゃない……。済まないが……任務中
だ……。」

「待つてよ……父さん！」

「すみませんジェラルト殿。レア様にもご報告せねばなりませんので……。」

「……ああ。だが、ちゃんと娘さんと話す機会を作れよ……。」

「ええ、失礼します。」

「父さん……。」

ギルベルトは逃げるようにジエラルトの部屋から退出すると大司教の部屋に向かつていった。その様子を見たアネットは涙を流しながら見ていた。

「……アン。一先ずは帰りましょう……あなたのお父様は健在だった……また話せばいいじゃない……」

「メーチェ……。」

「……両親と和解したい気持ちは私もよく分かります……。でも、感情的になっては彼を連れ戻すことはできませんよ……。」

「そうね……。そのお守りがあれば、近くにいるときはギルベルトさんがどこにいるか分かるわ……。話はゆっくりとした方がいいわよ……。」

「リシテア……ノワール……。」

一緒に来た三人に諭されたアネットは一先ず父が無事であったため、ゆっくりと話していくことを決意した。

「……うん。ありがとう三人共……。」

「それじゃあ、帰りましょうか……」

「もしよければ、食堂で四人でお菓子を作らない?」

「あつ、それはいいですね。」

「ふふっ、それじゃあ。行きましようか〜」

「あつ、でもアネットは周りをよく見てよね。」

「いったー！いつ！何でこんなところに木箱がー!!」

「……言われた傍からドジを踏んでますね……。」

その後は四人でお菓子を作ってたのしく過ごすのであった。久しぶりに父親に会えたアネットは心なしか安心した様子を見せるのであった。